
虚像の護衛 ルーフェイア・シリーズ¹²

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像の護衛 ルーフェイア・シリーズ12

【Nコード】

N3527I

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

反王道、「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 真が虚に、虚が真に。悠久の時を受け継ぐ中で、錯綜する思い。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第12弾。 前作とは一転、同級生たちとの冒険風味です。クセのあるキャラ2名ほども再登場♪ “夜8時過ぎ” 毎日更新です。携帯版は1行毎の改行or空行です

Episode : 01

R u f e i r

「えつと、ここまでなんだ……」

メモを片手に、教科書をひとつずつ見ていく。

確かめていたのは、試験の範囲だ。最初来た頃は想像もしなかったけど、シエラは思ってたより試験が多い。年に5回もやってる。

ともかくこの準備がけつこう大変で、時間がとられてしかたがなかった。

時計を気にしながら、急いでやっていく。早くしないと、自主訓練に行く時間がなくなりそうだ。

そのとき。

『ルーフェイア・グレイス、至急作戦室へ。すぐに来られない場合は、理由を即刻連絡してください』

「え、あ、はい、すぐ行きます！」

通話石から聞こえた声に、慌てて答えて教科書を閉じる。

——今日は訓練、ダメかも。

ただでさえ試験範囲の確認でもたもたしていたのに、そこへ呼び出しまでされたら、訓練島へ行く時間はなさそうだ。

同室のナティエス——ロア先輩は上級隊に入って個室へ移った——に書き置きをして、部屋を出る。

何で呼ばれたのかは、見当もつかなかった。そもそも作戦室に、あたしの学年で呼ばれること自体が珍しい。

作戦室はその名のとおり傭兵隊、特に上級隊の先輩たちと教官が

使うところで、任務の作戦立案をしたり指揮を取ったりする部屋だ。だからあたしなんて、入るどころか近寄ることさえない。それどころか傭兵隊の先輩だって、しょっちゅうは行かないだろう。

シエラの上級隊は、軍で言う士官の役もこなす。この間の病院テロはその典型で、上級隊の指揮で、一般兵に当たる傭兵隊が動いた。といってもふだんの派遣は人数が少ないことが多いから、上級でなくても学院からの指名で行くのだけど……。

寮からしばらく歩いて、ちょうど反対側の管理棟まで行く。作戦室はこの一階だ。

おそろおそろドアをノックすると、中から声がした。

「誰なの？ ちゃんと名乗りなさい」

「す、すみません！ あの、ルーフェイア・グレイスです……」

「あら、あなただったの。入っていいわよ」

促されて、入る。中に居たのは、春のテロ騒ぎのときのイオニア先輩と、ロア先輩だった。

「えっと、あの……」

イオニア先輩は、ちょっと苦手だ。いつも抱きしめてくれて優しいのだけど……独特の威圧感がある。

「ほら先輩、ダメですってば。ルーフェ怯えてますよ」

「え？ ああ、そういえばこのコ、そうだったわね」

つかつかと先輩が歩いてきて、あたしの頭を撫でた。

「あら、ちょっと背が伸びたかしら？ まあこの年で、小さくなくても困るけど」

「……うん」

大きくなったと言われると、なんだか嬉しい。

「やっぱり笑うと可愛いわ。食べちゃおう」

「ダメですっ!」

なんだかロア先輩、すごい剣幕だ。

「あら、ひがんでるわけ？　なら2人まとめて、面倒みるわよ?」

「お断りしますっ!」

何の話をしてるのか、よく分からない。

「ともかくルーフェは、返してもらいますから!」

「それはムリね。話が終わってないわ」

そういえばそうだ。話があるから呼び出されたはずなのに、その肝心の話を何も聞いてない。

不思議に思ってイオニア先輩を見上げたら、いきなり抱きしめられた。

Episode:02

「ふふ、可愛いわよね、そういうとこ。あとで遊んであげるから、待ってなさいね」

「ダメですつてばっ！！ それより先輩、話っ！」

ロア先輩が焦ったふうに、いきなり話題を変える。

「まったく、先輩に向かって生意気ね。」

まあいいわ、先に用を済まさないやいけないのは、たしかだものね」

言ってイオニア先輩が、あたしの顎に手をかけて上を向かせた。

「子猫ちゃん、アヴァン公国は分かるわね？」

「え？ あ、はい、この国の首都の、イグニールから海越えてすぐの、アヴァンですよね？」

他に聞いたことがないから、たぶんそうだろう。

「そう、そのアヴァン。じゃあ、その公爵家のことは知ってるかしら？」

「えっと……」

記憶をたどって思い出す。

アヴァンは公国で、治めているのは公王を筆頭とする公爵家だったはずだ。

「たしか最年長のアドルフアス＝クレメント＝ド＝ファレル卿が現公国王で……第一継承者が、息子のエイヴリー＝ホルスナー＝ド＝ファレル卿……？」

みんな名前が長いから、ちょっと記憶があやふやだ。

「さすが学年主席、よく出来たわね。でも今回関係があるのは、継

承権第二位のローウェル殿下のほう」

殿下といえば、去年護衛したあの殿下だ。

——でも、なんでだろう？

今年の建国祭はもう終わってるし、なんの関係があるのか見当もつかない。

「話が見えなかった？ まあこれは仕方ないかしら」
「すみません……」

謝りながらつい下を向こうとしたけど、先輩の指が顎にかかっていて、下を向けない。

なんだか辛くて視線をそらす。と、先輩が顔をあたしに近づけた。

「……！」

「先輩、なにしてんですかつー！」

ロア先輩の怒声。

「額にキスくらいで、よくもそんなに騒げるわね」

「そういう問題じゃないですー！」

あたしの頭越しに、言い合いが始まる。

「ともかくルーフェに、ヘンなこと教えないでください！ この子ちゃんと、カレシもいるんですから！」

「あら、そうなの。小さいのに案外しつかりしてるじゃない」

あたしのことみたいだけど、内容がよく分からない。

首をかしげると、イオニア先輩があたしの頭をまたなでて、話し出した。

「さて、遊びはこの辺で終わりね。

ルーフェイア、さっきの話の続きだけど、あなたに 殿下から名

指しで依頼が来たわ」

「あたしに、ですか？」

ますます分からなくなる。建国祭なら去年のことがあるから、「今年も」というのもあり得るだろう。でももう終わってしまったから、呼ばれる理由はなかった。

「そう、あなたによ。何でも向こうで儀式とやらがあつて、その護衛をしろつて来たわ」

「え……」

どうやらまた、前回と似たような話らしい。

——ちよつと、嫌かも。

殿下はけつこう好き勝手をするから、危険を呼び込んで困る。

「それで事前にエレニアとシルファ、それにロアから、あなたのことを聞き取り調査させてもらったところよ」

この言葉でロア先輩がここに居るわけが、やっと分かった。呼び出されて、ふだんのことなんかを聞かれてたんだろう。

Episode : 03

先輩が続ける。

「聞いた話と、前回の病院テロでの件から、あなたがこの任務に耐えられると判断したわ。

——命令よ。私と一緒にアヴァンへ来て、ローウェル殿下の護衛をなさい」

「……はい」

あたしはうなずいた。「命令」と言われたからには、拒否は出来ない。

「向こうからの依頼内容は、先ほども言ったとおり、儀式の間の護衛よ。具体的には、数日間野外での護衛ね。

それにしても野宿が儀式になるなんて、ほんと貴族のやることは理解不能だわ」

イオニア先輩、辛辣だ。

ただ話しからすると、要するにあの殿下と数日間、野外で一緒にすごせばいいだけらしい。だから護衛って言っても、食料の確保とかがメインなんだろう。

ともかく、そう難しい任務じゃないはずだ。

そんなことを思っていると、先輩が何か書かれた紙を出した。

「ルーフェイア、同行者を3名、ここから選んで頂戴。

試験結果なんかを考慮してこちらで選んだけど、相性もあるでしょうしね。最後はあなたが見たほうがいいわ」

「はい」

その場でざっと、リストに目を通す。

「あの、これ……7年生じゃ、ない……？」
学年が違うみたいで、知らない名前ばかりだ。

「ほら先輩、だから言ったじゃないですか。ルーフエは内気だから、同じクラスの子のほうがいいって」

「そうみたいね。あなたが正しいとは思わなかったわ」
先輩二人がそんなことを言う。

「人選のし直しね。まあ単なる野営みたいなものだから、7年生でもやれなきゃ困るわ。」

——ルーフエ、誰がいるかしら？」

「え？ え？？」

急に言われて、何のことが分からなかった。

「ああ悪かったわ、小さい子にこんな説明じゃアレなものね」

謝ってるんだろうけど……こう言われると、なんか複雑な気分だ。
先輩が話を続ける。

「ちゃんと説明するから聞きなさい。さっきも言ったけど、任務の内容それほどたいした話じゃないの。だからあなたが3名、好きな同行者を選んでいいわ。正直あなたが居れば、他は誰でも大丈夫でしょうからね」

「あ、はい」

なんだかよく分からないけど、友だちを選べってことらしい。

「あとでもいいのだけど、いま誰か思いつくかしら？」

「えっと、あの、イマドと……あと、シーモア。それと、シーモア行くなら、ナティエスも……」

考えながら答える。

「ちょっと待って頂戴。記録簿からいまの子たちのデータ……ロア、出るかしら？」

「出ますよ。てか先輩、このくらいの操作覚えてくださいってば」「うるさいわね」

イオニア先輩、魔視鏡の操作は苦手みたいだ。
代わりにロア先輩が、次々と記録を出す。

「ふうん、イマドゥザニエス……次席。シーモアって子が三席と。思ってたより妥当ね」

先輩が次々と品定めしていく。

「このナティエスって子はどうなの？ 成績を見る限り、Aクラスでは中ほどのようだけど」

「えっと、あの、シーモアの親友で……」

イオニア先輩の瞳が鋭くなった。

Episode: 04

「そんな理由じゃ、ちよつと許可できないわね」

「すつ、すみません！」

慌てて謝る。

「誰が謝りなさいって言ったのよ」

「ご、ごめんなさい……」

涙が出てくる。

「だーかーらー先輩、ルーフェにそうやっちゃダメですって」

「え？ ああそうだった、どうも忘れるわ。」

——子猫ちゃん、お姉さんが悪かったわ。さ、理由を教えてくださいませんか？」

自分でも変だとは思いつけど、こう言われて抱き寄せられると、なんだか安心する。

「それでその、ナティエスって子は？」

「あの、だから、シーモアの親友で……スラム育ちで、スリとか上手くて……」

先輩が苦笑した。

「聞かなかったことにしたほうが、いい話みたいね。」

まあいいわ、腕に覚えがある子なら、足手まといにはならないでしょ」

言って先輩が、あたしの額をつついた。

「その子たちを呼んで、話をしなきゃだわね。ロア、呼んでくれる？」

「だから先輩、こういう操作覚えましょうよ……」

「誰かにやらせれば十分よ」

イオニア先輩、なんだかすごいことを言ってる。

ロア先輩がため息をつきながら操作した。魔視鏡経由で通話石網に入って、イマドたちを呼び出すと、じきに扉がノックされる。

「イマド」ザニエスですけど、入っちゃっていいですか？」

声と共に、扉が開けられた。

「入っていいと言わなかったけど？」

「でも呼び出されたから、呼び出した誰かが居るんじゃないかなーかなーって。どうせ入りますし」

イマド、イオニア先輩にもぜんぜん平気だ。

そんなことをしてるうちに、シーモアとナティエスも部屋へ来た。

「なんだ、みんな揃ってるじゃないか」

「なになに？　もしかしてなんか始まるの？」

「静かになさい。」

まったく、下級生はこれなんだから。いくら珍しにしても、騒ぎすぎだわ」

先輩の辛辣な言葉が飛んで、さすがにみんなが口を閉じる。

「いいこと、黙って聞くのよ」

そう前置いてから、先輩がさっきの話をもういちど始めた。だいたいを聞き終えたシーモアとナティエスが、言う。

「要するに、まーたあの殿下のお守りってことか。こりゃ厄介だね」

「殿下、上から目線すごいもんね」

やっぱりこの二人、殿下が好きじゃないみたいだ。

——あたしのせいだ。

シーモアたちの名前を挙げたりしたから、好きでもない殿下の護衛を、しなきゃならなくなってる。

「えっと、その、ごめん……」

「え？　なんでルーフェが謝るの？」

「え、あれ？」

なんか違ったみたいだ。

「いや、だからさ。たしかに殿下はあんま好きじゃないけど、行くのがイヤだとはいってないじゃないか」

「そうそう。行けばお小遣いっていうか、臨時でお給料でるし」

「え？　お小遣い？」

初耳だ。

「やだルーフェ、もらわなかったの？　けっこう出たんだよ」

「そういえば……」

何か学院からお金がどうこう言われて、面倒だから口座にそのまま入れてもらったような気がする。

「まったく、金持ちはこれだから」

「ごめん……」

謝るあたしに、2人が笑った。

「気にしなさんな、いつものことじゃないか」

「そうそう」

慰めてくれてるんだろうけど、なんかちょっと複雑な気分だ。

Episode:05

「気にしなさんな、いつものことじゃないか」

「そうそう」

慰めてくれてるんだろうけど、なんかちょっと複雑な気分だ。

「でさ、お前ら何の話してんだ？ 内輪で盛り上がってねーで、説明しろよ」

「ん？ ああ、イマドは行ってないから知らないか」

訊かれてシーモアが答えた。

「アヴァンの殿下つてのが、すごいタカビーだね。顔合わせでいきなり——」

「いい加減になさい！」

イオニア先輩の鋭い声が飛ぶ。

「まったく、ほんとに下級生つてのはなっていないわね。その口、閉じておけないのなら縫い合わせるわよ」

怖いことを言う。

「いいこと、そういう話はここを出てからなさい。」

——命令よ、アヴァンへ行つて、殿下の護衛をするように。教官への許可は、私が取っておくわ」

厳しい声で言い渡されて、みんなでうなずいた。

「……返事は？」

「は、はいっ！」

迫力に、思わずみんなの——でもイマドだけわりと適当——声が揃う。

「よろしい」

イオニア先輩が満足げに言って、続けた。

「向こうとの交渉ごとや野営の準備は、今回はこちらでするわ。あなたたちにやれといっても、まだムリでしょうしね。

他にこちらから持っていく必要があるそうなものは、ここにリストアップしておいたから、各自チェックなさい」

先輩が言いながら、紙を配る。ざっと目を通すと、要するに武器弾薬といった、個人差の大きいものだった。

「今日のところは、これで解散よ。

部屋に帰って、必要と思われるものを今のうちに準備しておくこと。何か疑問点があったら、すぐに私に言うのよ。いいわね？」

「はい」

最後に釘を刺されて、おしまいになる。

「それにしても、殿下といっしょか。なんもないといいんだけどね」

「あ、それ言ってるかも」

作戦質を出て廊下を歩きながら、またその話になった。

「つかさ、マジで何なんだよそれ。その殿下っての、よっぽどアレなのか？」

「んー、アレっていうか……上手く言えないなあ」

言いながらもシーモアとナティエスが、去年のことをかいつまんで、イマドに説明する。

「……それ、すげーやなヤツって言わねえか？」

「うん」

あっさりとナティエスが肯定した。

「そんなと一緒にって、なんか冗談じゃねえな」

「ごめん……」

イマドたちの名前を挙げなければよかったと、心底後悔する。あたしはこのほうがいいけど……そのせいで、みんなが嫌な思いをするのは間違いない。

「その、あたし……先輩に、断るから……」

「え？」

聞き返される。

たしかに自分でも、これじゃ何を言ってるのか分からないと思った。頑張っ、もっとちゃんと言わないとダメだろう。

「えっと、だからあたし、イオニア先輩に……みんなが、行かないって」

「あはは、ルーフェがまた言い出した」
なぜか笑われた。

Episode:06

「本気にすることないってば。」

「そりゃ殿下はアレだけど、言ったでしょ？ 行かないなんて言うてないじゃない」

「でも……」

「こんなに何度も出るんだから、かなりイヤなんじゃないだろうか。そんなあたしヘシーモアが、やっぱり笑いながら説明してくれた。」

「そりゃ、殿下はね。そもそもあたしらと違う世界の住人だから、どうやったって合わないさ。」

「でもまあ、それはそれ。任務に行くこと自体は面白いし、だいいちこんな機会、逃す手はないよ」

「そうそう。傭兵隊にも入ってないのに任務とか、ぜったいって言うていいくらいないもの」

「あ……」

「そういうことかと、やっと納得する。たしかにあたしたちの学年で任務なんて、ふつうはあり得ない。」

「幸い、内容自体はそんなにキツくなさそうだし、殿下のタカビーさえガマンすりゃ、けっこう面白いんじゃないかな」

「要するに細かいことはあるけれど、「任務」という珍しい体験自体が楽しみ、ってことらしい。だとすれば名前を挙げたのも、そんなに悪いことじゃなかったんだろう。」

「てかさ、殿下、なんかちょっと改心したっぽいから、行ったら案外平気かもだし」

「あたしが心配してたよりは、シーモアもナティエスも楽しそうだし、でさ、どうする？ 準備とか言われても、すぐには揃わないじゃ」

ない？」

「今晚中に見ておいて、明日揃えればいいと思うけどね。それでダメなら、先輩に相談でいいだろうし」

そんな会話を聞いていて、ふと思いつく。

「あたし……揃えても、いいけど……」

あたしたちでも簡単に揃えられる物ならいいけど、そうでない場合は意外とやっかいだ。今回は任務だから教官の許可は要らないだろうけど、先輩に見てもらった上で、学院へ話を回してもらわないといけない。

その上学院に在庫がないと、外へ発注を出して受け取って……になるから、最悪だと数日かかる。こうなったら、出発には間に合わないだろう。

その点シューマーなら、短時間でややこしいものを揃えるのにも慣れてるから、言えば翌日には手に入るはずだ。

「揃えてもって……ルーフェ、だいじょぶなの？」

「いや、この子が言うならだいじょぶだと思うね。アヴァンでも短時間で、あんだだけドレスだの揃えたし」

不安そうなナティエスにシーモアが答えて、あたしのほうに顔を向けた。

「そしたらルーフェ、新型弾、手に入るかい？ さすがに旧型だとちょっと心許ないからさ」

「あ、うん、それならすぐ」

このくらいなら、常備されてるはずだ。

「あとで、欲しい型……教えて？ そうしたら、すぐ揃えるから」

「助かるよ」

シーモアにお礼を言われて、ちよつと嬉しくなる。

「イマドとナティエスも……何か、要る？」

「あー俺、魔石欲しいわ。あれねーと、やれること限られちまってるさ」

イマドは魔力の付与や操作に長けてるから、ああいうのが使いやすいらしい。

「あたしは今すぐには、ないかな。あとで何かあつたら、そのとき言うね」

ナティエスのほうは手持ちでいつも完結してるから、とりあえずいいみたいだ。

「んじゃ、そういうことで。あとなんかあつたら、また互いに連絡だね」

「うん」

それから準備をしに、あたしたちはそれぞれ、部屋へと向かった。

Episode:07

N a t t i e s s

任務の話がきてから5日後、あたしたちアヴァンにいたの。

っても、これでもけっこう強行軍。なにしろ話聞いた2日後には学院発つて、そのまま列車内で2泊しながら、首都のイグニールへ直行。すぐ船に乗って、船内で1泊しながらアヴァンまで。

ホントは今日1日くらいゆっくり遊んで、それから顔合わせしたかったんだけどなあ……。

ちなみに顔合わせの場所になったのは、去年とおんなじ屋敷の、おんなじ部屋。ただ、メンバーはちよつと違うわけで。

「……僕はそのルーフェイアを、指名したはずだが」

なんか殿下、すつごく不満そう。理由はなんとなく分かるけど。

「あら、そうでした？　こちらへ来た書類では、同行者3名も一緒にと書いてありましたから。」

なんでしたら、どうぞ書類をご確認くださいな」

対峙するイオニア先輩ったら、いつもと同じく高飛車。殿下とい勝負かも。

「仮に殿下のご意向とは違うことを、そちらのどなたかが付け加えたにせよ、こちらは逆らえませんの。」

所詮雇われですから」

同行者も連れて来いって書かれてる紙突き出されて、殿下ったら反論できなくて。

それにしてもこの殿下にこれだけ言つてのけたの、イオニア先輩

がはじめてかも？

「ともかくこの件に関しては、ルーフエイア以外の人選は、こちらに一任されてましたから。」

——ああ、今からご指名の誰かを連れてくるって手はあるわね。4日はかかるでしょうけど」

わざとじゃないんだろうけど、先輩すっごいケンカ腰。ちょっとこれ、まずいかも？

それからイオニア先輩、少しの間殿下を品定めするみたいに見て、付け加えたの。

「申し上げておきますけど殿下、このメンバーを選んだの、ルーフエイアですからね。そちらが指名した子が、任務のために選んだ仲間ですから、ガマンしていただかないと」

らしいかも、って思った。

鋭いイオニア先輩のことだから、殿下がなんでルーフエを指名したかは、もう分かつちゃってるはず。でもそれを逆手に、逃げ道塞いじゃってる。

「彼女が選んだのなら……やむを得んな」

殿下が眉間にシワ寄せながら、折れて。

——ちょっと気の毒かも？

任務って称してルーフエイア名指しして、仲良く野営って、思ってたんだろうなあ。

「ところで今回の任務、どこまで聞いている？」

殿下の問いに先輩、めんどくさそうに髪をかき上げた。

「聞いてないにきまつてるじゃありませんか。それとも私たちに、この書類以上のことを事前に問い合わせるとでも？」

話だけ聞いてると、どっちが上かわかんない。だけど殿下……ち

よっただけ楽しそう？

「まったく、言いたい放題だな。

今回の話は少しは聞いたかもしれないが、代々伝わる儀式がらみだ」

ここで殿下、あたしたち以外の人を下がらせた。どうやら他の人たちに聞かれると、まずいことみたい。

殿下が声をひそめる。

「うちの家では、正式な継承権を得るためには、この儀式を経なければならなくてな。16歳になる前に終えておかないと、一生継承権が得られん」

「くだらない話だわ」

イオニア先輩ったら、あっさり切って捨てて。

でも殿下、楽しそうに笑ってる。ずばずば言っちゃう先輩のこと、案外気に入っちゃったのかも。

Episode : 08

「仕方あるまい、伝統というのはそういうものだ。

ともかくその伝統に則って、聖なるオロス山に入り、竜を倒した証を持って帰る。お前たちは、その補佐をしろ」

「――竜を倒す？」

先輩の声に、剣呑な響きが混ざった。

「そんなものを相手に、この子達で戦力になるとでも？　いくらなんでも話と違いすぎるわ」

「ああ、心配するな」

殿下がめんどくさそうに、手をひらひら振った。もしかするとこの儀式、殿下もあんまりやりたくないって、思ってるのかも。

「証にする竜の骨は、最初から用意してある。だから行って数日逗留して、持って帰ればいいだけだ」

「ちよつと殿下、それって詐欺……」

思わずあたしが言っちゃった言葉に、みんなはもちろん、殿下までうなずいて。

けどこれで、人払いした理由が分かったかも。うっかり喋って、広まったら大変なことになっちゃう。

こんなにあっさり言うからには、きっと代々詐欺な儀式してたんだろうし。

「まあ実質そうだが、さつきも言ったように、伝統とはそういうものだ。形さえ整っていれば問題はない。

だいいち継承者が、無限にいるわけではないからな。そんなに次々と危険な目に遭わせては、誰もいなくなってしまう」

「いなくなっても、困らないでしょうに」
辛らつな言葉に、意外にも殿下ったら笑い出した。

「まったく、お前たちは遅いな。孤児というだけある」
去年と似たような言葉。でも不思議なのは去年みたいな嫌味が、
感じられないってこと。

「いずれにせよ、血筋と権力の後ろ盾は侮れんぞ？ それをわざわざ捨てて国を危険に晒すのは、愚の骨頂だ」

話を聞きながら、思う。

——殿下ったら、かなり変わったかも？

前はただのヤなやつだったけど、いまはなんか、腹黒いヤツに進化した感じ。敵に回したら、すつごくてこずりそう。

でもって、その変わった理由は……そこで黙ってるルーフェだろ
うな、って思う。去年2人で誘拐されてから、殿下ってばちょっと
違ったし。

「ともかく、内容はそういうことだ。

逗留に必要と思われるものはこちらで用意させたが、念のために
チェックを頼む。足りない物があつたら、遠慮なく言ってくれ」

「ええ、では遠慮なく」

イオニア先輩がすつごく嬉しそうで、文句言われる係のひとたち
に、ちよつと同情しちゃったり。

「他に、何か質問はあるか？」

「質問っていうか……ほんとにあたしたち、一緒に行って野営して
ればいいのよね？」

なんだかちよつとだけ腑に落ちなくて、訊いてみて。

「そうだが、不満か？」

「ううん、不満って言っんじゃないでね」

自分でもイマイチ言いたいことがまとまらなくて、考え考えになる。

「なんていうのかな……行っただけなのに、あたしたちみたいな何人も呼ぶなんて、ちょっとヘンかなって」

行けばいいだけの、形だけの儀式ってなら、殿下一人でいい気がする。それにアヴァン軍を一個中隊くらいつけば、ほぼ完璧。

だいたいこんな言い方したくないけど、基準外れてるルーフェは別として、あたしたちじゃ正規の部隊なんかと比べ物にならないし。それどころか、かえって危険が増しちゃうくらい。

Episode : 09

「ちゃんと護衛、いるんでしょ？　なのはどうして、あたしたちみたいな見習いが、護衛になっちゃうの？」

それを言うと、殿下ったら苦笑した。

「これも儀式のスタイルでな。故事に則って、同年代数名で行く決まりだ」

なんかよくわかんないけど、伝統っただけあって、やっぱりいろいろ面倒みたい。

殿下がさらに続ける。

「じつを言えば今までは、有力貴族の師弟で編成していたのだが、いつも終わった後に泥沼の権力争いに発展する。

だから今回思い切って、外部に委託することにした」

この話聞いてちょっと殿下が、気の毒になったかも。

ただ前例のないことする気になったのは、ルーフェも理由のひとつだろうなあ、なんて思ったり。なにしろ殿下、ルーフェにはすごく甘いもん。

「でも殿下、ホントにだいじょぶなのかい？」

ちょっと斜な感じで、でも真剣に聞いてたシーモアが、尋ねた。

「今までの貴族連中から人出してたのを、急にあたしらみたいな部外者にしたら、もっと問題になると思うんだけどね」

「それは承知の上だ。だがすべてを勘案した上で、この方がいいと僕は判断した」

きっぱり言い切る殿下、けっこう覚悟はありそう。まあ今まで前

例のないことしようっていうんだから、このくらいの覚悟は要るのかも。

こんなわずらわしい事がたくさんあるなんて、王族なんか生まれたいの、やっぱりちよつと可哀想かな？と思ったり。

そこへ今まで黙ってたイマドが、口を開いた。

「……ホントにそんだけです？」

いいかげんオンリーの彼にしては、すっごく鋭い視線。

「それだけ、とは何だ？」

返した殿下も、どこか怖い表情。2人の間で火花でも散りそう。

——そりゃそうよね。

今回の話が学院へ来たのは、どう考えたって殿下が、ルーフェを連れ出したかったから。なのにルーフェったら、そういうの分からない子なわけで。

呼び出して仲良く楽しめると思ったら、その彼女と一緒に男連れてきたとか……魔視鏡の番組だったら、どろどろの修羅場モノ。

まああたしは、そういうのけっこう好きだけど。見てる分には面白いし。

けどイマド、別にやりあう気はなかったみたい。ふいつと視線をそらして、天井仰いで。

「んー、そんなら別にいいです。どうしてもだったら、また訊くんで。

てか、俺の勘ぐり過ぎかしんねえし」

なんか謎めいたことだけ言っつて。

気になったみたいで、隣のルーフェも教えて欲しそうに見上げたけど、それも頭撫でられてうやむやにされちゃった。

「にしても、なんだってこんな時期なんです？」

イマドが話を変えて。

「もちつとあったかい時期に、行きゃぁいいのに。オロス山の辺り、いい加減寒くなってますん？ もうそろそろ、霜降りた気が」

「僕も来年の夏思っていたのだがな、祖父が倒れて事態が変わった」

あつさり言われて最初はふーんと思ったけど、意味が分かった瞬間、あつと思う。

「そ、祖父って……殿下のお爺さんって、ここの王様でしょ?!」

「ああ。幸い大事には至らなくて、もう普通にしてるが。」

ただいい加減、歳だからな。継承順位を固めておかないと、何があるか分からん」

淡々と言う殿下。でも内容が……。

「ホントにお爺さん、大丈夫なの？」

「心配してくれるのか？ お爺さまに言ったら、さぞ喜ぶだろうな殿下がどうしてか、嬉しそうに笑う。」

もしかしたら、こういう貴族とかの人たち、誰も本当には心配してくれないのかも。そんな風に思った。

それからあたしたちを、殿下が見回して。

「出発は明後日の早朝だ。だから明日はお前たち、観光でもしてくるといい。費用はこちらで出す。」

「ただしトラブルと、無駄遣いは無用だぞ」

「はい」

最後に殿下が茶化して、その日は解散になったの。

Episode:10

R u f e i r

予定通り2日後の早朝、あたしたちは出発した。

「あなたたち、しくじったらただじゃおかないわよ」

「はい……」

とても激励とは思えない、イオニア先輩の言葉に送られる。

ちなみに先輩の任務は、あたしたちの移送の付き添い、なんだそうだ。だから今回はあたしたちが戻るまで、アヴァンシティを観光すると張り切ってた。

あたしたちの行き先は、アヴァンシティから北西へ行ったところの、ベルヒ山系。この国の人たちには、聖なる山々としてあがめられているのだと言う。

「でもそこ、観光地なんですよ？」

「一部だけだな」

ナティエスの質問に、殿下が答える。

「ベルヒ山系は幾つもの山からなるが、オロス山周辺と手前の谷は、一般は立ち入り禁止だ」

「で、あたしら堂々とそこへ行くわけか。役得かね？」

シーモアが笑った。

予定では公爵家の持ち物であるその谷に入って、数日間逗留。その後持参した竜の骨を片手に、谷を出ることになっていた。どう見ても聖なる儀式というよりは、儀式「ごっこ」だ。

ただ殿下の言うとおり、生きている竜を相手になんて、プロでも死と隣り合わせだ。だから代々の王位継承者は、妥協案としてこれを考え出したんだろう。

意外と世の中は、あたしなんか知らないところで、いい加減な妥協だけで回ってるのかもしれない。

しばらく走るうち、窓の外は深い森に変わっていた。たしかにここなら竜が居ても、おかしくはない。

——居ないだろうけど。

竜はその知能が高くなるほど、人間を嫌う。だからシティまで、竜の翼ならひと飛びで行けそうな場所じゃ、昔はともかく今は居ないだろう。

「でもなんで、こんなややこしい儀式、することになったの？」

ナティエスが不思議そうに訊いた。

「わざわざ詐欺まがいのことするくらいなら、やめちゃった方がいいと思うんだけど」

「この儀式は建国の祖、メルヒオル公にまつわるものだ。

他国の人間には分らんかもしれないが、これを無視しては、アヴァン国と公爵家は立ち行かん。それこそ革命騒ぎになる」

そういつて殿下が、説明を始める。

「現アヴァン国が、かつて神聖アヴァンとして広大な版図を誇っていたのは、お前たち知っているか？」

「あ、うん、習った」

この間テストで出たところだ。

「なら、その国がどうやって出来たかは知っているか？」

「え……？」

ナティエスが答えに詰まる。
答えたのは、イマドだった。

「お告げもらったメルヒオル公が立ち上がって、そこにあった前の国を滅ぼして作った、ってやつですよね。」

「ついでに親に監禁されてた、前の国の姫さん助け出して妃にして」
「ほう、よく知ってるな」

殿下の声に、驚きが混ざる。

「俺、アヴァンに親戚いるんで」

「なるほど、いちおう我が国の者だったのか」

殿下のイマドへの視線が、目に見えて変わった。

同じ国の人間っていうのは、かなり大事なことらしい。シュマーにはない感覚だ。

「お告げで国作ったり滅ぼしたりって、どうかと思うけどなあ」

ナティエスの齒に衣着せぬ感想に、殿下が苦笑する。

「まあその辺の是非はさておいて、その開祖のメルヒオル公だが、竜を従えていたことで有名だな」

「あ、それで……」

やっと儀式の意味が分かる。アヴァンの建国王がそうだったから、子孫も継承権を主張するために、それに倣ったんだろう。

Episode : 11

「先祖のせいで迷惑だとも思うが、まあ仕方あるまい。本当に竜と戦って死者が出ていた昔を思えば、格段に楽な話だしな」

なんだかよく分からないけど、伝統というのは、いろいろ難しいらしい。

そんな話をしてるうちに、車が速度を落とした。ところどころに黄色の混じった、山と谷とが迫ってくる。頂上のほうはもう、雪が降ってるみたいだ。

「この先揺れますので、お気をつけください」

「あ、はい」

川の見える谷間の道を、揺られながら行く。へたに喋ると、舌を噛みそうだ。

やがて少し開けた場所で、車が止まった。

「殿下、お送りできるのはここまでになります」

「分かっている」

どうやらここから、例の「儀式」とやらになるみたいだ。

谷の奥に視線をやると、少し先に一对の、竜の石像が乗った柱があった。あそこが入り口になるらしい。

「荷物を降ろしますので、今しばらくお待ちを」

「分かった、待とう」

そうやって殿下の姿が、写影に収められる。きっと公式の何かに使うんだろう。

「ああ、その者たちは写すなよ。何かと面倒だ」

これはありがたかった。殿下いつの間にか、こういうことにも考

えが及ぶようになったらしい。

「ですが、それでは国民から……」

「構わん。もしあんまりアレなようなら、個々人の保護のため、とでも言っておけ。」

それより、今のうちにあれを持って」

殿下の命令で、綺麗に装飾された箱が配られる。開けると中身は、首飾りだった。

「終わるまで、これを身に着けておけ。でないと、儀式にならないのでな」

「……？」

意味が分からないまま、みんなでひとつづつ手にする。短めの金の鎖に、見たことのない石が下がっていた。

「持ってりやいいんです？」

「そうだ。だが首からさげておくのが、いちばん楽だとは思っぞ」

それもそうだと、みんなで首にかける。その間にお付きの人たちが、後ろの輸送車から荷物を降ろした。

「これ、全部……？」

みんなであきれ返る。

いつの間にか出された荷車には、水に食料、小さい冷氣箱、分厚い布団、天幕等々……たしかにどれもあつたら便利だけど、多すぎだ。

「さあ、運ぶぞ」

「え？」

殿下、「当たり前」という顔だ。

「ちょっと待つて殿下、運ぶってどこに？　っていうか、運んでも
られないの？」

ナティエスが声をあげる。

殿下が一瞬考えたあと、何かを思い出した顔になった。

「そういえば、言うのを忘れていたな。谷に入れるのは、公爵家の
者だけだ。なにしろ結果が張ってあるからな」

さつき立ち入り禁止とは言ってたけど、実際はこの谷、「立ち入
れない」場所らしい。

「じゃあこのペンダントが、その結果を無効にするもの？」

「そうだ」

肯定してから、殿下が続ける。

「儀式の間だけは、僕が選んだ同行者は入れていいが、それも15
歳未満だけの決まりでな。だから、この者たちに運ばせるわけには
いかない」

「えー」

ナティエスはまだ不満そうだけど、イマドがあつさりと動く。

「どうせここで騒いだって、誰も持つちゃくれねえんだろ。ほら、
とつとと運ぶぞ」

荷車の持ち手に、彼が手をかけた。

Episode : 12

「お前ら、突っ立ってねーで押せって」

「あ、ごめんごめん」

慌ててみんなで後ろへ回って、押す。

「けど殿下、どこへ持ってきやいいんだい？」

「ああすまん、こつちだ」

シーモアの問いに殿下が先頭に立って、谷へと入っていった。

——それにしても。

イマドがなんだか面白くなさそうなのが、ちょっと気がかりだ。

彼はいつも楽しそうで前向きで、こういうことは珍しい。

あとで理由を聞いてみようかと思いながら、みんなと一緒に荷物を運ぶ。

どこまで行くんだろうと思いついていったけど、幸いそんなに行かないうちに殿下が止まった。

「この辺りで野営できると思っただが、どうだ？」

言われて辺りを見回す。

谷と言うけど、この辺は割と広い。左右の崖はけっこう遠くて、開けた野原になっている。小高いところもあるし、低いところは川が流れていて、水や寝る場所に問題はなさそうだ。

本当はもう少し、身を隠すところがあるといいのだけど、前線に居るわけじゃないから大丈夫だろう。

「悪くないと……思います」

何があるか分からないから、ベストとは答えられないけど、おお

むねいい選択だろう。

「だね。大嵐でも来なきゃ、平気だと思うよ」
キャンプ場所が決まって、みんなで荷物を降ろし始める。

「つと、これ重いな」

イマドが大きな目の荷物——体格がいいから率先してそういうのを
持つてる——を手に、つぶやいた。

「あ、ちよつと待って……セレスティアル・レイメントっ」
威力を小さくして、呪文をかける。荷車は浮遊石がつけてあるか
ら楽だけど、個々の荷物についているわけじゃないから、こうしな
いとけっこう重い。

「サンキュー、この魔法、マジで便利だな」

「うん」

イマドが喜ぶのを見て、なんだか嬉しくなる。

「ほう、軽いのか？　ならこれも頼む」

話を聞いてた殿下が、イマドの荷物の上に、自分が持っていた物
を置いた。

「殿下っ！」

思わず声を荒げてしまったあたしの隣で、急に変わった重さにつ
いていけなかったみたいで、イマドがよろける。

「魔法で重さを変えているときは、物を載せないでください！　解
けて危険です！」

「そ、そうなのか？　それは悪かった」
慌てて謝る殿下に、あたしは自分が何をしたのか、やっと気づい
た。

「え、あ、その、えっと、すみません……あたし、失礼なこと……」

よく考えてみれば、魔法に慣れていない殿下が、知らないのはあたりまえだ。それどころか珍しい魔法だから、学院生だって知らないかもしれない。

なのになんてあんな言い方をするなんて、あたしもどうかしてる。

けど殿下、寛容だった。

「いや、いい。僕も不注意だった」

ゆくゆくは上に立つ人だから、いちいち腹を立てたりしないんだろう。やっぱり小さい頃から、そういう教育を受けているだけのことはある。

「あの、すみません、いますぐ……そちらにも、かけますから」

「すまないな、頼む」

重そうな荷物に次々と魔法をかけて、使い良さそうな位置に置いて天幕を張って——ぜんぶ終わった頃には、日は中天に高く昇った。

Episode : 13

「今度はお昼ってやつ？」

言いながらナティエスが、ちらりとイマドのほうを見る。

「……ちったあ休ませろ」

草の上に寝転がったまま、彼が答えた。いちばん働いてたから、疲れたんだろう。

それにしてもナティエスも、最初からイマドに作ってもらった気が、ちよつと可笑的い。

「なんだ、昼食のことか？」

心配ないぞ、その冷気箱に、シェフが作ったものが入れてある」

「え？」

驚いて開けてみると、たしかに「料理」が、ぎっしり詰め込んであった。

「溶かせば食べられるそうだ。あと上のほうの凍ってないものは、早めに食べるとのことだったな」

そついう家柄なだけあって、至れり尽くせりだ。

「屋敷にいるようには出来んが、まあ問題ないだろう」

「問題っていうか……本格的すぎじゃないか？」

覗きこんで検分してる、シーモアが言う。

「そうでもないぞ？ スープも前菜もないし、デザートもない。パンと主食だけだ」

「それ、十分本格的すぎ！」

ナティエスの上げた声に、イマドが起き上がった。

「よし、んじゃメシにしようぜ」

こういつの、単純とか現金って言うんだろっと思う。でもイマドが嬉しそうだと、見ててあたしも嬉しかった。

「凍ってないのっていうと、このどっちか？」

「だね」

「じゃ、こっちのサンド食べたいね。なんか旨そうだよ」

べつに誰も異論はなくて、みんなで草の上に座り込んで、出したサンドイッチをほおばる。

「やっぱり美味しい〜」

「でもこれ、生焼けのお肉が……」

やわらかい葉っぱの間に、前に食べた、外側だけ焼けたお肉が挟まってる。

「ルーフェったら、また言ってる。それ、食べて平気だから」

「ほんとに？」

でもよく考えてみたら、プロのシェフが作ったものだ。おかしなものを入れて、殿下がお腹を壊すようなマネは、ぜったいにしないだろう。

世の中っていろいろ謎な食べ物、いっぱいあるんだと感心する。

——そのとき。

視線を感じて、あたしは首をめぐらせた。

「どした？」

目ざとく気づいて、イマドが訊いてくる。

「うん、いま、何か……でも、殺気じゃないし」

人とも違う感じだったし、なんだかよく分からない。

「この辺の獣かなんかじゃね？」

「あ……そうかも」

ただその割には、鋭さが強かったようには思う。
どちらにしてもそれは一瞬で、もうどこにも気配さえなかった。

「もっかいあつたら、調べりゃいいだろ。」

とりあえず、早く食えつて。みんなもう、食い終わるぞ？」

「え？ あ！」

見ればみんなはもう、ほとんど食べ終わってる。

「お茶しかないのがねー」

「贅沢言っくんじゃないよ、上物じゃないか」

「でもさ、ジューズのほうがいいじゃない」

シーモアとナティエスのやり取りに、ちよつと笑いながら残りを
食べて……あたしは手を止めた。

太刀を掴んで立ち上がる。

Episode : 14

「ルーフェ？」

問いには答えず、走り出す。

——やっぱり何か、居る。

けど駆けこんだ天幕の裏には、何もいなかった。そばの草むらが踏み荒らされてるだけだ。

もう気配もなくて、静かな谷だけが広がってる。

「何があった？」

「ごめん、分からない……」

イマドの問いにも、あたしは答えられなかった。たしかに何か居ただけど、それが何か分からない。

「これ見る限り、なんか居たのはたしかだね」

「けっこう大型じゃない？　こんなに踏み荒らすの、ちいさい動物じゃムリだもん」

シーモアとナティエスが、地面を調べながら言う。

「……場所、変えたほうがいいんじゃないか？」

「いま天幕、張ったのに？　だいいちどこ行くの？」

ナティエスの言うことももつともで、どうしようかとみんなで頭を悩ませた。

「そしたらさ、とにかく今晚だけは予定通り、火焚いて様子見るのはどうだろうね。念のために、見張り立ててさ」

「それで……いいかも」

どこかもつと安全な場所に移ったほうが、いいのはたしかだ。で

もその場所はこれから探さなくちゃならないし、そのあとさらに移るとしたら、暗くなっても終わらないだろう。

とりあえずは様子を見て、明日から動き出すのが妥当だ。

「お昼食べたし、枯れ枝、集めなくちゃね」

「だな。ルーフェイア、お前ここに殿下と残ってる。俺ら探してくるわ」

言って早速、イマドたちが準備を始める。

「僕は何をすればいい？」

「殿下はおとなく座っててね。どっか行っちゃダメですよ」
ナティエスに言われて殿下、すごくイヤそうな顔だ。

——あたしも同じ考えだけど。

学院で訓練を受けているみんなならともかく、王宮育ちの殿下じゃ、出歩かれたらたまらない。

「急いで行ってくるからさ。ルーフェ、殿下頼んだよ」

「うん、だいじょうぶ」

答えながら三人を見送って、殿下と2人だけになる。

これといってすることもないから天幕に結界だけ張って、あとは見張りを兼ねて草の上に座っていると、殿下が隣へ来た。
静かな時間。かすかなせせらぎと、鳥の声だけだ。

「彼らはいつごろ、戻ってくる？」

殿下が思い出したふうに訊いた。

「え？ えっと……日が傾く頃には、間違いないです」

それ以上かかったら、枯れ枝を集める意味がないし、なにより危険だ。

「その間、僕らは何もしなくていいのか？」

「はい」

ほんとうは食事の下ごしらえでも出来ればいいのだけど……あたしがそんなことしたら、かえって迷惑かけるだろう。

「しかしこういうのも、困るな」

「えっと、じゃあ……あ、勉強とか」

殿下が怪訝な顔になる。

「こんなところへ来てまで、勉強するのか？」

「いえ、あの、そうじゃなくて……学院、テスト前なんです……」
予定だと、帰った直後にテストだから、ヒマを見つけて勉強しないとダメだろう。

「たしか、荷物の中に……」

「ダメだ。ここに座っている」

取りに行こうとしたら、殿下に止められた。

Episode : 15

「ダメ……ですか？」

「ダメだ」

もういちど言われて、さすがに諦める。雇い主の殿下に、逆らうわけにはいかない。

仕方なく、そのまま元の場所に座りなおした。

「……どうしてそこで、言われたとおり座るんだ」

「え？」

言ってることがメチャクチャだ。

「でも殿下、そう言いましたし……それに殿下、雇い主ですから……」

殿下があからさまに、落胆した顔になる。

「あの、何か……？」

「いや、いい。」

——しかしヒマだな」

たしかに殿下の言うとおりだった。イマドたちが帰るまで待つだけで、ここには魔視鏡も本もないから、時間を潰すのに困る。

「えっと、そしたら……釣りとか、しますか？」

少し向こうの小川でなら、遊ぶ程度には釣れるだろう。

「道具があるのか？」

「あ、はい。装備の中に、入れてもらいました」

イオニア先輩がチェックするときに、万が一のサバイバルを考えて入れてもらったのが、さっそく役に立ちそうだ。

荷物の中を漁って、釣り竿を探し出す。

「ふむ、悪くないな……ちょっと見てくる」

小川へ向かった殿下の後ろを、あたしもなんとなくついて行った。

「釣りはしたことがあるか？」

「いえ、あんまり……」

部隊の中には好きな人もいたけど、あたしはほとんどやったことがない。敗走中に川で魚を獲ったりもしたけど、のんびり釣り糸を垂れるヒマはなかった。

「そうか。案外面白いぞ。」

——ほう、こんな場所なのにアイツがいるな。パンを持ってこよう」

「あ、じゃああたしが」

急いで食料の中から、硬そうなパンを取り出す。殿下はあたしと違って、釣りが趣味みたいだ。

川辺へ戻ると、殿下が水の中を覗き込んでいた。

「いいか、そこに大きめの魚がいるだろう？」

指差す先に視線をやると、たしかに黒っぽい大き目の魚が居る。

「あれに、このパンを投げてみる」

「あ、はい」

小さくパンをちぎって、言われたとおり投げてみる。

「……え？」

驚いたことに、その魚が上を見た。パンを狙って……ひと口で飲み込む。

「よし、あいつは行けるな」

言いながら殿下は針にパンをつけて、あたしに竿を差し出した。

「投げてみる」

「え？ でも、あの、あたしは……」
何を投げるのかさえ分らない。

「ああそうか、やったことがないんだっとな。いいか、まずここに指をかけて……」

あたしの持った釣り竿に、殿下が手を添える。

「こうして竿を上へ上げたら、指を離しながら一気に振り下ろす。反動で、仕掛けを投げるんだ」

「あ、太刀の兜割と同じ要領ですね」
動き自体は結構似てる。

「いや、まあ、そうかもしれないが……ともかくやってみる。上流の方へ投げれば、あとは自然に流れるからな」

「はい」

最初は失敗したけど、何回かやるうちにコツが掴めてきて、上手く仕掛けが飛んだ。

ぽちゃんと音を立てて、針とパンとが流れていく。

Episode:16

「来たぞ、上げろっ！」

「え？ えっ？！」

何をどうすればいいのか、まったく分からない。

「竿を上げて、糸を巻けっ！」

「は、はい！」

ぴん、と糸が張って、すごい力で引つ張られる。気を抜いたら、川へ落ちてしまいそうだ。

「慌てるな。落ち着いて、竿を動きに合わせながら巻くんだ」

「はい……」

殿下の言うとおりに合わせながら、糸を巻いていく。魚のほうも必死だから、まるで力比べだ。

けどそのうち、引きが弱くなった。魚のほうがあたしより先に、参ってきたらしい。

「よし、悪いが竿を貸してくれ。網がないから、僕が上げよう」

「あ、はい、どうぞ」

手渡すと殿下は慣れた手つきで糸を巻いて、それから上手く反動を利用して釣り上げた。

片手じゃとてもつかめないような魚が、ばたばたと草の上で暴れる。

「うん、まあまあだな」

殿下が満足そうだ。

「これ……食べられますか？」

「ああ。臭みがあるが、この辺は水が綺麗だからな。そんなに気に

ならないだろう」

どうやら晩御飯が出来たらしい。

「——そうか、生簀を作って泳がせておかないとダメだな。ヘタに殺すと不味くなる」

「そうなんですか？ そしたら……」

魚に向かって集中する。

「地の礎にして万物の素なる物、うつろわぬ力をここに現せ——ピエトラ・フィアート！」

思惑通り、魚の石像が出来た。

「……何をした？」

「あ、えっと、魔法で石化させました。これだと、解けば生きた状態なので」

殿下が呆れた顔になる。

「まったく、こういうのは初めて見たな」

「すみません……」

慌てて謝ると、殿下が「もういい」というように、ひらひら手を振った。

「気にするな。間違ってるわけでもないからな。

ともかく次を探そう。パンをちぎって投げてみて、食べたやつを釣るんだ」

「はい」

分けてもらったパンを手に、川沿いを歩き回っては水の中を覗き込む。

「あ……」

さっきと同じ魚を見つけて、パンを投げてみた。

魚が水面へ上がってきて、ぱくりとひと飲みにする。

「殿下！」

「いたか？」

呼ぶと殿下はすぐ来てくれて、さっきと同じように餌をつけて、竿を渡してくれた。

「今度は、上げ方も教えてやる」

「はい」

同じように投げて、魚が針に食いついて引いて……。

——楽しい。

ただ単純に、面白かった。こんなふうに遊んだことは、もしかしたら初めてかもしれない。

Episode : 17

そうやって、何匹釣り上げただろう？

「ルーフェー、どこー？」

ナティエスたちの声がした。

見ると陽が、だいぶ傾いている。けっこう長い間、夢中になってたみたいだ。

「ごめん、こつち！」

みんなに手を振る。

「居た居た。釣りしてたの？　なんか釣れた？」
「うん」

そのとき、ナティエスの後ろに居たイマドと、目が合った。
なぜだろう？　なんだかすごく、うしろめたい気分になる。

「あの、ごめん、あたし……」

「なに謝ってんだよ」

「え……？」

たしかに何に何で謝ってるのか、自分でも分からない。でもなぜか、謝らなきゃいけない気がした。

「ずいぶん釣ったな」

「ごめん……」

謝るあたしの頭を、イマドが撫でる。

「面白かったか？」

「え？　あ、うん」

あたしの答えにイマドが笑った。

「良かったな。」

——にしても、石化ってのはすげえな」

「何騒いでんだい？」

話に首を突っ込んできたシーモアも、魚を見て啞然とした表情だ。

「えっと、ダメだった……？」

心配になる。

けどイマドたちの答えは、反対だった。

「いや、ダメじゃねえよ。つかこーゆーやり方、ふつう思いつかねえって」

「思いつく以前に、使えないだろうしね。けど保存としちゃ、完璧じゃないか？」

どうやら問題ないらしい。

「殿下、これの食い方知ってます？」

「よくは知らん。そんなに臭みはないはずだから、焼けば食べられるんじゃないのか？」

殿下、釣るのが専門で料理はしないみたいだ。

「んじやいっそ、このまま置いとくか。今日のところは、シェフが作ってくれた夕飯もあるし」

イマドはもう、夕食の献立で頭がいっぱいらしい。

「あとで少しづつ泳がせて、臭み抜いとくかな」

「あ、じゃあ今、生簀……作る？」

枯れ枝も集まってるし、あとはあたしに出来ることはない。だったら見張りがてら、泳がせる場所でも作るほうがいいだろう。

「やってくれっと助かつけど、だいじょぶか？」

「あ、うん。重いもの……魔法、使っし
そこへ、横からシーモアが加わった。」

「あたしらも手伝っよ」

「あ、あたしも。もうこれ以上、することないでしょ？」
ナティエスも言ってくれる。

「んじゃ、お前ら頼むわ。あ、メシ用意しまっまで殿下、天幕の
中にでも」

さすがにこの言葉に、殿下が渋面を作った。

「ただ座ってるのも辛いぞ。せめて生簀作りくらいさせろ」

「あー、んじゃそゆことで」

食べ物することに頭が行ってるんだろう、イマドかなり適当だ。

——そのとき、また。

視線を感じて振り返る。

けど何もなくて、夕暮れに差し掛かった空と、静かな谷が広がる
だけだった。何かが居そうな気配も、かけらほどもない。

不思議に思いながら、みんなと一緒に小川のほうへ歩き出す。
でも漠然とした不安は、どうしても尽きなかった。

Episode : 18

Lowell side

闇の中、夜鳥の声だけが響く。

ローウェルは、寝付けずにいた。天幕の中、寝床は板の上に敷いたマットなので、不快なことこの上ない。

だが学院が送り込んできた面々は、気にする様子もなく寝てしまった。このくらいのことは、なんでもないらしい。

話には聞いていたが、予想を遥かに上回るタフさだった。この年齢でこれでは、長じてはどうなるのかと、つい思ってしまう。

だが一方で、彼らはそう自分と変わらない。同じようなことを喜び、同じようなことで笑う。それがなんとも不思議だった。

どうにも堅くて寝づらく、何度も体勢を変えては楽な場所を探す。ここでこうしている自分が、うしろめたかった。

学院生と言うのに加え孤児である彼らは、じつにたくましい。食事の支度から天幕の設営、果ては見張りまでこなしてしまう。いまでも交代で、夜通しの見張りをしているくらいだ。

なのに自分は、何もしていないし出来もしなかった。

もちろんこちらがクライアントなので、何かする必要はない。さまざまなことを「させる」ために雇っているのだ。

けれどそう頭では分かっている、自分が情けなくなってくる。これではただの飾りだ。

時と場所によっては、有能な飾りは必要だ。そして自分はゆくゆくは、そういう役割も担うだろう。

しかしいまは、そういう「場面」ではない。

それから急に、自分の考えていることに気づいて可笑しくなる。去年彼らに出会うまでは、こんなことを思ったりしなかった。

自分はこの国を預かる者で、他者とは違う。だから扱いも違う。あの頃は、真剣にそう思っていた。

間違いではない。だが、真実でもない。

例えば仮に、どこかの誰かが赤ん坊の頃自分と間違われて、この座に居たとしたら……同じように帝王教育を受け、国を預かるものとして育てられ、そういう意識でいるだろう。

そう考えると、血筋で保障されたものがどれほどなのか、分からなくなってくる。

要するに彼女があのと云ったように、この権力は「借り物」ということだ。その証拠に、何も持たず自力で生きてきた学院の子どもたちは、本当に生きる力が強い。

考えれば考えるほど、情けなくなってくる。

こんな考え方をするようになったせいか、父親とは少しだけ、溝が出来ていた。あの辺に言わせると、「下々と必要以上に関わりすぎる」ということらしい。

いまの公爵家は、そういうことに対して神経質だった。父親の姉、元々女王になるはずだった伯母がたいそうな庶民派で、貴族社会を嫌って出て行ってしまったためだ。

おそらく自分がその二の舞になることを、恐れているのだろう。だから庶民と関わらせず、限られた人間の中で必要なことだけ学び、決められた道を行かせようとしている。

（——愚かだな）

目上の者を見下したくはないが、視野が狭すぎる。

ただ自分は伯母のように、この地位を捨てる気はない。いろいろと煩わしいことも多いが、その代わり出来ることも多いのだ。

もっともこんなふうに思えるようになったのは、自分とてごく最近のこと……その意味では、あまり言えた話ではない。

ともかくそんな、ひそかな礼の意味も兼ねて、ルーフェアを指名したのだ。しぶる重鎮たちも、去年の誘拐騒ぎを引き合いに出して、万一ということで押し切った。

——まさか、あんなオマケがついてくるとは思わなかったが。

とはいえ、騒ぐほどの話ではない。それに国も違う彼らには、いろいろと気を回さなくて済む。

何より、煩わしい礼儀作法や儀式を、気にする必要もない。

こんな日々は、もう二度とないだろう。ならばせめて羽を伸ばそうと、静かな闇のなかでローウェルは思った。

Episode : 19

I m a d

「……ホントに地図どおりってヤツだな」
「うん」

二日目、俺とルーフェイアは、野営の候補地探ししてた。っても、探し回ったワケじゃなくて、単に「確かめ」ただけだ。

殿下が言うにや代々、この谷の地図が受け継がれてんだって言う。んでそれ広げてみたら、ちゃんと洞窟まで描かれてた。ただ鵜呑みにするわけにもいからねーから、俺らが確かめに来た、って次第だ。

洞窟は川を遡ってきた辺りで、ちっと小高いところにあった。中も乾いてっから、数日住むくらいならだいじょぶだろう。

それなりに距離があるから、荷物運ぶの大変って気はするけど、不可能ってほどじゃねえし。

まあ「あと2〜3日なのに移るのか」っていう、根本的な問題はああるけど……。

けど前線育ちのルーフェイアのカンは、無視できない。こいつが「なんかある」ったら、ぜったいに準備したほうがよかった。

「急いで戻って、なるたけ今日中に移るか」
「そうだね」

夜の移動は願い下げだから、とつと洞窟をあとにする。

「荷物軽くして、川沿い来んのが楽そうだな」

「うん」

答えながらルーフェイアのやつ、ちつと上の空だ。視線が川の中へ行ってる。

見てんのは……魚だろう。

——悔しかった。

魚釣ってたときの、ルーフェイアのヤツの笑顔。あんなに心底楽しそうにしてんのは、俺でも見たことない。

そのことに、めちゃくちゃイラついてる自分が居た。

ルーフェイアが喜んでたのが、やなワケじゃない。それを自分じゃ出来なかったことに、腹が立ってた。

学院へ来る前も来てからも、あいつの表情はどっか諦めた寂しそうなもので、楽しんで笑ってるってことがない。

根本にあるのは、シュマーのことだろう。あいつは片時も、そのことを忘れたりしない。けどあの笑顔で魚釣ってたときだけは、忘れてたはずだ。それがすげえ悔しかった。

イライラしながら、それでも必死に出さないようにして、言う。

「ほら、早く帰ろうぜ。日が暮れちゃう」

「ご、ごめん……」

敏感なルーフェイアのヤツが、ちよつとだけ怯えた表情になった。情けねえけど、隠し通せなかったらしい。

「あー、だからさ、そゆんじゃないくて……」

自分で言いかけたクセに、言葉が上手くつながらない。それでもどうにか口開きかけたとき、一気にルーフェイアの表情が変わった。

俺も同時に、魔力の気配を捉える。

呪文じゃない。もっと漠然とした、結界とかそういうたぐいだ。それが、真上にある。しかもそうとうデカい。

ルーフェイアのヤツが太刀の鞘を、ほんの少しずらす。瞬間、笑うような気配がして、空から何か降ってきた。目の前でべしゃつと音を立てて、つぶれて飛び散る。

「なんだ……？」

自分で言いながらも、だいたいの見当はつく。なんかの死体だ。ただ地面に叩きつけられてっから、あんまり見たくないモノになる。

頭の上の気配は、これに気を取られてる間に消えてた。

「動物……？」

平然とルーフェイアのヤツが近寄った。んで、その辺の花でも見るみたいに覗き込む。

Episode : 20

「食べられる、かな……？」

「——おまえなあ」

言うことが予想超えすぎだ。てか、華奢な美少女が墜落死体目の前にして、けろっとしてるだけでもアレだ。

「つか何で死んだかも分かんねえのに、食ったらヤバいだろ」

「え、そうなの？ 焼けば……ダメ？」

食糧確保が本能に刷り込まれてるんだろっけど、やっぱなんか間違ってる。

「戻りやいっぱい、食い物あるだろ。なのにヘンなもん拾い食いして、腹でも壊したらどーすんだ」

「あ、そっか……」

こいつの頭ん中ぜったい、生き残ることしか書き込まれてない。てかこの場合、もっと気にしなきゃいけないーことがあるわけで。

「これ落としたの……アイツだよな」

「うん、たぶん」

足元の死体を見る。人間の赤ん坊くらいの大きさの、野生の山鼠かなんかだ。

それをわざわざ俺らの目の前に落としたのは、ふつうに考えりや嫌がらせか脅しだろう。

言いたいことは、恐らくただひとつ。

——帰れ、と。

せっかく見つけた洞窟だけど、移んのはヤバいかもしんない。ともかくイヤな成り行きだ。

「……帰って、相談したほうがいいな」
「うん……」

波の音にも似た、木々の声。そんな中になんかが潜んで、俺らを見
てる気がする。

どうしても足早になりながら、野営地への道を急いだ。

その途中で、気がつく。

「そいやお前、昨日も気配がどーとか、言ってたよな」
「あ、うん。でも、あれじゃ……ないかな」

返ってきたのは、予想外の答えだった。

「あれじゃねえって、まだ他にいる、ってことか？」
「だと、思う。昨日のはもっと、人っぽかったから……」

冗談じゃない。

ルーフェイアの言うことが確かなら、野営地の近くじゃなんか知
らん連中が居て、奥へ行きやさっきのデカいのに睨まれる、ってこ
とだ。

「逃げ場なしだよ……」

学院でまず教えるのは、逃げ道の確保だ。じゃないと自分が強く
なった気になって、ムチャして玉砕するバカが出るってのもあるけ
ど、ともかく生き延びることを叩き込まれる。戦うのはその次だ。

だから俺らくらいの学年だと、そゆのは骨の髄までしみ込んでる
わけ。それなのに得体の知れねえモンに取り囲まれて、しかもこ
っちからなんも出来ないってのは、かなりのストレスだった。

けどここで考え込んでても、事態は変わんねえだろう。

とまかく戻ろうと、俺らはスピード上げた。森が開けて、野営地が見えてくる。

でも、なんか微妙に様子がヘンだ。テントの脇にあいつらがいるけど、妙に殺気立ってる。

「シーモア、ナティエス！」

ルーフェイアの声に、あいつらが振り向く。

「ルーフェ、だいじょぶだった？」

「うん。そっちは？」

訊かれて、こいつらが答えた。

「それがね、一段落して天幕の中でのんびりしてたら、何だか物音がして……」

ナティエスの、同意求めるみたいな視線受けて、シーモアのヤツが後を引き継ぐ。

感想・評価大歓迎です。お気軽にどうぞ♪

Episode : 21

「昨日のこともあったからね、武器持って外へ出てみたら、こんなものがあつたのさ」

差し出されたものを見て、俺ら首をかしげた。

「これ、人形……？」

ルーフェイアの言うとおりだ。ただ人形っても、魔法で動くヤツじゃない。子どもが持っていたりする、布地で作ったごくふつうのヤツだった。

——傷がついてることを、除けば。

何体分があるそれは、どれも胸の辺りが切り裂かれて、髪の色なんか俺らと似てる。

「つたく、何のつもりなんだか」

「だから、やっぱり嫌がらせじゃない？」

今まで何度か同じ話でも、してたんだろう。ナティエスのヤツ、ほとんど断言口調だ。

「じゃなかったら、ここまで丁寧にやらないもん」

「まあたしかに、こんだけの人形作るだけでも、それなりに手間がかつちやいるはずだしね」

たしかにたかが人形だったって、わざわざ似せるとなったら、探くなり作るなりするハメになる。ご丁寧にそれやってんだから、なんかそーゆー意図があるのは間違いねえだろう。

「けど……嫌がらせて、どうして……？」

「つかその前に、こんなことすんの誰だよ」

ルーフェイアのヤツと違って、俺はこっちのほうが気にかかる。こんな辺鄙な場所まで来て嫌がらせとか、かなりイってる行動だ。

「連中、だろうな」

俺の言葉に、それまで考え込んでた殿下が、顔上げて答えた。

「連中？」

一斉に上がった声に、殿下が話し出す。

「去年の騒ぎは……お前たちはだいたい、内容は知っているだろう？」

「知ってるっていうか、思いつきり巻き込まれたしね」

騒ぎつてのは、去年のテロと誘拐のことだろう。

俺も全部じゃないけど、話はルーフェイアのヤツから聞いてた。なんでもここの公爵家の跡目争いで、ドタバタになったっていう。

「けどその首謀者、捕まっちゃって俺聞きましたけど？」

俺の聞き覚えを、殿下が否定した。

「つかまってはいないな。重傷を負ったあと、館に軟禁されている」
「へえ……」

やっぱ一般人と違って、こういう連中はいろいろ特典があるっぽい。

俺の視線に気づいたのか、殿下が苦笑した。

「言いたいことは分からなくもないが、まさか公爵家から、国家反逆罪を出すわけにもいかないしな」

殿下はそう言ってつけど、シーモアとナティエスの表情も冷たい。あいつらも、「とっとと処分しろ」と思ってたんだろう。

ただ、ここで話したって結論が出るわけでもねえし。殿下も分か

ってんだろっ、ちょっと困った顔ながら続ける。

Episode : 22

「まあその件だが、そういう者たちがすべて捕まったわけでもなくてな」

「つまり、その残った連中がこれをしてる、ってこと？」

ナティエスの問いに、殿下がうなずいた。

「証拠はないが、可能性は高いな。」

そもそも、この谷へは前にも言ったが、我々公爵家しか入れん。そこへ侵入している時点で、誰かが協力していると考えていいだろう」

どうもかなり、ややこしい事態になってるらしい。

話聞いて、考え込んだシーモアのヤツが、殿下に訊く。

「仮にそうだとして……殿下はどんな理由が、いちばんありそうって思ってます？」

「そうだな……」

殿下が考え込んだ。

「向こうは僕が継承権を得るのを、阻止したいのだろうな。だとすると、まずはここから逃げ帰るように、仕向けることが」

意味が分かんねえで、みんなで顔を見合わせる。

「逃げ帰るって……ここから骨持って、出れば終わりでしょ？ いますぐにでも、OKじゃない？」

「それが、そうも行かなくてな。故事に倣って、最低でも5日滞在することになってる」

初耳だ。

「殿下、あとから言うとか契約違反なんで、違約金もらいますよ？」
「それは困るな。聞かなかったことにしてくれ」

平気な顔してうそぶくあたり、この殿下けっこう食わせモンらしい。

「でもまあ、そういうことならこの人形も、説明はつくね」

シーモアのヤツが、人形もてあそびながら言う。

「けど、すいぶん悠長だよな。」

ふつつ本気ならこんなことしねーで、いきなり攻撃するんじゃない？」

「今のところそんなに、荒っぽくやるつもりはないんだろうね。腐っても殿下だ。殺したらまずいだろっし」

情報が揃ってきて、見えてくる。言われ放題の殿下がイヤそうな顔してっけど、そっちはみんなで無視だ。

「ともかく殿下、5日滞在ってことは……あたしらあと3日、粘りやいいんだね？」

「そうだ。それさえ過ぎれば、骨を持ってここを出るだけだからな」
こうなりゃ話は簡単だ。

「じゃあさつさと、安全な場所に移るかね。ルーフエア、洞窟はどうだった？」

「あのね、それなんだけど……」
話ふられたルーフエアのヤツが、例の洞窟のそばであったことを、かいつまんで話す。

洞窟自体は安全で使えること。途中の道のりが意外に大変そうなこと。そして——何かデカくて見えない生き物に、ちょっかい出されたこと。

「じゃあつまり、そっちも狙われたって言うか……脅された、ってこと？」

「そう、なるかも」

当たり前だけど、空気が一気に暗くなった。

Episode : 23

「ここに居てもこの通りだし、安全っぽいところもダメってことだよ
ね……」

「どっちも見張られてるって思ったほうが、確実だろうね」

嘆いても仕方ない、そんな強い表情でシーモアのヤツが言う。この
辺はコイツ、やっぱさすがだ。

「とりあえず、移動するかしないか決めねえとだな。それによって、
いろいろ変わってくんだし」

「そうなるね。」

——ルーフェイア、どう思う？」

いちばん場慣れしてるヤツに、シーモアが訊く。

「ここのほうが、いいと思う」

それがルーフェイアの答えだった。

「同じ相手にするなら、こっちのほうが安全そうだし……それに向
こうに行って、両方相手にすることになったら、持たないから」
「なるほどな」

洞窟のところで感じたヤツは、巨鳥並かそれ以上だ。だったら人形
投げる程度のほうが、相手すんにも楽だろう。

「しゃーない、真面目に見張り立てるかね」

「……この人数じゃムリだろ」

さすがに反対する。

なんせ俺ら、4人きや居ないわけで。それで1日中ったら、かな
りキツイことになる。

「えっと、そしたら、結界じゃ……？」

「待つてよルーフェ、それ出入りどうするの？ 結界張ったら、解かないと出られないよね？」

「あ……」

ナティエスの言うとおりだ。ずっと籠ってられんならいいけど、天幕暮らしじゃそんなんムリだし。

みんなで少し考える。

「したらよ、昼間はテキトーに見張りたてて、夜は結界つてのはダメか？」

「あ、それならやれるかも」

話がまとまってきた。

「そうしたら、まず昼ごはん食べて、それから割り振り決めるかね」
「だな。んじゃメシ出すか」

5日分の食事は用意されてっから、朝に出して溶かしときゃ、すぐ食えて楽だ。

そんな俺らの様子に、殿下が苦笑した。

「まったく、お前たちというのは。前向きというか、気にしないというか……」

「殿下ひどーい。でも気にしても、何にも変わらないでしょ？」

ナティエスが言い返す。

シーモアが後を続けた。

「嘆いててなんか解決すんなら、あたしもそうすんだけどね。生憎、世の中そんな甘くないし」

「シーモアの場合、黙って待つてるとか性に合わねえだろ」

「あんたねえ……」

そんな軽口叩きながら、俺らみんなで、メシの用意にかかった。

Episode : 24

N a t t i e s s

今日で3日目。儀式ごっこは順調。たぶん。

この任務に来て今思うのは、めんどくさいことになっちゃたなあ、ってこと。なにしろこの任務、なんかややこしい事態に巻き込まれてるっばいんだもん。

殿下が言うにはアヴァンの国内、まだまだ裏じゃ不穏みたい。夕べなんかも、ヒマだからいろいろ教えてもらったけど、王族廃止の革命派がけっこう居るんだって言う。

ただあたしは、よく分かんなかったり。

せっかくずっと続いているもの、無くしちゃうのはどうかな、って思う。でも、そういう「生まれつき」の人が居るのは、どうかなって思う。

ちなみにこの辺は、メンバーの間でもけっこう意見が違うの。

シーモアは、無くしてもいい派。ただ利用価値があるなら残しとけ、っても。

逆にアヴァンに縁があるイマドは、無くすとかあり得ない派。アヴァンは王家無くしたら、こういう豊かな国じゃなくなるって言う。

当の殿下は、せっかくこういう立場なんだから、とことん利用して国のために出来ることをすればいいって考え。意外と現実的。

まあ結局はこういうこと、国の人が決めるやいいんだろっけど…
…。

だいいちあたし的には、狙われちゃってることのほうが重大。いくら任務だからって、他所の国のことに巻き込まれて死んじゃうとか、話にならなすぎだもの。

でも幸い今のところ、実害は無し。例の人形に似たのがもう一回、投げ込まれたくらい。

——ちょっと笑っちゃうかも。

いい大人が、いっしょうけんめい人形作って投げてるとか、かなり情けないし。

というか、もっと面倒なことが発生中だから、そんなに気にしてられないの。

「ルーフェイアは……外か？」

「ですよ。見張り行きましたもん」

原因は、もちろんこの殿下。

去年の任務のときからそうだったけど、殿下ってばルーフェのことがお気に入り。なのに今回、なーんにも知らないルーフェ、こともあるうにイマド連れてきちゃったわけで。

それでもまあ、どうにかうまくやってるかなって思う。仲良しつてのには程遠いけど、どっちもケンカぶっかけたりしないもの。

ただ、ルーフェが……。

「——見てくるか」

「あ、もう！ 殿下勝手に出ないでくださいってば。なんかあったらあたしたち、困っちゃうんですから」

「そうは言っても、ここに詰めつきりは辛いぞ」

言って殿下が、天幕を出る。

「まったく殿下、ちつとは我慢できないのかい」

「殿下だもん……」

そんなこと言いながら、あたしとシーモアも慌てて出て。で、見たものに困っちゃった。

外に居たのはルーフェと、昼食の用意始めたイマド。久々に2人だけになったのが嬉しかったみたいで、ルーフェったらにこにこしながら、話してる。

でもこんなの見たら、殿下は面白くないわけで……。

Episode : 25

「ルーフエィア！」

よせばいいのに、割って入るし。

「あ、はい、今！」

ルーフエィがイマドに、ちよっただけ寂しそうな顔を見せてから、こっちへ来て。

というか、殿下ももうちよっと、ルーフエィの気持ち考えてあげればいいのに……。

「えっと、あの、なんででしょう？」

困り顔のルーフエィ。周りの感情に敏感な子だから、殿下が荒れるの感じ取ってるみたい。

「様子はどうだ？」

こんな質問とか、ルーフエィをイマドから引き離れたかったのがバレバレ。見張り中の彼女呼んで、いちいち訊くことじゃないもの。

「ええと、あの、特に変わったことは……」

「そうか。なら昨日の話なんだが——」

「殿下っ！」

さすがに遮る。

「ルーフエィ、見張り中ですよ。なのに呼びつけて、どーするんですかっ！」

思わず声が大きくなっちゃって、殿下がびっくりしたみたいに振り向いた。

「なんか話あるんなら、あたしとシーモアで聞きますっ！　つていうか危ないから、ともかく天幕戻ってください！」

殿下変わったかなって思ったけど、そうでもないみたい。強引なところは、前のまんまだもの。

「雇い主は僕だが？」

「だから？　雇い主だからって、自分から危険呼び込んでどーすんだい」

こつという高圧的なのが、大っきライなもの、シーモアも、殿下とケンカ腰。

「何のために、見張り置いてると思ってんのさ。殿下、アンタが危険だからだよ？」

「そうそう。なのにルーフェにちょっかい出したくて、天幕出るとか困っちゃうな」

前もそうだったけど、ほんと殿下分かってない。

護衛って、守る側はもちろんだけど、守られる側の行動も大切。

言うこと聞いてくれれば何も起こらないのに、自分から危ないところへ行っちゃうようじゃ、どうやったって守りきれないもの。

実際去年は殿下、それやって誘拐されたわけだし。

「ともかく殿下、戻ってね。だいいちルーフェのジャマ……」

言葉の途中で、ルーフェの表情が変わって。

同時に、爆発音。

みんなが驚いて振り向いたときには、ルーフェはもう走り出した。

「やられた……」

ちよつと行って立ち止まった彼女の、苦々しい口調。

視線の先には、横倒しになってフタが壊れた冷気箱。だから中の

食べ物、ばら撒かれちゃって。

「これじゃ食べられないかな？」

「でも、集めてまた魔法で凍らせれば平気じゃないか？」

スラム生活が長いシーモアには、どってことないみたい。集めようとして一歩踏み出して。

「だめっ！」

近寄ろうとしたあたしたちを、ルーフェが鋭く止めた。

Episode : 26

「けど、このままじゃ」

「絶対近寄らないで！」

厳しい口調。そして彼女が、呪文を唱える。

「エレメンタル・プレスっ！」

例の、無敵防壁魔法。でもあたしたちにはかかってない。

続けてルーフェ、わりと普通の防御魔法。この連発に、シーモアが不思議そうに訊いて。

「……今度は何にかけたんだい？」

「箱と、天幕。このまま、近づかないで」

答えを聞いて、さすがにぞっとしたの。だってもし、ルーフェの予想が正しかったら……。

「は、離れなくて大丈夫？」

「あ、うん、念のために離れたほうがいいかも」

ルーフェは平然としてるけど、さすがに怖くなって、殿下を連れて歩き出して。

その背中で、爆発が起こった。

「……ちきしょー、これじゃまるつきり食えねえだろ」

イマドの恨み言。いつの間にかルーフェの隣来て、仲良く見てたみたい。で、あたしたちも振り返って——また背筋が寒くなる。

さっきは横倒しになっただけの冷氣箱が、中がズタズタになった。た。

外殻が裂けてないのは、きっとルーフェが魔法かけたから。もし

そうじゃなかったら、破片になって飛び散ってる。

で、あたしたち、その冷氣箱に近づこうとしてたわけで……。

「どうして、分かったの？」

「殿下に呼ばれるまでは、異常なかったし……仕掛けられた割に、最初の被害小さかったし」

ルーフェはこともなげに言うけど、たったそれだけで察知するなんて、やっぱりこの子って場数踏みすぎ。

「あと、あたしも……仕掛ける側なら、同じことするから……」

続いた物騒な言葉に、思わず凍りつく。こういうのが分かるって、つまりそういうのが「出来る」ことだって、今まで結びつかなかった。

華奢で泣き虫のルーフェの、もうひとつの顔。それを見せられた気分。

ただいつも一緒にいるイマドは、気にならなかったみたいで。

「まー、テロ屋の常套手段だしな。様子見だの救助に人が集まったと狙って、もっかいドカンってのは」

「そういえば、そうだった……」

学院ってああいうところだから、そういう話どこかで聞いた気はする。でもそれがこの場ですぐ思い浮かぶって、やっぱり並みじゃない。

ともかく止めてくれなかったら、あたしたち食料の様子見に冷氣箱に近づいて、今頃食料と仲良く生肉だったはず。

「イマド、残りの食料……どのくらい？」

「昼飯と、あと夕飯の分は出しているから、今日は平気だな。ほかに携行食もあるし、お前が釣った魚もあつから、まーどうにかなるだろ」

すくんじやったあたしたちと違って、向こうはまるで日常会話。
このまま買物にでも行きそう。

「魚、いちおう泥吐かせたほうがいいかもな。あとで生簀でも作つ
とくわ」

「じゃあ石化解くとき……呼んで」
やけにのんびりした会話のあと、ルーフェがこっちへ向き直った。

Episode : 27

「あの、殿下？」

「……なんだ？」

ルーフエの困ったような、でもちよつと真剣な顔。

「その、申し訳ないんですが……天幕から、出ないでいただけますか？ 当初の予想と違って、とても危険な状態になっているので」

「——分かった」

さすがにこれは、殿下も従うしかなかったみたい。

なにしろひとつ間違えば、命に関わる状況。だいいちさっきの爆弾、殿下が出てきたりしなきゃ、仕掛けられてないはず。

逆に言うならそれだけ向こうが、真剣になっちゃってるってこと
だけ……。

で、ルーフエが今度は、あたしたちに。

「あのね、見張り……今日と明日、あたしがやっても……いい？」

シーモアと顔を見合わせる。だってこれ、あたしたちじゃ十分な見張りが出来ないって、言われてるも同然なもの。

けど、ルーフエの言うことは間違いじゃない。これだけ状況がシビアだと、前線慣れしてる彼女に任せるのが、いちばん被害が少ないわけ。

それでもちよつと複雑な気分で、いちおう言ってみて。

「時間……長すぎない？」

「大丈夫。外で座ってれば、自然と分かるから」
それがルーフエの答えだった。

少年兵上がりの彼女、そういうのはもう、意識しないで出来ちゃうんだろ。外に居たいのはきつと、そのほうが分かりやすいのと、対処が早くできるから。

「——そしたら頼むよ。済まない」

シーモアがそう答えたけど、あたしは内心ちよつと悔しかった。こつちだって、あのシエラ本校のＡクラス。なのにどうやっても届かないほど、能力に開きがあつて。

そりゃまあ、ルーフエはケタ外れてるからアレだけど、でも見張りくらい出来ないって、ちよつと自己嫌悪。

もつと、頑張らないとかなあ……。

「毛布とか食べるもの、要る？」

といつても、今悩んでたつてしょうがないから、ルーフエに訊いてみる。せめてこのくらいは氣遣わないと、まるっきりお荷物だもの。

「えつと、そしたら毛布……借りて、いい？」

「もちろん！」

ちよつとだけ役に立った氣がして、ほつとする。もつともこれも、自己満足なだけだ。

「今、持つて来るね。あと、もうちよつとしたら食事も」

こんなことで喜んじやう自分、なんだかなあとも思いながら回れ右して。

「あ、ほら殿下、中入ってください。ルーフエのジャマですよ」

学院戻つたら、もつと真剣に勉強しよう。そう思いながらあたし、殿下連れて天幕へ戻つた。

Episode : 28

R u f e i r

既にここへ来て4日目、途中で持参の食料がなくなったものの、あとの天幕暮らしは順調だった。そろそろ夕方だから、今晚さえ乗り切ればどうにかなるはずだ。

——乗り切れば、だけど。

相手の意図が殿下の継承権阻止だとしたら、このままってことはないだろう。明日までに何かあるはずだ。

他のみんなは気づいてるかどうか分からないけど……あたしは最悪、殿下の暗殺もあるだろうと思ってた。

それを、どう阻止するか。

はつきり言って、分が悪い。向こうはそれなりの人がそれなりの人数で組織だってやってるのに対して——それにしては人形とか、ちよつと笑えるけど——こっちはあくまでも「見習い」だ。戦力差は歴然としてる。

いちばんいいのは、さっさとこの儀式を中止して撤退、收拾がついてから再度来ることだろう。

でもそれは、出来ないんだっていう。この儀式に挑戦できるのは1人1回だけで、それでクリアできなければ、終わりなんだそうだし、人も居ないし、取れる戦法も限られて、やりようがない。結局出来ることといえば、みんなでなるべく固まって警戒するくらいだった。

殿下はいま、天幕の中だ。こういう状況の以上、とてもじゃない

けど外へなんか出せない。

ただ殿下、今回は文句も言わずに従ってくれて、その分だけは楽だった。もし前回みたいに好き勝手にされたら、さすがに守りきれない。

中の様子は、ここからは分からなかった。

殿下とイマドは、あんまり仲がよさそうには見えない。だから上手くやれているかどうか、ちょっと心配だ。

一緒にシーモアがいるから、どうにかしてくれるとは思うけど……。

ため息をつく。

殿下のことも気がかりだけど、もっと気にかかるのイマドだ。

いつも飄々と笑ってる彼が、ここへ来てからあまり笑わない。厳しい表情で、考え込んでばかりいる。

もしかしたら、あたしが今まで気づかなかったただけかもしれないけど……こんな彼は、初めてだ。

ここへ来てもらったのが、間違いだったのかもしれないと、後悔していた。

誤解してる人も多いけど、任務なんてどれも、楽しいものじゃない。だいたい嫌なこと連続で、そのくせ要求は無駄に高く、それをどうにかするようないことばかりだ。

でもイマドは、たぶんその辺は知らないはずで……殿下とそりが合わないのもあって、ストレスになってるんだろう。

こうなってみて初めて、ふだんどれだけイマドに励まされていたか、やっと分かる。それで何かが変わるわけじゃないけど、「気にするな」と言われるだけで、いつも気が軽くなっていた。

それなのに、あたしは……。

「ルーフエ、どしたの？」

いきなり声をかけられて、心臓が跳ね上がる。

「ナ、ナティエス？」

「やだルーフエ、ほんとどしたの？ そんなにびっくりして」

振り向くとすぐ後ろに、戻ってきたナティエスが居た。こんなに近づかれるまで気づかないなんて、前線だったら間違いなく死んでる。

気になることが多すぎるのは確かだけど、それで任務に支障が出るなんて、失格もいいところだ。

Episode : 29

「ルーフェもしかして、イマドのこと？」

「え、どうして……分かるの？」

あたしの疑問に、ナティエスがけらけらと笑う。

「だって。ルーフェもイマドも殿下も、分かり易すぎだもん」

「そう、なんだ……」

自分じゃ隠してたつもりだけど、丸分かりだったらしい。

ナティエスが隣へ座り込む。

「そんなに、気になる？」

「気になるっていうか……」

自分でもよく分からない。気になるのはたしかだけど、なんかもつと、重い感じた。

そんなあたしを見てなぜか、ナティエスは笑った。

「ルーフェにも、こういうの分かるようになったんだ」

「え？」

何を言われたのか分からなくて、考え込む。

「あれ？ ルーフェだって、イマドのことでしょ？」

「うん……」

またため息をついて、つい口にする。

「頼んで、悪いことしちゃった……。任務なんて、楽しくないのに」

「——え？」

こんどはナティエスが考え込む。

「ちょっと待ってルーフェ、イマドと殿下のことじゃなかったの？」
「え？ それもそうだけど……こういう任務、イマド慣れてないのに、名前出しちゃったから……」

一瞬ナティエスがぽかんとして、次に吹き出した。

「なにそれっ！ やだもうルーフェ、そうだったの？ せつかく気にしてるから、ちょっとは分かるようになったと思ったのにー」
「え……」

どうも何か、根本的に食い違ってるらしい。
あたしの答えがよほど面白かったのか、ナティエスはまだ笑い転げてる。

「あーもう、ルーフェったらやっぱルーフェなんだからー」

イマドには言っというてあげるね、このこと。きつと笑い出すよ」

「え？ あ、うん……」

なんでこれを言うのと笑うのか、見当もつかない。ただそれでも、イマドが笑うならいいかな、と思う。

「あーもう、笑いすぎてお腹痛いー。っていうか、止まんないー」
ナティエスは楽しそうだけど、なんだか複雑な気分で立ち上がる。そろそろ夕暮れ、天幕の中じゃ夕食を並べ始めてるだろう。

そのとき初めて、あたしは異変に気づいた。

——異臭。

辺りを見回して、走り出す。

「ルーフェ?!」

「来ないで!」

ナティエスにそう言って、あたしは歩を進めた。
いくらか行かないうちに、いやな予感が現実になる。かすかに感

じる熱気と、強くなるキナ臭さ。

「ルーフェー、ねえどしたのー？」

「火が……」

瞬間、ナティエスの表情が引きつった。

Episode:30

「ど、どうしよう！ 逃げなきゃ！」

「分かってる」

天幕へと走り出す。みんなはまだ、気づいてないはずだ。

「みんな、外へっ！」

「え？」

飲み込めなかったんだろう、夕食を並べてたみんなの手が止まった。

すぐあとから駆け込んできたナティエスが、その先を言う。

「火事なのっ！ 逃げないと！」

みんなの顔が青ざめた。

「荷物、いいから。ともかく外へ出て」

迂闊だったと自分を責めながら、みんなを急かす。

よく考えてみれば、殿下を暗殺するのにこんなにいい方法はない。丸ごと山火事に巻き込んでしまえば、「不幸な事故」で済んでしまうのだから。

なのにそれを予想しなかったのは……どこかで甘く考えていたのだろう。

「どこ逃げる？」

「てか、こういう場合川じゃ……あ……」

シーモアが言いかけて、言葉が途中で止まる。もうそっちのほうは、燃え盛る火炎の中だ。

川はそんなに遠くないけど、炎の中を歩いていけるような距離でもない。防御呪文をかけたとしても、火勢と距離から見て途中で切れるだろうから、かなりの火傷を負うだろう。

なにより、あたし自身は川へ向かうのは反対だった。逃げるなら、他の方向へ行くべきだ。

「やだ、ほかも行けないじゃない!」

「火に囲まれたってか?」

周りを見回してみると、暗くなりかけた周囲は、どこもちらちらと炎が踊っていた。

「さすがにこりやヤバいね……」

立ち尽くすみんなを見ながら、必死に考える。あたしは炎系の精霊を持つてるからなんとかなるけど、みんなは確実に焼死だ。

「結界とか、ダメなのか?」

「ごめん、ムリ」

一見良さそうに見えるその手の防御呪文は、どれも無効化できるダメージに限界があるうえ、効果が大きいほど継続時間が短い。だから完全に防げるものだとは火が収まる前に切れるし、長時間持つものなら結局中で蒸し焼きだ。

「ここで考えていても、焼け死ぬのだろう? なら、川まで駆けたほうが助かると思うが」

殿下の言葉に、少しだけ迷う。たとえ途中で火傷をしても、ある程度までなら魔法で治せる。

ただ問題は、実際に川までたどり着けるかどうかだった。

この火事はどう考えても、敵側が起こしたもので……だとすれば

あたしたちが川へ逃げることでくらい、予想してるだろう。だから罨が仕掛けられていたり、待ち伏せされる可能性が高い。

そうなたらこの炎の中、殿下を守りきるのはムリだ。刺客にやられるか、炎にまかれるか、罨にかかるか、ともかく助かる確率が低すぎる。

炎だけでもなんとか出来れば、また違うのだけど……。

そう思いながら辺りを見回したとき、思いもかけない物が目に入った。

——起きっぱなしにしていた、石化した魚。

見た瞬間、炎から逃れる方法を思いついて、頭の中で実際に可能か計算する。

Episode : 31

石化呪文は、なぜか妙に安定してる。たいていの魔法はじきに解けてしまうけど、これだけは外から何かの方法で解かない限り、ずっと石化したままだった。

他の手持ちの魔法も頭の中でさらって、幾つかのパターンを考える。

やれそうだ。

「ごめん、みんな、中へ戻って。結界張るから」

さっきと正反対の言葉に、みんな何か言うかと思っただけど、反論はなかった。状況が状況だから、思考停止してるのかもしれない。

みんなが中へ入ったのを確認して、あたしは全力で魔法を使った。

「地の礎にして万物の素なる物、うつろわぬ力をここに現せ——ピエトラ・フィアート！」

照準を合わせられた、ナティエス、シーモア、それに殿下が石化する。

「おまつ、何やってんだ！」

イマドの言葉には答えず、もう一度集中して呪文を唱えた。

彼は妙な力があるせいかな、たまにこの手の呪文がかからないことがある。だからみんなと一緒にじゃなくて、単独で全力でかけるしかない。

何かを言いかけたその姿勢で、イマドも石になる。なぜか涙があふれて、頬を伝った。

石になったみんなをそつと寝かせて、上に毛布や何かをかける。こうしておかないと天幕が焼けたあと、並ぶ石像が人目を引いて危

険だ。

さいごに天幕の内側に、気休めの防御呪文をかけてから、ひざを抱えて座り込む。

——何かが壊れた気がした。

味方にさえ、この手の魔法をかけられる。自分がそういう人間なのだと、思い知る。

山火事が近づいてきたんだろう、何かのはぜる音や炎の渦巻く音が大きくなってきた。

その中で、ひたすら待つ。火が収まるまでにもかなりかかるだろうけど……それ以外にも、待つものがあつた。

この山火事が予想通り敵が起こしたのなら、必ずあとで確認に来るはずだ。そのときに殿下がじつは無事なのを知られたら、まずい。相手の本陣に情報が伝わるのを、阻止する必要があつた。

天幕に火が移って、温度が上がったんだろう。結界の中にあるはずの物も、燃えやすい物から順に炎を上げていく。

震えるほどに怖い——なのにとても綺麗な光景。ゆらゆらと移ろう炎に、見とれている自分がいた。

炎系の精霊が護ってくれるおかげで、熱かったりはしない。それも手伝って、幻想の世界に居るような錯覚を覚える。

そんな自分が炎以上に怖くなって、ひざに顔をうずめて目を閉じた。

轟々という音だけが、辺りを覆う。

少し、眠ろうと思った。

ふつうなら炎の中で眠るなんて正気の沙汰じゃないけど……火が

消えたら、今以上の修羅場だろう。それを考えると、いま休んでおくほうがいいはずだ。

ただそうは思っても、じっさいにはなかなか眠れなくて、いろんなことが頭をよぎるばかりだった。

思い出す。

前線で爆発に巻き込まれたこと、たまたま遭遇した爆弾テロ、市街戦……どれも炎にまつわることばかりだ。

——そして、アヴァンの火事でのこと。

不謹慎かもしれないけど、あれはあたしにとって、大切な思い出になっていた。

Episode : 32

炎系の精霊を従えてるあたしには、火は何の害もない。だから燃える家へ入るのも、崩れるかもしれないことを除けば、そう怖いことじゃなかった。

けどイマドは違う。

なのに彼は、勘違いからだったかもしれないけど、あたしを止めようと追いかけてきてくれた。炎の中まで、飛び込んできてくれた。あたしが前線やそれに近い場所にいるとき、シューマーじゃ誰もそんなに心配しない。心配するだけ無駄なのを、よく知ってるからだ。

だからもし、あの時誰か一緒に居たとしても……手伝いでついてくることはあっても、止めに来たりはしなかっただろう。

けど、彼はそうじゃなかった。どこまでも対等に、心配して怒ってくれた。

そのあともずっと、あたしの素性を知ってそれでも、彼は対等なままだ。同じ目線で怒って、心配して、話をして、喜んでくれる。イマドだけじゃない。シューマーもナティエスもだ。

なのに、あたしは……。

くすぶる毛布の下、石化したみんなに、また涙がこぼれる。こんなの、ふつうの人間がすることじゃない。

けっきょくあたしは、シューマーでグレイスで、得体の知れない……。

そんなふうにいるいる考えていて、ふと気がつくと、火がだいぶ消えていた。もしかすると知らないうちに、少しうとうとしてたのかもしれない。

息をひそめて、周囲の気配をさぐる。

遠ざかったらしい火と、逃げ惑う獣の騒ぐ声。

その中で……待つ。

「ここだったか？ 丸焼けだな」

案の定、偵察らしい人の声が、聞こえてきた。

「殿下も気の毒に。ここへ来なけりや、こんな目に遭わなかったのにな」

「でも、逃げてたりとか……」

話し声と足音から、2人だろう。

「天幕は焼けちまったみたいだな。どれ、死体を捜すか。なかったら面倒だな」

彼らが天幕の残骸へ近づいた、その隙を狙って一気に仕掛ける。

「トオーノ・センチンツァ！」

立ち上がりながら魔法で相手をひるませ、太刀を振り下ろす。さらに反動を利用して、向きを変えて……呆れてやる気が失せた。

若いほうの男の人、腰を抜かしてズボンを濡らしてる。

でも偽装かもしれないから、警戒を解かずに切っ先を向けた。

「わ、わ……」

後ずさって逃げようとするけど、腰が抜けてるから逃げられないらしい。

なんだかもつ面倒になって、目くらましに炎を放ち、その隙に背後へと回る。

「わ、え……？」

あたしを見失ってきよろきよろしているのを、峰打ちで昏倒させた。

——疲れたかも。

こういうヘンに気の弱い相手は、脱力感に襲われる。けど、敵は敵だ。念のために縛り上げて、その辺の焼け残った石に繋ぐ。これなら目を覚まして、悪さは出来ないだろう。

それから、死体のほうを片付けにかかった。といっても長時間ここを離れるわけに行かないから、魔法で軽くして持って行って、近くの窪地に放り込む。上から焼けた木や灰をかけて、見えないように偽装して完了だ。

最後に、気の重い仕事に取り掛かった。

Episode : 33

焼けた毛布や何かをそつとどかすと、石化したみんなが現れる。
ざつと見回したけど、幸い損傷はなさそうだ。

「カーム・フィルド!」

ひとりづつ解呪するのが面倒で一帯に無効化魔法を放つと、みんなの姿が元に戻った。

「あれ? え? あたしたち……」

状況について行けなかったんだろう、みんな伸びをしながら辺りを見回してる。

「火、おさまったってか?」

「うん……」

イマドが聞いてきたけど、顔が見られなかった。

「要するに、何が起こったんだ?」

殿下の問いに、イマドが答える。

「えーとその、ルーフェイアのヤツが俺ら石化させて、火事しのだんですよ」

下を向いていても、みんなが息を呑んだのが分かった。

「石化って……あの、お魚みたいに?」

「まあそうだろうね。ったく、相変わらず桁外れだよ」

責めてるようには聞こえない。でもやっぱり、何かを壊してしまっただと思う。

「ともかく、助かったらしいな。ルーフェイア、礼を言っぞ」

「殿下、お礼って言っわりに、すっごい偉そうじゃないか」

そつと見ると、シーモアに突っ込まれた殿下が、困ったような顔をしてた。

「まったく、貴族がただだけ偉いか知らないけど、もうちょっと口のきき方つてモンを――」

「やつだあ！ なにこれー！」

ナティエスの声が、響き渡った。

「この人つたら、やだもう！ きつたなーい！！」

「え？」

どうも例の襲撃者を彼女、見つけたらしい。みんなもすぐそつちへ行つて、完全に晒し者だ。

ちよつと可哀想だったかな、と思う。ナティエスとシーモアが相手じゃ、目が覚めてから延々とからかわれるだろう。

「……襲われたのか」

何を意味するか分かったんだろう、イマドが訊いてくる。

「ホントに、あいつだけだったのか？」

「……うつん」

そつだと言いたかったけど、ここで嘘をつくわけにはいかなかった。こういう情報に嘘があると、全滅に繋がることまである。

「んじゃ、逃げられたんか？ 死体見あたらねーし」

「うつん、倒して……死体は、隠したから……」

やっぱりイマドの顔を見られなくて、下を向いて視線をそらしながら答えた。

「……だいじょぶか？」

「え？ あ、うん！」

予想もしてなかった言葉に、思わず声が弾む

でもしなきゃいけないことを思い出して、また気が重くなった。

——尋問。

これが残ってる。

Episode : 34

あえて殺さなかったのは、情報が何か聞きだせると思ったからだ。何しろああいうタイプは、たいてい脅しに弱い。

ただ見かけと違って、頑として拒む場合もある。そうなったら、イマドの手を借りるしかなかった。

けどそれは、けて楽しいことじゃないし、それなりにリスクもあつて……。

「いって、ちゃんとやるから。つか、これも任務のうちだしな」
思わず顔を上げる。

いつものイマドが、そこに居た。

「あのヤロー、目え覚ましたみてえだぜ。行かなくていいのか？」

「うん、行かないと」

少しほつとしながら、でもそんな自分が汚くも思えて、複雑な気分で捕虜のところへ行く。

「ねーねーおじさん、なんでこんなことするのー？」

ナティエスたちがもう、尋問(?)を始めてた。

「お、おじさん?!」

「えー、だつて。おじさんでしょ」

捕虜の人が、目を白黒させてる。

「オヤジでいいよ、ナティ」

「そお？」

本気なのかふざけてるのか、よく分からない会話だ。

「じゃーそのおじさん、じゃなくてオヤジさん？」

「いくらなんでもそれはないだろう！ 僕はこれでも、まだ22歳だぞ！」

さすがに怒ったらしい捕虜に、ナティエスが痛烈に言い返す。

「十分おじさんじゃない。それもお漏らしおじさん」

口をばくばくさせたまま、この人が何も言えなくなった。

「でさ、おじさん。さっきも聞いたけど、なんでこんなことしたの？」

「だから、その『おじさん』は……」

こんどはシーモアが言い返す。

「んじゃガキンちよかい？ ってもシヨンベン垂れが何言っても、説得力ないけどね」

「――！」

ここまで言われてるのを見ると、ちよつと気の毒だ。

「まあ名前教えてくれれば、呼んでやるさ。『シヨンベン垂れのオヤジ』よりは、マシだろうからね」

「ゆ、ユーベル。ユーベル「ブノワ」……」

思わずイマドと、顔を見合わせる。こんな簡単に名前を言わせるなんてシーモアたち、尋問の才能がありそうだ。

「それでユーベルとやら。出身はどこだ」

何を思ったのか、殿下が口を挟んできた。

「ろ、ローウエル殿下？！」

どうやらこの人、外国の傭兵じゃなくてアヴァンの国民らしい。そうじゃなかったら、こんな反応しないだろう。

「いかにもローウェルだ。だが今は、質問に答えてもらいたいものだな」

殿下の堂々とした立ち居振る舞いに、捕虜が背筋を伸ばした。もし両手が自由なら、きっとこの人敬礼してる。

Episode:35

「ええと、はい、その、出身はアヴァンシティです！」

こんなにぺらぺら喋るのはどうかと思うけど、嘘ではなさそうだ。

「シティか。といっても広いからな。北側か？」

「はい、仰るとおりで」

殿下と捕虜さんはこれで通じたみたいだけど、ふだん住んでないあたしには、何のことかよく分からなかった。

何か知らないかと、いちおうこの国に縁のある、イマドのほうを見る。

「あー、お前らじゃわかんねえか」

視線に気づいたみたいで、彼が説明を始めた。

「シティは東の海岸沿いと、西の宮廷なんかがある側が、元からあったとこなんだよな。んで次が南の市民街。

けど北側つてのはあとから出来た、元スラム街でさ。っても、ベルデナードほどじゃねえけどな」

「なる……」

国こそ違っけど、同じスラム出身のシーモアたちは、ぴんと来たみたいだ。

向こうじゃまだ、殿下が捕虜からいろいろ聞きだしてた。

「なぜ、こんなことをした？ どう見てもお前には、向いてないよ
うに見えるが」

みんなが周りで、うんうんと頷く。あたしも同感だ。
けど答えは、意外なものだった。

「その、学校へ、行きたかったんです……」
みんなが黙り込む。冷静だったのは、殿下だけだ。

「学校へ行きたいのなら、行けばいいだろう。そもそも学校へ行くのとの騒ぎと、何の関係がある」
問われて捕虜の人が、少しづつ話し始めた。

「それがその、何年も前なんです、うちはお金がなくて上の学校へ行けなくて。でも俺行きたくて。
そのとき知り合いから、お金がなくても行ける学校がある、って聞いたんです」

「当たり前だろう。そのための奨学制度だ」
殿下はさらっと言ったけど、あたしたちはアヴァンの人間じゃないから、何のことがさっぱりだ。

「なんかよく分かんないけど、アヴァンって学校行くのに、お金要らないの？」

ナティエスが訊くと、殿下は気づいたみたいで、説明してくれた。

「この国は昔から、教育が盛んでな。
とはいえこの者のようなケースは、いくらでもある。だから試験をして通ったものは、高等教育を無料で受けられる制度が作られている」

「すごいな、それ」

シーモアが、心底感心したような声で言った。スラム時代は口々に学校へも通わせてもらえなかっただけあって、実感がこもってる。

「ともかくそれを使えば、一銭もかからん。まあ試験に受からない

ようでは、話にならんが」

「あの、そうじゃないんです」

捕虜の人が、殿下の話を遮った。

Episode : 36

「俺、試験に受かりました。でもおふくろが病気になって、誰かが働かなきゃいけなくなつて。それで進学諦めて、働きに出ました。」

けど、やっぱり学校行きたくて。そのとき『行けばお金をくれる』学校があるって聞いたんです」

「……え？」

そんな学校、聞いたことがない。

あたしたちが行つてるシエラの本校は、数少ない「そういう学校」かもしれないけど、それだつて引き換えに働かされる。ましてや普通の学校で、そんなムシのいい話があるとは思えない。

「で、そこへ行つたのか？」

「はい」

捕虜の人がうなづく。

「どこの、どんな学校だそれは」

「それが……学校つて言うのは名ばかりで。」

いえ、最初はちゃんとお金もくれたし、勉強もさせてくれました。けど卒業する頃から、急に話が変わつてきて」

「あつたりまえ。うまい話にや裏があるって、アンタ教わらなかつたのかい」

世間慣れしてるシーモア、呆れ顔だ。

「いや、まあ、冷静に考えればそうなんだけど……。」

ともかく『これだけの額援助したんだから、手足となつて革命のために働け』つて。出来ないなら金を返せ、踏み倒すなら家族も容

赦しない、って言われて」

「だから、それふつう。タダで何かしてもらえるわけ、ないじゃない。考えなかったの？ ばっかみたい」

ナティエス——彼女もけっこう苦労してる——にまで言われて、捕虜の人がうなだれる。

さすがに見かねたのか、殿下が間に入った。

「大人を相手に立ち回ってきた、お前たちと一緒にするな。」

——ユーベルとやら。要するに金で釣って人を集め、それを盾に強制的にこの手の活動に参加させている、ということだな？」

「はい。いえ、中には自分から、進んで参加してる人もいますけど……先生も授業も、そういうのが多いですから」

なんだかよく分からないけど、学校時代から一貫して、革命要員を育ててるらしい。

殿下が腕を組んで考え込んだ。

「左派の件は聞いてはいるが、予想以上だな……少し急がんと」

「じゃあ、これから言いに行く？」

ナティエスの問いに、殿下は首を振った。

「こんな騒ぎにはなつたが、いちおう儀式の最中だ。だが幸い、日付が変われば完了と看做せる。戻って告げるのはそれからでいいだろう」

「そっか」

納得したようにナティエスが言う。

「だとしたら殿下、今から谷の入り口へ向かうかい？ この火事じや、お付きの人なんかも心配してるだろうし。谷からは出ないにし

ても、顔くらい見せてやれるんじゃないか？」

「そうだな。基本は見えない距離に居ることになっているが、時間ぎりぎりくらいなら、まあ問題ないだろう」

それならと、みんなが戻る用意を始めた。だいいちここに居ても、ぜんぶ燃えてしまってるから、どうにもならない。

Episode : 37

「あの……」

すぐ発とうかというあたしたちに、捕虜の人が遠慮がちに声をかけてきた。

「なんだ？ 縄でも解いてほしいのか？」

殿下が尊大に言う。

「いえその、そうしていただければ、ありがたいですけど……でも、そうじゃなくて」

「はつきりしないヤツだな。物事は簡潔に言え」

そんな状況じゃないはずなのに、なんだか笑ってしまつやり取りだ。

でも捕虜の人が居住まいを正したのを見て、みんなもちっと真剣になる。

「その、たぶんもう、谷の外じゃ騒ぎになってると思います」

「——どうということだ？」

あまりにも言ってることが抽象的過ぎて、あたしもよく分からない。

捕虜の人も自分でそう思ったみたいで、ぽつぽつと、思い出すみたいに説明を始めた。

「演説聴いただけなんで、アレですけど……襲撃作戦だけじゃなくって、世論も動かしてやるって、幹部の人が言ってたんです。絶好のチャンスだから、そうやって王室廃止するって」

首をかしげる。世論を有利に動かすのは常套手段だけど、今回に限っては、どうやるのか見当もつかなかった。

なにしろこのアヴァン、歴史の古い国だ。しかも他国が次々と王室を廃止している中で、頑なに守り続けてるくらい、古いものを大切にしている。

そんな国の人たちが、ちょっとやそつとで考え方を変えるとは思えなかった。

「よく分からんな。革命派が居るのは承知しているが、彼らは国内で毛嫌いされているぞ。なのにどうやったら、正反対の方向へいきなり世論が向く？」

「俺もよく分からないんですけど、王室の継承の儀式を暴露するって――」

殿下の顔色が変わった。

みんなも意味が分かったみたいで、厳しい表情になる。

「儀式の現状を、暴露するってワケ？」

「だろな。けどそれやられちまったら、王家持たねえぞ」

口々に言いながら、みんなが殿下を見た。

「どうなんだい、殿下」

「お前たちの言うとおり、持たぬな」

この儀式は王位の根幹に関わる。実情については理解を示す者も多いだろうが、形式のところを崩されて突っ込まれたら、防ぎようがない」

アヴァンの人間じゃないあたしには、いまひとつピンと来ないけど、いちばんの急所らしい。

「おい、もうそれ始まってんのか？」

イマドが捕虜に問いかけた。琥珀色の瞳にふしぎな光が宿ってて、凄みがある。

「え、あ、いえ、はい、襲撃の前からです！」

見下すような目で捕虜を見てから、彼が振り向いた。

「殿下、マジですよこれ。もう報道使って流してやがる。こいつ、ここ来る前にそれ見てますし」

「なんだと……」

どうやら、かなり切羽詰った状況らしい。「見てる」って言うからには、もう魔視鏡網で、情報が流されたんだろう。

Episode : 38

「もう表沙汰になってるってこと？」

心配そうなナティエスの言葉に、殿下が答えた。

「分からんが、おそらくそうだ。

この手の話に庶民は食いつく。流して話題になったところで仕掛けられたら、世論を根こそぎ反対の方向に向けられかねん」

「殿下、やけに詳しいじゃないか」

シーモアの突っ込みに、殿下がなんとも言えない表情になる。

「ダテに長い間、生き残ってねーってことだろ。そんなくらい出来なきゃ、王家なんてとくに潰れてるって」

「……たしかに」

「どうやらこういう世界、裏側はそうとうすごい駆け引きなんかが、されてるみたいだ。」

「で、マジでどうするのさ。ともかくこのままってワケには、いかないんだろ？」

「戻るしかないだろうな」

殿下が決断する。

「外がどうなっているにせよ、ここからでは手も足も出ん。合流して状況を把握するのが先決だろう」

妥当な判断だ。みんなも戻る用意を、また始める。

「あの、自分はどうすれば……」

捕虜の人が、弱々しく尋ねてきた。

シーモアが答える。

「殺されなかっただけ、マシだと思いなよ。つてもこの辺、夜とかなんか居るらしいからね。そのままだと、喰われちまうかもね」

「そうだよー。みんな燃えちゃってエサもないから、何でも襲いそうだよー」

ナティエスまでが一緒になって、脅して喜んでは。

当たり前だけど、捕虜の人は血の気が引いて、震え上がった。

「やれやれ、お前たちも人が悪いな」

殿下が苦笑しながら、捕虜の前へ出た。

「たしか、ユーベルだったな。そなた、僕に忠誠を誓う気はあるか？」

「は、はい！ あります、ありますっ！」

勢いよく捕虜の人は言って、喋り始める。

「もともと自分、王室は好きなんです！ だから今度の作戦、イヤでイヤで。でも従わないと、家族がどうなるか分からなくて……」

本当かどうか確かめたくて、イマドのほうを見たら、彼がうなずいた。情けない話だけどこの人、さっき言ってたとおり、やる気の無いまま活動してたんだろう。

あたしの目配せに気づいて、殿下も分かったらしい。腕組みをして見下ろしながら、捕虜の人に告げる。

「ならば家族の名前と、住んでる場所を言え。うちの者に言って保護させよう。」

代わりにお前は組織へ戻って、偽の情報を流せ。そうだな、まずは川のほうへ逃げ延びたらしい、とでも言え」

「待ってください殿下」

予想もしなかった言葉を聞いて、慌てて止めた。

「なんだ？ 不服か？」

「はい」

答えて、殿下を真っ直ぐ見る。逆らうことになるけど、言わないわけにいなかった。

「この捕虜を逃がして帰したとして、こちらの思惑通り行動するとは限りません。最悪、殿下が生きていたと知らせる可能性があります」

そうなれば時間稼ぎどころか、更に事態が悪くなるだろう。

Episode : 39

「なるほどな……。ならばお前は、どうすればいいと思う？」
訊かれて答える。

「ベストは連行ですけど、ダメならここに放置か……殺害かと
みんなが息を飲むのが分かった。
思い知る。自分が『そういう』人間なのだと。
平穏な日常や常識とは相容れない、何かもつと別のもの……。

「で、でも、それちょっと可哀想じゃない？」

ナティエスの言うことは、ごくふつうだ。おかしいのはこの場所
と、あたしなのだから。ただそうと分かっている、その「常識」
に従うわけにいかない。

と、なんともいえない雰囲気へ、イマドが割り込んだ。

「まー殺しちまうのがいいってのは、俺も賛成だけどさ」

いつもと変わらない声が、空気を溶かしていく。

彼を見ると目が合った。分かっている、そんな感じの琥珀色の瞳
にほつとする。

それは甘えなのだろうけど、そう感じてしまふのを止められな
った。

「けどよ、今回に限っては、殿下に従わなきゃ家族死ぬんじゃない？
何か思い当たったのか、捕虜の人が硬直する。」

「あんた分かってそうだけど、借金のカタに家族人質にしちまうと
こなんだろ？　なのに殿下と会って話して逃がしたなんて分かつた
ら、『反乱分子』とか言われて家族皆殺しだぜ」

「確かにありそうだな。どうもあの連中は、血の気が多いうえ狭量だからな」

それなりに事情を知っている殿下が、嫌な肯定をした。

捕虜の人にいたっては、震えだす有様だ。どうもその革命派、そうとうのことを平気でやるらしい。

「よく分かんないんだけど……要するに、もう詰んじゃってるってこと？」

不思議そうなナティエスに、殿下が答える。

「この国の革命派とやらは、先程も言ったが、どうにも先鋭的でな。しかも何でも力に訴える。聞いた話では、意見が合わないと肅清されるらしい」

「……サル山のボスみたい」

辛辣な意見に、イマドが返した。

「サル以下だろ。あいつら殺し合いはしねーぞ」

「あ、そっか。サルに失礼だね」

当人たちが聞いたら、それこそ真っ赤になって怒りそうだ。

「あの……それで自分、どうすれば」

捕虜さんが、困ったみたいな顔で訊く。

「どうすればって、いい年してんだから自分で考えろっての。まあ殿下の言うとおりにすっか、全部バラして肅清されっか、ケツまくってこのままどっか逃げるか、その辺だけどな」

イマドがさらりと、説明するフリをして誘導した。

この辺は、彼はずば抜けて上手い。相手に考えさせるように仕向けながら、実際には都合のいい選択肢を並べて、相手を思うとおり

にしてみよう。

——あたしも、やられてるかな？

一瞬そう思ったけど、それでもいいかな、とも思った。仮にあたしが不利になっても、彼を疑いたくない。

むしろあたしのほうこそ、あんなマネをするわけで……。

Episode : 40

「早く決めるよ。つかこのまま置いといていいよな？」

「やっ、やります！ この命と家の名にかけて、やります！」
捕虜さんが叫んだ。

「家の名？ まさか貴族か？」

「いえ、貴族って言うほどじゃなくて……それでもいちおう、準男爵の家でした。ただ先々代のときに、取り潰されたので」

どうりで、革命派にしては変わっているわけだと納得する。没落したとはいえ世襲の家柄だったなら、公爵家に楯突くのは嫌だろう。

「そうか。ならば我が名に賭けてそなたに誓おう。ユーベル＝ブノワ、そなたが公爵家に従う限り家族を保護し、任を全うした暁には家の再興を約束する」

なんだか大げさなやりとりだけど、効果はあったらしい。捕虜さん、感極まって泣きだした。

「今から泣いてどうする。泣くのは家が再興してからにしろ」

「は、はいっ！」

やる気満々の捕虜さん。たぶんこの状況が何を意味するか、分かっている。

いま殿下がやれと言っているのは、要するに裏切りだ。そんなことをしたら、よほど運が良くないかぎり、末路は決まっている。

とはいえ家族が保護されるのは間違いないし、死んでも家は再興されそうだから、この人にとってはそれで十分なのかもしれない。た。

「ほかにお前たち、この者に言うことはあるか？」

「あ、ええとあの、命令されて手分けして探しに行った、ってことにしたほうが。で、合流できなくて戻ってきたって言えば、たぶん時間が稼げます」

殿下の策に付け加える。

もう一人の襲撃者は死んでるわけだから、そこから情報が漏れる心配はない。死体の隠し場所もあたし以外知らないし、この捕虜さん気が弱くて期待されてなさそうだから、おそらくこの言い訳で通るだろう。

「今の話、分かったな？」

「了解です！」

捕虜さん、親衛隊気分だ。縄を解いてもらったとたん、殿下に敬礼してる。

「さて、我々も行くか」

捕虜さんの後姿を見送りながら、殿下が言った。みんなも同意して、行きとはうって変わって減った荷物を手に、歩き出す。

「にしても殿下、何でこの状態で、捜索隊とか来ないんだい？」

ある意味もつともな質問を、途中でシーモアがした。

「あたしらはともかく、殿下に何かあったら、国中が大騒ぎだ。なのに様子も見に来ないって、ちょっと理解できないんだけどね」

「儀式中だからな」

さつきも聞いた答えを、殿下が口にする。

「けど殿下、いつくら儀式って言ってもアレじゃない？　なんかあったら困るでしょ」

「言いたいことは分かるが、儀式の最中に部外者が入ると、その時点で僕の継承権がなくなるからな。だから日付が変わるまで、待ってるんだろっ」

この説明に、みんな納得のいかない顔だ。

「継承権は分かるけど、もしそのあいだに殿下死んじゃったら、どうするつもりなの？ ホント貴族の考えることって、分かんない」「命より名誉、だっけかね？ けど死んだら、なんにもなんないだろっ」

そんなあたしたちを見て、殿下がちょっと満足そうな笑顔になった。

「お前たちは、いつも本音だな」

「何をいまさら。あたしたちにしてみりゃ、いつも建前ばっかの殿下たちのほうが、よっぽどおかしいって」

シーモアの齒に衣着せぬ物言いに、みんなもにやりと笑う。

イマドがまとめた荷物を、背負いなおした。

「ともかく行こうぜ。こうなった以上、同じ場所にずっと居たらヤバいしな」

「うん」

答えて谷の出口へ、あたしたちは向かった。

Episode : 41

Seamore

真つ暗な中を月明かり頼りに、あたしらは谷の出口へ向かった。先頭はイマド。どういうわけかコイツ、昔っからやたらと夜目が利く。

で、危険の多い最後尾はルーフェが買って出て、あたしらは殿下挟んで真ん中だ。

正直いばん小さいルーフェに、殿任^{しんがり}せるのは割り切れないところがある。けどあの子がいちばん強いわけで、ほかの選択肢は取れなかった。

「あとちよつとで、谷の出口見えるぜ」

「ほんとに？」

そんな会話をしながら、暗い足元に気をつけて藪を出ようとして

……ルーフェがあたしらを止めた。

「ルーフェ、何？」

「いま行かないほうが……いいと思う」

みんなに緊張が走る。この子がこう言う時は、大抵なんか危ない。ただルーフェのほうは、今回はそういうつもりじゃなかったらしくて、慌てて付け加えた。

「えっと、そうじゃなくて……敵は殿下、死んだって思ってるから。なのに迂闊に出てたら、生きてたのが分かつちゃう」

「あ、そういうことか」

なんせ谷の出口だ。恐らく敵は見張ってる。そこへノコノコ出たら、せつかくの偽装が水の泡ってことだろう。

「どうする？」

「先に……投げ文か何かで、こっそり知らせたほうがいいかも。殿下は無事で日付変わったら戻るけど、見張られてるから無事じゃないフリしてほしい、って」

ルーフェが即座に答えた。さすが学年主席の戦場育ちなだけあつて、こういうことは頭が回る。

「じゃあ、紙」

「待って、あたし、いま書く……」

どっからかごそごそと、ルーフェが紙とペンを出した。けど、手間取ってる。

「何やってんだお前」

「暗くて……」

さすがのルーフェも、この暗さじゃ上手く読み書き出来ないらしい。魔光灯点けりゃいいんだろうけど、見つかること考えると、使わけないから困る。

「貸せよ、俺書くわ」

いちばん夜目の利くイマド——こいつの目どうなってんだい——が、横から奪ってさらさらっと書いた。

「これでいいか？」

「えっと……うん、これで。あと殿下にサイン、してもわからないと今度は殿下に紙が回る。」

「書けますか？」

「サインくらいなら大丈夫だ」

答えて殿下が書き慣れてんだらう、すぐにサインして紙を返して

きた。

「これを、届けるのよね？」

ナティエスの問いに、ルーフェのヤツがうなづく。

「じゃあ、あたしら行くよ。幾らかは早く行けるだろうし」

このくらいはしないと、ルーフェに任せっぱなしで、あたしらの立つ瀬がない。

「いいの？」

「もちろん」

短い会話のあと、あたしは紙を受け取った。

Episode : 42

「……お願い。あたしたちも、後から行くから」

「分かってるって。ナティ、行くよ」

こういうときの単独行動は厳禁だから、ナティエスを誘って歩き出す。けどなんせ足元が暗いから、どうしてもゆっくりだ。

っても山歩き慣れてない殿下よりは、ずっと早い。谷の出口が少しづつ、近づいてくる。

「ねえあれ、殿下のこと、探してる？」

「らしいね」

さすがに山火事なんて状況に、慌ててんだろう。大型の魔光灯が設置されてるし、大声で殿下を呼ぶ声も聞こえる。

おかげで足元は今度は明るくていいけど、見つかるわけにいかないから、死角になる位置へ移動した。

気取られないように、そっと近づいてく。

切れ切れに聞こえる言葉と、人の様子から見ると、搜索隊を組織してるところらしい。日付が変わったら入ると、前に立つ隊長らしい人が檄飛ばしてる。

「いちおう、殿下のこと心配してたんだね」

「ちと向きがズレてるけどね」

しきたりが先で救助が後なんて、あたしにや理解不能だ。

っても、やらなきゃならないことは、やらなきゃならないわけで。あたしはナティと気をつけながら、更に近づいた。

ギリギリまで前へ出て、途中で拾った小石を物陰から投げつける。狙いたがわず、小石は前に居た指揮官らしき人に当たった。

「すごいすごい、シーモアさすが」

「任せな」

こういうのは、あたしは自信ある。

続けて2つ3つ投げると、気がついたんだろう、指揮官らしき人が周りをきよるきよる見回した。

そこを狙って、今度は中に石を入れて丸めた例の手紙を、投げつける。

幾つか投げた後だから、すぐに指揮官らしき人は気がついて、拾い上げて紙を広げた。

表情は遠くてぜんぜん分かんないけど、動きが止まったとこみると、内容が予想外だったらしい。

ナティも感づいたみたいで、小声で話しかけてきた。

「なんかあの人、驚いてない？」

「だね。考えてもなかったんだろ」

自分の国の中のことだったのに、気づかないなんて甘すぎる。これで殿下に何かあったら、この国が揺らぐだろうに。

なにしろ、意味は飲み込んだらしい。前に居た人が一旦離れて戻ってきたけど、それ以外に変わった様子はなかった。

「日付が変わったら、すぐに谷を搜索する。それまで各自、装備と手順の点検をするように！」

ひときわ大きな声で言ったのは、たぶんあたしらにも聞かせるためだろう。

予想通りコトが運んでるから、あとはすることなさそうだ。

「時間は？」

「まだもうちょっとかな」

仕方なくそのまま暗がりです、ナティと2人待つハメになる。
物陰から眺める搜索隊は、かなり張り詰めた感じだ。

Episode : 43

「いつそ、儀式なんてやめちまえばいいのにさ」

「んー、でもああいう世界って、いろいろ決まり多いから……」

「そんなもんかね」

答えるあたしに、向こうを見ながらぼつりとナティが言った。

「殿下、可哀想だよな」

「そうかもね」

ああいう貴族とかつてのは、お高くとまってるいけ好かない連中ばっかだと思ってたけど、ちょっとだけ違うらしい。少なくとも、今の殿下はそうだ。

ただその殿下も、去年はああだったわけで。

「あたしらさ、何に振り回されてんだろね」

「え？」

ナティの疑問の声に、考えながら答える。

「なんてのかな……。ほら、殿下もあたしらも正直、そんなに変わらないじゃないか」

「あー、言いたいことなんか分かったかも」

全部言わないうちに、ナティがうなずいた。

「身分とか、見せてって言っても、誰も取って出せないもんね」

「ああ。なのになんかでそれに頭下げてたり、どうなってんだか」
ナティが膝を抱え込んだ。

「――あたしね、お父さんもお母さんも居なくなっちゃったでしょ？」

「ああ」

この話は知ってる。てか、ナティがスラムへ来ることになった原因だ。知らないワケない。

ぼつぼつと、ナティが続ける。

「何でかはいまでも分かんないけど……ともかく、とたんに全部変わっちゃって。そのあともなんかね、呼ばれ方変わるたびに、みんな違うの。ワケわかんなかった」

ナティはあたしらと少し違って、大人の都合ってやつに、振り回されっぱなしだった。

親が居なくなつて、残されたはずの財産横取りされて。親戚の家で冷遇されて乱暴されかかって、飛び出して居ついたのがあたしらんどこだ。

「ホントにね、昨日と今日で全く違うの。昨日まであたしにペコペコしてた人が、いきなり威張りだしたり」

暗がりには浮かぶ横顔からは、何も覗えない。

「ひとりになつてから、ふつうに話してくれたの……シーモアたちだけだったかな」

「そんなもんかね」

そう言ってから、白状する。

「けどナティが“お嬢さん”のままだったら、ゴメン、すれ違っても口もきかなかっただろうね」

「あ、そうかも」

互いに顔を見合わせて、思わず笑った。

本当なら交わることなんてなかったらうに、ひょんなことで知り合つて、意気投合して。世の中なんてずいぶんといい加減だ。

「もしかして、みんな自分が知ってる基準で、テキストに判断して
るだけなのかもね」

言ってナティが、どうか悪意含んだ声で、くつくつと笑う。

Episode : 44

「だとしたらなおさら、あたしら何に振り回されてんだろね」
「んー、なんだろね？」

こうやって改めて考えてみると、さっぱり分らない。ナティの言うとおり、「知ってる範囲でテキストに」ってのがいちばんありそう。

でもそれじゃ、全部のことを知らない限り、答えなんて出ないってことになる。

「結局、ホントに正しいことなんてないのかね」

「そうだと思う。そうじゃなかったら、あたしこんなに、いろいろ変わらなかっただろうし」

実際にそういう目に遭ったナティの言葉は、説得力があった。

なんかそれ以上話が続けられなくなって、二人で肩を寄せ合う。人間に理解できる距離なんて、こんなもんなのかもしれない。それからふと思う。

「あたしらに会って、殿下もなんか分かったのかね？」

世の中の、いちばん上といちばん下。あたしらはそんな位置関係のはずだ。

ナティがあごに人差し指を当てながら、暗い空を仰いで言う。

「どうだろ？ 殿下たしかにちょっと変わったけど、それってルーフェが原因ばいんだもの」
「言えてる」

思わず二人で、暗闇で小さく笑った。良くも悪くもあの殿下、ル

「フエにぞつこんだ。」

「けどあの子、殿下にどうこう出来るほどヤワとは、思えないんだけどねえ」

「そりゃそうだけど、ほらルーフェって見た目と性格だけは、“守ってあげたい”タイプだし」

あれをどうやって守るのかあたしに見当つかないけど、ナティの言うとおりだ。儚げなあ顔で、碧い瞳に涙ためて見上げられたら、堕ちない男のほうが珍しいだろう。

あの太刀だの魔法より、ある意味破壊力抜群だ。

「まあ最終的に、元の鞘だと思っただけだなー」

「ったく殿下もバカなことするよ。どう見たって横恋慕だつてのに」とはいえそれで片付かないのが、こういうことなんだろうけど。

「……そろそろみんな、来るかな？」

ふと声をひそめて、ナティが訊いて来た。

「来るだろうね——ああ、来たよ」

言ってる傍から、小枝を踏みしだく音が聞こえてくる。どこにいるか丸分かりだ。

つてもこういうところ歩くのに、殿下が慣れてないから仕方ない。てかこれがルーフェだけだったら、いきなり真後ろに立たれて、今頃仰天してるだろう。

思ってるうちに足音が近づいて、三人があたしらの傍へ来た。

「様子はどうだ？」

「様子って言うか、搜索隊出すつもりだったらしいね。いま組織して待機させてるよ」

「そうか」

短く答えた殿下、けどちょっと嬉しそうだ。

「あの搜索隊が行ったら、こっそり行けばいいのよね？」

「んだな。出てったあとのドサクサ狙えば、さっくり行けるって」
イマドの言葉に、みんながうなずく。

Episode : 45

「あーあ、なんか疲れちゃった。帰ったら、お菓子食べたいかも」

「……ケーキ？」

「ルーフェ、ケーキ好きだよなー」

待つ間の、他愛ない会話。

「なんだ、ケーキが好きなのか？ ならば戻ったら、山ほど用意してやるぞ」

イマイチ分かってない殿下が、要らん横槍を入れる。

「何か欲しいものはあるか？ シェフなら、大抵の種類は作れるはずだ」

「えっと、あの、あたし別に……」

案の定、ルーフェは決められない。てか、そんなに欲しそうでもないし。

「遠慮するな、なんなら他国からでも取り寄せるぞ」

「……いいかげんにしなつて。見つかつちまうよ」

さすがに呆れて、殿下の饒舌を止める。久々に自分の出来ることが出て嬉しいんだろうけど、場違いだ。

殿下もようやくと気づいたみたいで、それっきり押し黙る。

「あいつら、動くんじゃねえか？」

ちよつと気まずいほどの沈黙になったのを、イマドが軽い調子で破った。

みんなの視線が一斉に、谷の入り口へ向く。たしかにこいつの言うとおり、隊列組んだ一行が、前に立った偉そうな人の話を聞いてた。

それから号令があつて、列が動き始める。あたしらが潜んでる茂みの、目と鼻の先を通つてつたけど、事情を知ってる隊長さん以外は、誰も視線を向けなかった。

無事で、しかもこんな間近にいるなんて、考えてもないんだろう。ルーフェの作戦が大当たりだ。

隊列が完全に通り返して、向こうの暗闇に見えなくなつてから、あたしらは茂みから這い出した。

暗がりを伝つて、そつと谷を出す。

物陰から見回すと、少し離れたところに、たくさんの車両と天幕があつた。あそこがたぶん、指揮所だ。

闇の中、互いにうなずきあつて、走り出す。

今度は先頭がルーフェとイマド、真ん中に殿下で、あたしとナテイが最後尾だ。

——やっぱ、悔しいな。

万が一武器でも向けられたとき、確実に対処出来るのはルーフェだ。だからあの子が先頭に立つのは、間違っちゃいない。

けど今回、片っ端からルーフェが独りで、コトを片付けちまつてる。あたしらこれじゃ、ただのオマケだ。

そんなこと思つてる間に、ルーフェとイマドはあっさり走り抜けて、天幕の中へ滑り込んだ。

あたしらもほんの少し遅れて、中へ入り込む。

「殿下、よくご無事で！」

あらかじめ話が伝えられてたんだろう、中は偉そうな人が勢ぞろいしてた。あと真ん中に置かれたテーブルに、軽食なんかを用意し

てある。

「お疲れでしょう？　すぐお休みになりますか？」

「いや、少しお前たちと話がしたい。どうもいろいろ、事態が深刻なようだ」

予想してたのか、偉い人たちがうなずいた。

「では今、お飲み物を。お連れの方々もどうぞお座りください」

椅子を勧められて、あったかいお茶が出されて、話が始まる。

殿下がホントに簡単に経緯を言つと、みんなが思案顔になった。

「殿下から知らせを受けて、襲撃者の素性は予測していましたが…
… 火事もでしたか」

どうやら本気で、この人たちの予測を事態が上回ってるらしい。
だとすると…… かなり状況はヤバイはずだ。だいたいが後手に回ったときつてのは、良くて苦戦、悪いと負けになる。

「殿下、差し支えなければどのような状況だったか、お教えいただけますか？」

「それは僕より、この者たちのほうが適任だな」

こっちへ話が振られる。

互いに目配せした後、けっきょくルーフエが説明を始めた。

Episode : 46

「最初に違和感を感じたのは、初日の昼頃でした」

それから2日目の人形、3日目の人形と冷気庫爆破、4日目の火事と襲撃と、簡潔に話が続く。

話が進むにつれて、偉い人たちの顔が青くなったのは、言うまでもない。

「本当に、よくそれでご無事で……」

「彼女のおかげだな。非常に優秀だぞ」

大人たちの目が賞賛に変わったけど、ルーフェは嫌そうだ。きつと内心、泣きたい気分だろう。

「んですんません、もし良かったら、なんか食わせてくれませんか？
あと、寝るのと。さすがに俺ら、疲れたんで」

ルーフェの様子に、イマドが話を切り替えた。この辺はコイツ、ほんとソツがない。

——ルーフェ限定だろうけど。

ちよつと癢に触るけどイマドときたら、ルーフェのこととなったから見境ナシだ。

「あ、これは申し訳ありません、今すぐご用意を」

「——あの」

大人しいルーフェが、珍しく口を挟んだ。

「食べるのは、いいんですけど……今晚のうちに、移動したほうが」
「移動ですか？」

訊かれたこの子が、うなずいて話し出す。

「朝になって移動したら、それだけ見つかりやすくなります。それに敵はまだ、殿下がここに居ることを、たぶん知りません。だから今のうちに……」

「なるほど、確かにそのほうが良さそうですね」

ルーフェの的を射た提案があっさり通って、また移動らしい。

つくづくとんでもない子だと、内心舌を巻く。少なくともあたしは、これで一段落だと思ってた。

「早いほうがいいでしょう……。殿下、恐れ入りますが、軽食は車中でよろしいですか？」

「ああ、かまわん。命には代えられんしな」

殿下もここまで続きやさすがに、状況飲み込んだらしい。ムチャしないのは大助かりだ。

「屋敷まで行ったら、夜が明けそうだな」

「夜が明ける前に着くと思いますよ」

そんな会話へ、またルーフェが割り込んだ。

「あの、それはやめたほうが……」

「屋敷がですか？」

疑問にこの子がうなずいて、話だす。

「先ほども言いましたけど、敵はその、殿下が死んだと思ってます。なのに屋敷へ帰ったら、知られるのが早くなるかと……」

要するに、せっかくの時間稼ぎが無駄になるって言いたいらしい。

「なるほど。ですがそれ以外と言われても、急には……」

「この近くにある、公爵家の別荘はどうだ？」

殿下が横から言う。

「あそこは今は、留守番役しか居ないはずだ。あまり一般にも知られていないし、隠れるには悪くないと思うが」

「あ、それなら……」

ルーフェが納得して、偉い人たちも同意する。

「お車とお食事を用意しますので、少々お待ちを」

「あたしそれまでに寝ちゃいそう……平気かな？」

ナティの心配そうな声に、ここの人たちが笑った。

「ご心配なく。ちゃんとお連れしますから」

訊いたとたん、あたしもなんか眠くなる。安心しちまったのかもしれない。どうにか用意された車に乗ったところで、起きてるのも辛くなる。

「起こしますので、寝ててかまいませんよ」

「すいません、そうさせてください」

毛布がかけられる感触を最後に、あたしは眠り込んだ。

Episode : 47

R u f e i r

はつと目が覚めて、飛び起きた。

「……あれ？」

見知らぬ部屋の、見知らぬベッド。

なんでこんなところに居るのだろうと、ちよつと考え込む。たしかあたしは、殿下の護衛で谷へ行って……。

少し記憶を辿って、やつと思い出した。どうにか谷を出た後、すぐに殿下の別荘までつれてきてもらったのだ。

自分で提案したくせに、すっかり忘れているのだから呆れるしかない。

窓の外を見ると、既に陽が高く昇ってた。そうとう眠ってたみたいだ。

部屋が余ってたのか、今回はひとり一部屋だ。それも水周りまで一通り揃った、立派な部屋だった。

——みんな、起きたかな？

そんなことを考えながら、久しぶりにお湯のシャワーを浴びる。

髪も綺麗に洗って乾かしていると、ドアがノックされた。

「あ、はい、どうぞ」

入ってきたのは、ここの使用人さんらしい人だった。ただ普段の屋敷とは違って、気の良さそうなおばさんだ。きつとここの、留守を預かってるんだろう。

「お茶をお持ちしました。朝食はこちらで召し上がりますか？」

「お願いします」

答えながら、寝過ごしたかなと思う。

朝食の時間なら、食堂へ呼ばれるはずだ。なのに最初から部屋が前提なのだから、完全にこちらの朝食時間から外れてるんだろう。

別荘の中は静かだった。外にも人の気配は殆どないから、殿下が無事でここに居るのは、まだ知られてないんだろう。

部屋に備えられてた、魔視鏡を点けてみる。

幾つかある放送帯は、どれも殿下の話でもちきりだった。極秘裏に儀式に行ったものの、山火事に巻き込まれたようで安否不明、と報道してる。

最初に行った例の屋敷、会見をしている侍従長、街角で魔視鏡を見ている心配そうな人々。そんなものが次々と映し出されている。

行儀が悪いと思いつつ、アヴァンの国内の様子が知りたくて、運ばれてきた朝食を食べながら見続けた。

魔視鏡は町の様子、状況の報告と続いた後、場面が変わった。ワケ知り顔の男の人が、偉そうな態度で解説を始める。

「ですから以前から、公爵家は国民を騙していたわけで——」
「どうやら例の話らしい。」

「では今の継承権というのは、根拠がないと？」

「故事に従うなら、その通りです。つまり公爵家は代々、継承権が無い者が継いできた盗人集団なのです！」

メチャクチャだ。確かに儀式のところはいろいろあるけど……さすがにこの言い方はヒドすぎる。

殿下もお父さんも、強引だったりする。けど、この国のこととを考えてるのは間違いない。少なくともこの解説してる人よりは、いっしょけんめいだ。

なのにそういうことをまったく言わず、連続殺人犯みたいな調子で、儀式のことだけを追及してる。

Episode : 48

画面がまた切り替わった。街中を行く人に、報道の人が集声機を向けてる。「国民の声をお届けします」とか、解説が入ってた。

何人もの人が質問に答える様子が、次々と映る。

けど不思議なことにさっきまでと違って、公爵家に批判的な意見ばかりだ。心配そうに見ていた人たちだってたくさんいたはずなのに、そういう人が一人もいない。

「扇動」。

違和感を覚えながら映像を見るうち、その言葉が頭をよぎった。

諜報戦に駆り出されることもあるシエラでは、その辺についても割と早くから教える。その中で、似たような状況に触れていたはずだ。

どこかの小国だったと思うけど……気づかないうちに敵国に報道を乗っ取られて、自国の王室だかに不審を持つような話を次々と流されて、国内が混乱。その隙に攻められて占領された、っていう顛末だったはずだ。

たしかあの捕虜さんは、似たようなことを言っただろうか？

——だとすると、まずいかも。

根拠はないけど、そう思う。

100人のうち5人しか反対がいなくても、その5人だけを取り出したら、全員反対に見える。これも習ったことだ。

そしていま報道がやってるのは、それじゃないかと思う。

まあ見ている人たちが、気がついて騙されなければ済むことなのだけ……でも成功した例もあるから、油断はできない。

とりあえずこれ以上見ても意味がなさそうだったから、一旦魔視鏡を止めて、朝食を食べ終える。

殿下や他の人と話をしないと、と思った。

あたしたちへの依頼は、元を正せば儀式の護衛だ。だから見方によつては、もう完了したことになる。

けどこの状況を、なんとなく放つてはおけなかった。それに言いようによつては、まだ終わつてないとも取れるはずだ。

最低限、この辺をどうするかの話はあるだろう。

少し考えてから、呼び鈴を押す。こういうところだから直接動き回るより、人を通したほうがいいはずだ。

「はい、何でもございますか？」

案の定、すぐに応答があつた。たぶん、さっきの女の人だ。

「あの、出来たら殿下と、話をしたいのですけど……」

断られるかもしれない思いながらも、切り出す。

予想外の事態だから、話をするだけじゃなくて、イオニア先輩も呼んでもらわないといけない。それから学院にも報告して、どうするかも決めて……やることが山積みだ。

しばらく待つて欲しいという旨の言葉があつて、通話石が静かになる。

「お待ちせしました、食堂の場所はお分かりになりますか？」

少しして言われた言葉は、それだった。部屋じゃなくて食堂だから、みんなで集まるのかもしれない。

「えっと、下……ですよね？」

このフロアは客間やなにかばかりだから、食堂があるのは別の階だろう。

Episode : 49

「あ、申し訳ありません。タベ遅く着いて、ご存知ありませんね。いまご案内します」

すぐにさっきの人が来て、食堂へ案内された。

——こういうことなら食事、最初からここで良かったのに。

そんなことも思ったけど、まあいまさらだろう。

食堂の中は誰も居なくて、他のみんなも出来たら呼んでくれるよう頼んで、しばらく待つ。

じき、みんなが入ってきた。

「おはよ、ルーフェ。寝れた？」

「うん」

みんないつもと変わらない。昨日あたしがしたことなんて、なかったみたいだ。

たぶん……気を遣ってくれてるんだろう。本当に気にしてなくて忘れてしまってるなら嬉しいけど、あまりそうとは思えなかった。最後に、殿下が入ってくる。

「全員揃ってるな。それでルーフェイア、何を始めるつもりだ？」
昨日のことやなんかが堪えてるんだろう。殿下、ちょっとだけ不機嫌そうだ。

「えっと、何をつて言っても……あの」
自分でも何を言ってるか分からない。

「どうした？ 何か言いたかったから、呼んだんじゃないのか？」

殿下の声が、ちょっとだけ優しくなる。
それに勇気付けられて、言ってみた。

「あの……このあとどうするか、考えないといけないので……。あと、イオニア先輩にも、ここに……来ていただかないと」

言いながら、最初から先輩を待てばよかったかな、と思う。百戦錬磨の先輩なら、きっと簡単に采配を振るってくれたはずだ。

「イオニアというと、お前たちを連れてきたあの高飛車な女か？
彼女なら今ごろ、こちらへ向かっているはずだ」

「そうなんですか？」

どうやら殿下のほうにはいち早く、情報が伝えられていたらしい。

「話では、山火事の報が入った時点で、すぐ谷へ向かったそうだが我々が戻ったことが上手く伝わらなくて、先程まで救出本部で待機してたらしい」

話を聞いて、先輩きつと怒っただろうな、と思う。でも、先輩にさえあたしたちが無事なのが伝わらなかったのなら、敵もまだ騙せてるだろう。

「そいえば殿下、無事ってコト王様とか知ってるの？」

「お前たちには悪いとは思ったが、父と祖父には伝えた。さすがにあの二人に、黙っているわけにもいかないのな。だがまだ、公にはされてはいないはずだ」

殿下の言うとおりだろう。

もしどこから漏れたなら、報道がもう騒いでる。でもさつき見た中じゃ何も言っていなかったから、まだ誰も知らないはずだ。

けど、ずっとこのままってわけにはいかない。必ずどこかで知れ

るから、それまでに状況を把握して、どう動くか決めなきゃいけないかった。

「それにしても、どうすりゃいいのかね？」

同じふうに思ってるんだろう、シーモアがそんなことを言う。

Episode : 50

「どうって言うか、そもそもどうなってるの？ あたしまだ話がよく見えなくて」

言いながらナティエスが、殿下とイマドを見た。この中でアヴァンに關係があるのはこの2人だから、何か分かるだろうと言わんばかりだ。

「今朝の魔視鏡見た感じじゃ、まーヤベえかな。公爵家イラネーって連中は前からいるけど、ちっと大っぴら過ぎる」

イマドが言うにはアヴァンというのは、やっぱり王室は好かれてるんだとか。だからこんなふうに大々的に言うのは、あり得ないらしい。

「あーでも、この手の騒ぎ昔あった、って叔父さんから聞いたな」「そうなの？」

イマドがうなずいて、十何年前にもあったと言う。

「俺も生まれてねーからアレだけど、姉貴とか叔父さんの話じゃ、あん時は相当だったらしいぜ。ちっさい町でも、デモやる連中が居たらしいし」

原因は、継承権第一位と見なされていた王女さまだという。

「国捨てようとする王女と、そんなの出す公爵家なんて要らねえって、国中大騒ぎだったんだとさ」

「微妙に事実と違うがな」

みんなの視線が、殿下に集中した。

「どういうこと？」

「この話、元を正せば伯母上の留学だ。友好の意味も兼ねて公爵家から初めて、海外へ留学することになってな」

よくある話だ。

昔だったら政略結婚になるんだろうけど、今はあんまりそういうことをしない。だから代わりに、留学という形で相手国へ王族を派遣して、同じような意味を持たせている。

「留学が、問題になっちゃうの？」

「この国は、なる」

ややこしい話なんだろう、一息おいてから殿下が言葉を続けた。

「他の大陸ならともかく、この辺りではアヴァンは、もつとも古い国だ。加えて各国の王族も、ほとんどにうちの血が入っている」

そういえばそんな話は、聞いたことがあった。

世界はずーっとなんとなく乱れてるけど、別に常に戦争しているわけじゃない。たまに小競り合いがあつて、あとは講和と駆け引きの繰り返しだ。

その中で大国だったアヴァンは、当然だけ力があつた。だからその庇護を受けようとする周辺国との、政略結婚があとを絶たなかったという。

結果としてこの大陸の王族、特に東側はほとんど全部が、親戚になつてしまったそうだ。

「けど、それと留学と、何の関係が？」

「さつきも言つたが、アヴァンは国も王族も古い。だから他国から留学に来ることはあつても、他国へ“行く”ことなど無くてな」

なのに時期女王候補が外国へ留学という話に、国内が大騒ぎになつたと殿下は続けた。

「つまり……みんなのプライドが許さなかったとか、そーゆーこと？」

「まあ、そんなところだな。伯母上自身は気にしていなかったし、そもそも伯母上が言い出したことだったそうだが、国の重鎮たちと、何より国民が許さなかった」

歴史があるというのは、いろいろ大変な面もあるらしい。

Episode : 51

「ともかくその辺りから、“国を捨てようとした王女”という評価になってしまつてな」

「なにそれ。いくらなんでもヒドくない？」

ナティエスが言うのももつともだ。自国の王女をそんなふうに言つた国なんて、ちよつと聞いたことがない。

「まあそうなんだが、まさか公爵家が、公然と国民を非難するわけにもいかんだろう？」

そのせいで、強く出られなかったという。

「こちらもちろん、意図や何かをずいぶん説明したというが……連日の報道で思い込んでしまった国民を、どうすることも出来なかったそうだ。結局伯母上が継承権を返上して国を出て、ようやく力タが着いた」

あまりな話に、みんな言葉が出ない。
殿下が静かな声で続けた。

「聞いた話では伯母上は庶民派で、平民とも親しくしていたとか。『国民一人一人の力で、よい国は作られる』というのが、持論だったと聞いている」

「そんな人なのに、ホントに国を捨てちまつたのかい？」
何か腑に落ちない、そんな表情のシーモアの問いに、殿下が答える。

「留学の話が出たとたん、それまでとても親しくしていた平民からまで、公爵家の義務だの何だの言われたらしい」

当時を知つてゐる殿下のお父さんが言うには、「理想の国を語り合

った仲なのに、未来を守ることより過去の夢なのか」と、その王女さまは嘆いてたそうだ。

「あのころは大战直後でわが国の国力も落ちていたし、国際情勢も何かと微妙でな。加えてロデステイオを囲い込むためにも、西の大国工バスか、その友好国と手を結ぶ必要があった。留学は、そのためのものだったんだが……」

殿下がため息をつく。

「伯母上は恐らく、幻滅したのだろうな。分かっていると思っていた友人たちまでが、その実、所詮は他人事だったことに」

本人に訊いたわけじゃないから分からないけど、殿下の言ってることはたぶん、正しいと思った。

いろんなものを信じてただけに、崖から突き落とされた気分だったんだろう。

「親友から言われたら、そりゃきつついねえ……」

「って言うか、それホントに親友？　あり得くない？」

誰が見ても親友同士の、シーモアとナティエス。二人を見ると、その王女さまの友だちとやらは、やっぱり親友とは違ったんと思う。少なくともこの二人は、相手が考え抜いてのことに對して、そんなことは言わない。黙ってたことを怒ったあと、一緒に悩みながら乗り切るはずだ。

「いずれにせよ、友人からまで棄国の姫と言われて、国を出る気になつたらしい。当時の世論もひどいもので、本当に革命寸前だったしな」

そして彼女はある夜、継承権放棄の誓約書を置いて、消えてしまったそうだ。あとは国のいいように、適当に理由をつけて発表して

欲しい、と。

「それじゃまるっきり、国の犠牲じゃないか」

「まあそうだな。だがそのおかげで、世論があつという間に静まったのも事実だ」

いちばん怖いのは人だというけど、本当にそうだと思う。

結局は目先のことしか見ていなかった人たちに、王女さまはどれほど失望しただろう？

Episode : 52

「……なんか俺、さすがにちつと、ショックなんですけど」

アヴァンに縁のあるイマドが言う。

「そうか、それは良かった」

茶化したような言い方で、答える殿下。でもその声には、非難の色はなかった。

「まあ事情が事情だから、詳細も公開されていないしな。知らずに誤解しているのは、やむをえんだろう」

そんな殿下を見ながら、大変だなと思う。たしかに公爵家はお金に困ることはないだろうけど、こんな話が常に付いて回るんじゃ、神経が磨り減って無くなりそうだ。

「けどやっぱ、なんか分からんね……。話聞いているかぎりじゃ、庶民思いの立派な王女さまだったんだろ？　なのになんだって、いきなり“国を棄てる”だのって、みんな思い込んだんだい？」

シーモアの疑問に、ナティエスもうなずいた。

「たしかに、言われてみればヘンだね。立派なお姫さまって分かってるんだから、そういう話って仮に聞いても、笑って流すのがふつうだし」

「そこは今もって、我が家でも謎に……」
殿下の言葉の途中で、はっとする。

「あの、もしかしてそれ、今と同じじゃ？」

「ん？　——あ、そーゆー話かよっ！」

イマドがいち早く、意味に気づいた。

「どういつ話だと言っんだ？」

「だから、今と同じですって。報道使って特定のヤツに不利な話を、徹底して流す。嘘も100回言えば相手は信じる、ってヤツですよ」
みんなもはつとした顔になる。

「つまり、“姫が国を棄てる”って、意図的に流した……」

「部外者が知れる情報なんて、限られちまってっからな。それを逆手にとって、それっぽく何度も嘘スレスレのこと魔視鏡で流しゃ、簡単に思い込みまうだろ」

イマドの言葉に、誰もが表情を陰しくした。

「だとすると我が国の報道は、あの頃から連中に握られていたのか？」

考えながら、言う。

「可能性は……あると、思います。諜報戦は、基本ですし」

他国と戦争をするしないに関わらず、諜報戦は行われる。たった一つの情報を取るために、何人もが死ぬことだってあるくらいだ。この場合は内戦に近いものだけど、基本は変わらない。事を起こす前に、自陣に有利になるように立ち回るのは、基礎の基礎だ。

そしてその際、出来るなら報道関係を押さえるというのも、基本的なことだった。

——難しいのだけど。

簡単に思い通りに出来るのなら、諜報戦なんて苦労しない。けど何故かその「難しいこと」が、この国ではやれているみたいだ。

「もしそうだとすると、かれこれ20年越しかい？」

「そうなるな……。これではどこまで入り込まれたか、見当もつかん」

飯に王女さまの頃からだとするなら、出奔で世論が押さえられてしまったあとも、工作は続けてただろう。

それにこれなら、捕虜さんが言ってた話とも、辻褄が合ってくる。思い通りに話を流してくれる報道を利用して、「王家の儀式の不正」という大スキャンダルと非難する意見を流し続ければ、世論はそれこそ思い通りだ。

そして今朝、魔視鏡で見たのが……まさにそれなんだろう。

Episode : 53

「マジでキツくないかい？ 前は言いがかりに近かったのに、それでも成功したんだろ？ けど今回はこっちに非があるから、言い逃れできないじゃないか」

「——まったくだ。対抗手段が思いつかん」
殿下が難しい顔になる。

「庶民はこの手のスキャンダルが、好きだからな。同じだけの量の報道をしても、まだこちらに不利だ。ましてや報道を押さえられては……」

報道を押さえられたってことは、こちらからまともに発信できない、ってことだ。

どんなにいい意見も真実も、伝わらなければ意味が無い。逆に伝えることが出来るなら、嘘だって信じる人が出る。

まさに八方ふさがりだった。

「ともかくこの件、父上に相談したほうがいいな。ここで言っても埒があかん」

言いながら、殿下が奥へ行こうとしたときだ。

「ちよつと、誰か開けなさいな」

乱暴なノックと同時に、高飛車な声が聞こえた。

——ノックされないうちから開いたら、怖い気がするのだけど。もつともドアの向こうはそんなのお構いなしだから、急いで開けに行く。入ってきたのはもちろん、イオニア先輩だ。

「まったく。こっちは一晩寒空の下にいたのに、あなたたちこんな

ところでゆつくり寝てたなんて」
開口一番怒られた。

「えーでも、先輩もけっこう、ぬくぬくしてましたよー？」
「……え？」

あらぬところから聞こえた声に、全員が石化する。
だって、この声……。

「あれ、どしたの？ みんな固まっちゃって、おもしろーい」
ひょこんとドアの影から、ミルが顔を出した。

「な、なんでてめっ、ここに居るんだっ！」

「んー？ なんかねー、こっちで継承ってちよっと聞いたからー」
理由になってない。

「えーと、イオニア先輩、この生き物何ですか？」

「失礼ね、よく分からないけど屋敷へ来たから、連れてきただけよ」
もっと理由になってない。

「だって、先輩とあたしの仲だしー」

含み笑いで言いながら、イオニア先輩に寄り添うミル。何かごく間違ったものを、見てしまった気がする。

何だかくらくらしてきたあたしたちに、先輩の声が飛んだ。

「いつまで固まってる気？ 早く状況を説明なさい！」
「は、はいっ！」

慌てて先輩に、ここまでの経過を説明する。

聞き終えた先輩が、腕組みをしながら考え込んだ。

「要するにその左派とやらが、国自体を狙ってるわけね。で、阻止

するにはどうするか、と」

「けど、ちよつと方法が見つからなくて……」

何を言ってもやっても、隠されてしまつてはどつにもならない。

Episode:54

「んー、だったらさ、もーっと派手にやるとかは？」

ミルが珍しくまともっぽいことを言って、みんなの視線が集まる。

「派手に、って何すんだい」

「さあー？ でもさ、思わず報道が飛びつくようなことしたら、魔視鏡で流れると思うー」

ミルの言うことは漠然としてよく分からないけど、先輩は思っているところがあったらしい。

「あのゴミ連中、浅ましいものね。たしかにエサをぶら下げれば、簡単に食いつくわ」

「そりや分かりますけど、連中、殿下と公爵家もシカトしてますよ？ これ以上のエサなんて、どこにあんですか」

イマド、ずいぶんヒドい言い方だ。殿下たちがエサになってる。ただ、言っていることはそうおかしくない。王族と歴史とを誇るアヴァンで、これ以上の話の種があるとは思えなかった。

「じゃあ、こついつのはどお？」

いつもと違うミルの声音に、はっとする。

彼女の何かぞっとするような、黒い微笑み。

「お祭り騒ぎ、起こせばいいんだもの。なら、これ使えば出来るかもよ？」

言いながら彼女が懷から出したのは、何かの宝玉だった。赤ちゃんの手くらいの大きさで、中でちらちらと炎が踊っている。

「なんだい、これ？」

「初めて見るわね……」

みんなが不思議そうに覗き込む中、殿下の顔色が変わった。

「まさか竜玉？！　なぜ、お前がそれをつ！」

ミルは、相変わらずの黒い笑顔だ。

「なんでつてほらあ、あたしのママ、アヴァンの人だしー」

それで何かとても貴重らしいものを、持つて理由にはならない
と思うけど……。

ただ殿下はどういうわけか、それで納得したらしい。

「そういうふうに、隠されていたのか。だが確かに、可能性は出てきたな」

「どういうことだい？　てか、そもそもこれって？」

殿下が腕組みをして、少し考え込んだ。

「まあお前たちは、儀式の話も知っていることだしな」

そんなことをつぶやいてから、顔を上げる。

「これはさっきも言ったが、竜玉だ。本来は今回の儀式に使う」

「え、そうなの？！」

ナティエスが興味深そうに言う。

「欲しいかも。綺麗だし」

「馬鹿を言うな。公爵家にとって、本来儀式より大切なものだぞ」
間髪入れずに断られて、ナティエスが首をすくめた。

「ごめんごめん。でもだったらこれ、なんでミルが持ってたの？」
意味ありげな視線をミルと交わしたあと、殿下が答えた。

「この竜玉、じつは三百年ほど前に盗まれてな」

「しょーもないね。ンな大事なものの盗まれるとか、警備兵なにやってたんだい」

つい言ったらしいシーモアに、殿下がなんとも言えない表情になる。

「警備は関係ない。なにしろ盗んだのは当時のお妃候補だった、我が公爵家のセルマ姫だ」

「おい……」

アヴァンの公爵家、かなり昔から秘密だらけらしい。

Episode : 55

「なんでンなに重要なモン、しかも姫が盗むんだよ」

「婚約者が試練に挑むと聞いて、居ても立ってもいられなくなっただらしいな。死ぬこともあるから、そうなっては遅いとコトに及んだそうだ」

「それにしたって、やりすぎだろ」

「同感だ。好きな人に死んでほしくなかったのは分かるけど、こんな大事なものを隠したりしたら、やっぱりダメだろう。」

「僕に言うな。まあその姫は美貌だが、少々考えが足りない方でおそらく深く考えずにやったのだと思うぞ」

「公爵家といえども、聡明な人ばかりではないらしい。」

「ともかく、そういうことだ。ただその姫も、モノが何かは知っていたからな。さすがに捨てたりはせず、信頼のおける侍女あたりに持たせたのだろう」

「やっとなんとなく理解する。」

「ミルのお母さんはアヴァンの人だと言っていたから、きっと先祖をたどると、それなりの血筋へ突き当たるんだろう。もしかすると、その侍女さんだったりするのかもしれない。」

「まあ公式には、押し入った賊が盗んだということになっているがな。そもそも盗まれたという話自体、一部の貴族しか知らん」

「それはそうだろう。そんな大事なものをお姫さまが盗んだなんて知れたら、それこそ国がひっくり返る騒ぎだ。」

「もしかして、儀式が今のインチキスタイルになったの、そのせい

？」

「一部はそうだな。ただその前から、どうにも試練がムリと思われ
る者に関しては、同じことをやっていたそうだな。だからなんとも言
えん」

平然と答える殿下に、誰も二の句が次げなかった。王族とか貴族
が裏と表で違いすぎるのは聞いたことがあるけど……ここまで凄
いなんて。

「ったく、それじゃ儀式なんて、ハナっから必要なかったってコト
じゃないか」

「いや、必要だぞ。こういう形式は大事だからな。ただ、命を賭け
るほどの物でもないだろう」

昨日まで命懸けで儀式をしてきた殿下が、そんなことを言うのは
少し面白い。

「それにしてもこれ、何に使うの？　もしかして、竜が呼べたりす
る？」

「そうだ」

あっさり言われて、みんながまた言葉を失った。
少しして、イマドが口を開く。

「そ、それってマジで、騒ぎ起こせんじゃね？」

「可能でしょうね。殿下が乗ってシテイのど真ん中へ降りでもすれ
ば、大騒ぎになるわ」

イオニア先輩も同意する。

——やれるかもしれない。

みんながそう思いだしたところへ、さらりと殿下が言った。

「さっきも言ったとおり、試練があるがな」

「え……」

言われてみればたしかに、殿下は試練と何度も口になっている。

「どんな試練なの？」

「詳細は分らん。この竜玉を持って谷の奥へ行き、契約者の中に自分を書き加える。その際に、資質を試されるとだけ伝わっている」
「なんだか漠然とした話で、どんな試練なのか見当も付かない。」

Episode : 56

「屋敷へ戻らんといかん。何か資料があるとしたら、あそこ以外にない」

「あ、持って来たよー」

ミルのかん高い声に、視線が集まった。

「持ってきた……って？」

「うんー」 学院から来ましたーってイオニア先輩に取り次いでもらって、殿下のお父さんにこれ見せてねー」

そう言って竜玉を誇らしげに掲げるミル。きつとお屋敷は、大騒動だったろう。

「んでね、継承だから要りそうな本出してーって。そしたら出してくれたのー」

殿下のお父さん、早く追い払いたかつたんだろうか？ ともかく気の毒だ。

「なんだかよく分からんが……ともかくその本とやらを出せ」

言われて珍しく素直に、ミルが持ってきたものを差し出した。公爵家の年代史や歴代当主の記録、それに日記なんかみたいだ。

殿下のお父さん、思いつく限りのものを持たせてくれたらしい。

「これ、全部読むのかい？」

「仕方あるまい。まさかこのまま竜玉だけ持って、のこのこ行くわけにもいかん」

この辺は殿下も、ちゃんと分かってるみたいだ。

「さすがに文体が古いな。これは読むのに時間がかかるか……」

「あたし、全部読んだー」

思いもしない言葉に、またみんなの視線が集中する。

「ミル、あんた読んだって……これ全部かい?!」

「うん。出してもらったときに、片っ端から読んじやったー。あとここへ来るまでも」

頭を抱えなくなる。たしかにミル、Aクラスから落ちたことはな
いっていうけど、なんか考えたくない世界だ。

「さすがね、私が見込んだだけのことはあるわ」

「でしょでしょ、先輩褒めて褒めてー」

はしゃぐミルと、その頭を撫でてるイオニア先輩。ほほえましい
光景のはずなのに、どこかが違う。

「暗唱もできるよー。しよか?」

どう考えてもミル、常識的な範囲から外れてる。なんで1回読ん
ただけで、暗唱まで出来るんだろう?

殿下が呆れた風に頭を振りながら、言った。

「暗唱は別にいいが……竜玉が盗まれる前の歴代の王で、竜騎士だ
ったのは3人だったな」

「ざんねん!。初代、三代、五代、九代の4人だよー」

まるで何かのクイズだ。というか、即答できるミルがすごい。

「意外と少ないわね。たった半分?」

さすが上級隊だけあって、イオニア先輩も公爵家の歴史を暗記し
てるみたいだ。あたしも今度から見習って、任務の前にはちゃんと
調べておこうと思う。

「まあ二代目で既に、竜を呼べない者が王位に就いているくらいだ

からな。半分も居れば上出来だと思うが」

殿下の言い方からすると、王位に儀式らしきものは必須だけど、竜騎士かどうかは関係ないらしい。

「この日記とか読めば、試練のこと分かるんじゃないか？」

「書いてなかったよ」

さらりとミルが言う。

Episode:57

「書いてないって、ンなわけねーだろ。日記だぞ？」

「書いてなかったよ。なんかねー、どの人も『試練の詳細は伝えるわけにはいかない』って。竜と約束したんだって」

「嘘言うんじゃない」

信じないあたしたちに、ミルが頬を膨らませて——小さい子みたいだ——本を開いて見せる。

「ウソじゃないもん！ここにちゃんと書いてあるんだから！」

「怒る気持ちは分からなくないが、みつともないぞ」

殿下がたしなめながら、ミルの指し示した辺りを読んだ。

「謀略王グスタヴスの物が。『ついに試練を乗り越え、私は竜を得た。が、何があったかここに書くわけにはいかない。旅の途中の記も、すべて破って捨てることにした。竜たちも同じように、子孫には伝えないと約束している。なぜならこれは、王としての資質に関わるからだ』」

だいたいミルの言うとおりだ。

「まったく、いくらなんでも徹底しすぎだろ。ンなの無視して伝えるよ」

イマドがぼやく。

「あたしに言われても」

「言ってねえよ」

イマドには悪いけど、軽快なやり取りに思わず笑いながら、ざっと考えた。

さっきも殿下が言ってた通り、アヴァンでは継承権を得るために、

儀式が必須らしい。

ただその内容は、けっこういい加減だ。本式に竜を呼べるようにするものから、今やつてる儀式の真似事まで、最初の頃からいろいろある。

そしてどれを選ぶのかは、周りと本人とで決めてるんだろう。ムリそうなら無茶をせずに、儀式の真似事で終わらせてしまってる。要するに必要なのは「形」だと、アヴァンの王家は思ってたに違いない。

「それにしても、謀略王ってのはすごいね。他の竜騎士の王様も、なんか二つ名あったりするのかい？」

シーモアに訊かれて、殿下が少し考えながら答えた。

「初代は建国王だな。三代目が軍師王。五代目がこの謀略王で、九代目は虚弱王だ」

「なんかそれって、あんまり勇ましくくない？ 竜騎士って言うからあたしもっと、強そうな名前が出てくるかと思ったのに」

ナティエスの言葉に、みんながうなずく。

「言われてみればそうだな……。二代目の武王ガッドも八代目の無敵王ハーキュリーズも、非常に武に秀でた王だが、竜騎士ではない。なんでだ？」

誰にともなく殿下が言っつて、考え込んだ。

「だいいち九代目の虚弱王、よく考えたら何故竜を得ている？ 病身で、剣技など全くダメだったはずだ」

「魔法が使えたとかは？」

シーモアが横から問いかけたけど、殿下は首を振った。

「ある程度は使えたと聞いている。だが心臓に問題があつたせい、少し大きい魔法にさえ耐えられなかつたとの話だ。竜を倒すなど、とても無理だろう」

あまりにも状況が矛盾しすぎていて、みんなで首をひねる。

Episode : 58

「どうにも分らないわね。その話から考えると、強くても倒せないものが弱くても倒せる、っていうことになるじゃない」

「ふつつ逆ですよ。てか心臓病とか、竜の前出ただけでショック死しかねえし」

イマドの言うとおりだ。

どうも人間は、竜への恐怖心が刷り込まれてるらしくて、咆哮を聞いただけでパニックになったりする。だから、相対したらなおさらだ。

そんなストレスに、心臓が弱い人が耐えられるとは思わなかった。

「まさか、これもインチキ儀式？」

「いや、それはないな。誤魔化して済むなら、全員竜が呼べるはずだ」

「あ、そっか」

武力も魔法もダメで、病気まで抱えている状態で、クリアできる試練。なのにもっとも有力そうな王は、クリアできていない。

「あ、じゃあもしかして、頭の良さとか？」

「……期待を打ち砕いて悪いが、初代の建国王は、字も読めず計算も出来ん方だな。その手の頭は皆無だ」

殿下が言うには、カンが飛びぬけて優れていて決断力もあったけど、けして頭のいい方ではなかったという。

「まあ確かに、スラムでもチームのリーダーが、秀才とは限らないしねえ」

シーモアが言ってるの、ロデスティオのスラムで会った、ダグさ

んかなと思った。確かにあの人の勉強は苦手そうだけど、リーダーとしてはけっこう立派だ。

だから建国王って言う人も、きっとそのタイプなんだろう。

「武力じゃないし、魔法でもなさそうだし。頭の良さも関係なさそうだし。ぜんぜん分かんないね」

「んー、だったらそれって、これかもよ？」

それまで黙ってたミルが、箱を差し出した。精緻な彫刻がされている、銀の小箱だ。

「なんだ、これは？」

「竜玉入ってた箱ー。中にね、なんか書いてあるよ」
驚いた殿下が、受け取って中を覗く。

「ここか……『人は竜ではない。人には人の戦い方がある』。思わせぶりの言葉だな」

殿下の言うとおり、いろんなふうに取れる言葉だ。でも箱の中にわざわざ書いてある以上、これがいちばんのヒントなんだろう。

「人は竜じゃないって、当たり前といえば当たり前だけど。けどたしかに言われてみれば、やり方は違うわね」

イオニア先輩、何か思い当たったらしい。

「どういう意味なんです？」

「意味というか、ただの推測よ。でもあなたたちも上級隊を目指すなら、このくらいは分らないとダメね」

先輩、相変わらずだ。

「せんぱーい、イジワルしないで教えてくださいってばあ」

ミルのやけに甘い声。やっぱり何か、いけないものを見せられて

る気がする。

Episode : 59

「まったく、そうやって甘えてばかりでしょうがないわね」

「えー、でもおー。先輩頭いいしー」

2人のやりとりを見てるうち、頭が痛くなってきたのは気のせいだろうか？

「やれやれ。じゃあ古代竜と人間の特徴、思いつく限り挙げてごらんさないな」

言われて、みんなが思い思いに並べていく。

「竜ったら、強くて大きくて、プレス吐けて飛べる。あと、強力な魔法が使える？」

「こっちの魔法も、あんま効かねえよな。あと爪も牙もヤベえし、尻尾もけっこう危ないぞ」

こうして考えてみると竜、中でも古代竜と呼ばれる上位種は、反則の強さだ。戦うために居る種族と言ってもいい。

「こんなのと戦うとか、冗談じゃねえな」

「愚痴って何かの役に立つわけ？ そんなくだらないマネしか出来ないのなら、さっさと学院へ戻りなさいな」

イオニア先輩、いつもどおり辛辣だ。

けどイマドは、気にする様子もなかった。この辺は凄いと思う。

「やらないなんて言ってませんで。けどマジで俺らだけじゃ、余裕で死ねますよ？」

「だからさつきから何度も、人間と竜の特徴を挙げなさいって言うてるじゃないの」

何度もってほどには、言っていないと思うのだけど……。

「人間の特徴……なんだろう？」

「あれかね、数がやたら多いとか、腹黒いとかかい？」

「そゆのなら、嘘つくとか、騙すとか、自分の都合しか考えないのかも？」

間違ってはいないけど、なんかいいところがない。

「ったく、お前ら少しは真つ当なこと言えよ。人間ったら、道具使うとかその辺だろ」

イマドが補足したけど、シーモアとナティエスが言うほうが、正しく聞こえるのが困りものだ。ただどれも、竜に太刀打ちできるものだとは思えなかった。

みんなの言うことを聞きながら、考える。

アヴァンの本当の継承を意味する、竜騎士。なのにそれは、強いからなれるわけでもない。むしろ虚弱王や謀略王と言った、一見ムリそうな人ばかりだ。

カギはやっぱり、「人間には人間の戦い方が」ってことなんだろうけど……。

瞬間、思い出す。謀略王の日記には確か、「王の資質」に関わることも、書いてなかっただろうか？

「人間の特徵が、王の資質に関わる……？」

どこか矛盾する、二つの言葉。

「あーもう。殿下、その試練ってのは、要するに何すんだい？ 本気でなんも伝わってないってこと、ないと思うんだけどね」

シーモアがそんなことを言う。どうも考えるのが面倒になったらしい。

「だからさっきから言っているが、試練の内容は伝わってないぞ」
何度も訊かれてる殿下は、少しイヤそうだ。

「けどあたしらがやった儀式なんかは、伝わってるじゃないか」

「当たり前だ。やり方そのものも伝わってなかったら、儀式にならないだろう」

ちよつと怒ったふうに言ったあと、殿下が続ける。

Episode:60

「15歳までに同年代の数名と、谷へ入って証を持ち帰る。儀式の要件は、本来これだけだ。あとは何もない」

「けど殿下、竜が欲しいときは違うつばいこと、言つてたじゃないですか」

何か気になったのか、イマドが珍しく食い下がった。

「だから言つたろう、現地へ竜玉を持って行つて、そのときに試されるんじゃないか知らん。契約の言葉を竜に聞かせて、自分を契約者に加えるだけだ」

「聞かせる……？」

殿下の言葉にはつとずる。もしかして相手の意思に関係なく、「聞かせて」しまえばいいってことだろうか？

もう一度、よく考えてみる。

自身ではあまり動きの取れない、虚弱な王。もう一方は、自身は動かず策略をめぐらす謀略王。軍師王も、恐らくその類だろう。

建国王がどうかは分からないけど、これは初代だから、まったく違う形で契約した可能性がある。だからパターンにはまらなくても、問題ないはずだ。

そして、「人には人の戦い方がある」の言葉。次々と思いつく、人のずるさや腹黒さ。

ただ繋がらないのは、「王としての資質」って言葉だ。そういうのってふつつ、その人の持つてる強さと、あとは統率力とか判断力とかじゃないだろうか。

野生動物は群れのリーダーは、強さなんかで決まることが多い。

この辺は人間とけっこう似てる。

竜にいたっては、強さのほかに統率力なんかが要るって聞いている。こうなると人間とほとんど一緒だから、「人間だけ」と「資質」が両立しないだろう。

そうするとやっぱり、人間のずるさなんかのほうが、答えに近い気がする。

考えてみればシュマーをまとめる母さんや姉さんも、にこにこしながらその中身は、相当の腹黒さだ。資料を揃えて罨を張って追い込むようなことを、しょっちゅう交渉でやってる。

それ以外にも例えば軍じゃ、そういうのは当たり前の話だ。清廉潔白は悪くないけど、素直なだけの人は、ぜったいにトップに立っていない。そんな人が隊長なんかになったら、下のほうは無駄死にさせられてしまう。

政治の世界はあたしはよく分らないけど、でも似たようなものだろう。駆け引きが多い世界だから、単なる「いい人」は、利益をむしられるだけになりそうだ。

——だとしたら。

出てきた答えを、ついつぶやく。

「竜を罨に……はめる？」

「——！」

あたしに、みんなの視線が集まった。

「なんかヒドすぎない、それ？」

「いやでも、アリだろ。どうせ俺ら竜にかなわねえんだから、そんなにいやらねえと」

あたしたちのやり取りを見ていたイオニア先輩が、なんとも言えない笑顔になった。

「まさか子猫ちゃんが、いちばん先に気づくなんてね。あなた、こ
ういうのダメそうに見えたんだけど」

褒めてるんだかけなしてるんだか、よく分からない言われ方をさ
れる。

Episode : 61

「じゃあ先輩、これで正解？」

「正解というか、答えの一つね。まあ戦術の初歩だから、本当はヒントがなくても分からなきゃダメだけど、あなたたち候補生でもないものね。今回は目をつぶってあげるわ」

やっぱり、けなされてるような気がする。

「いい機会だからこの手の作戦の立て方、ざっと教えてあげるわ」
含み笑いをしながら、イオニア先輩があたしたちを見回した。こういう謀略とか、好きなのもかもしれない。

「まずそうね、今の答えに沿って、あなたたちの作戦を披露してもらおうかしら？　そこから詰めていくほうが、分かりやすいはずだから」

「えっと……」

さすがに作戦を立てるとか誰も慣れてないから、みんなでちょっと考え込む。

「ああ、さすがにムリ？　しょうがないわね、じゃあ今回のクリア条件から言ってごらんなさい」

先輩の言葉に、まずナティエスが口を開いた。

「えっとそれって、殿下とあと何人かで竜玉持って谷へ行って、契約の追加をする？」

「ナティエス、同年代つてのが抜けてっぞ」
イマドが付け加える。

「あ、そっか。だとすると今回儀式に行ったメンバーみたいので、

行つて契約しなおしすればいい、つてことかな」

「単に谷ではなく、奥の方だな。確か竜岩というのがあるはずだ」
イオニア先輩がなんでこんなことをさせるのか、みんなの言葉を聞きながら腑に落ちた。

こうして話すうちに、次々と足りないものが出てきて、穴も埋ま
つていく。しかもどれも、忘れていたら大変なことばかりだ。

これは初歩だから大したことはないのだろうけど……上級隊なん
かはこうやって、もっと緻密な作戦を立てていくんだろう。

「じゃあ整理してみましようか？」

ひととおりの話が終わつたところで、先輩が言った。

「いいこと、よく聞くのよ。まずアヴァンの本来の継承は、竜を得
ること。そしてそのためには、竜玉が必要。ここまではいいわね？」

「はい」

イオニア先輩の言葉にみんなうなづく。

「よろしい、じゃあ次。その竜を得るためには谷の奥の竜岩まで言
つて、契約を更新する。手法は契約の言葉を竜に聞かせて、自分を
契約者に加える。殿下、これでいいわね？」

「ああ、その通りだ」

殿下の答えに、満足そうにうなづく先輩。

あの頭の中、いったいどんな思考回路が詰まってるんだろう？
ちよつと見てみたい気がする。

「で、その際に試練があるわけだけど、それについてはとりあえず
割愛。どんな試練か分からない以上、防御を固める以外手の取りよ
うがないわ」

理路整然とした説明は、ちょっと姉さんに似てる。何言ってるのかさえ分からない母さんとは、大違いだ。

「一方で試練のクリアの仕方だけは、ヒントがあるわね。だとすると今回は特殊なケースだから、それに従えば、自動的に試練からのダメージは防げると考えていいわ」

「なる……」

先輩の説明はまるで、綺麗に図を描いて無駄な線を省いていくみたいだ。

Episode: 62

「じゃあやっぱり、これ持って行けばいいんじゃない？」

「死にたいなら、行つてらっしゃい」

平然と放たれた先輩の言葉に、ナティエスが困ったような顔になる。

「でも先輩、いまそういうふうに……」

「続きまでちゃんと聞かないと、命がいくつあっても足りないわよ。まあ、死ぬのが趣味なら構わないけど」

先輩そんなこと言ってるけど、死ぬのが趣味の人は、居ないんじゃないだろうか？　だいいち人間、そう何度も死んだり出来ない。

「いいこと、作戦つてのはこれだけじゃダメなのよ。まず、その竜岩とやらはどこ？　行く手段は？　周辺のこの時期の気温や天気は？　何より、そこへ行つたとして本当に竜が居るの？」

矢継ぎ早の質問。

「えつと、えつと……」

とつさに答えられなくて、みんなうろたえるばかりだ。

「分かった？　作戦というのは最低でも、こういうことまで詰めるものよ。まあ自己責任だから、適当に言つて死ぬのは構わないけど。ただそのときは、必ず独りで死になさいね」

かなりヒドい言い方だけど、間違つてない。

無能な指揮官の作戦で、大惨事になることはよくある話だ。正直そのときは、指揮官だけ犠牲になってくれたほうが、みんな助かる。先輩があたしたちを見回して、うなずいた。

「分かったみたいね。じゃあひとつづつ行きましょうか。谷の地図

はある？」

言われて慌てて、地図を広げる。かなり細かく描かれた現代地図——でも谷の部分はけっこう大雑把——と、公爵家に伝えられてた誰かが描いた地図、計二枚がテーブルの上に広げられた。

「竜岩はどこかしら？」

「……こちらの地図だと、ここだな。だから今の地図で言うと、このあたりのはずだ」

殿下が地図を指差す。あたしとイマドが行った洞窟の、さらに先だ。

「なるほどね。で、そこまで行っただとして。さっきも言っただけ、肝心の竜は居るとは限らないわよね」

「記憶違いでなければ、竜はこの竜玉で呼べるはずだ。どこかに記述が、あつたはずなんだが……」

「はいはい、ミルちゃん読んだー」

後ろから甲高い声が上がる。

「えーとね、ここここ。ほら、召喚の呪文書いてある」

誰も頼まないうちに、ミルが出してくれた本のページには、確かに呪文が書いてあった。

それにしてもミル、ホントに全部、読んだこと覚えてるみたいだ。ものすごい記憶力としか言いようがない。

——これを普段にも、使って欲しいかも。

このごく一部でいいから日常的なことに使ったら、ずいぶんトラブルが減るんじゃないだろうか？

Episode : 63

「この呪文、使えるの？」

「言い伝えでは、使えるらしいが……ルーフエア、何か分かるか？」

話を振られて、あたしは本を覗き込んだ。

ざっと目を通してみる。

「どうだ？」

「えっと、少し待ってください。あとあの、竜玉を……」

殿下がうなずいて、竜玉を渡してくれた。それを手に、真音——魔法専門の特殊な言葉——の呪を唱えてみる。

竜玉が淡く光ったところで、あたしは呪文をやめた。

「問題ないと思います。今も反応しましたから、全部唱えれば発動します」

「なるほどね。じゃあこれで、問題が一つ片付いたわ。そうするとあとは、どうやって行くかと、竜にどう聞かせるかだね」

だんだん何をするかが、はっきりしてくる。

「どうやって行くかは、問題ないだろう。この洞窟までは、儀式の最中にルーフエアが行っているからな」

「あらそうなの？」

向けられた先輩の視線が、様子を説明しろと言っている。

「洞窟までは、川沿いに行けます。ただどうも、何か大きい生き物の縄張りらしくて……」

そう前置いてから、洞窟周辺であったことを言うと、イオニア先輩が肩をすくめた。

「最初から竜が用意されてるみたいね」

「——え？」

意味が分からなくて、考え込む。

「上空を飛ぶ、大きなもの。しかも嫌がらせに、小動物の死体を落としてくる知能。竜以外の何があるのよ」

「あ……」

こんな人里近くに居ると思ってなかったから、全く頭になかったけど、言われてみればそうだ。

「姿が見えなかったのは、恐らく姿隠しの魔法でしょうね。上位種なら、そのくらいは使うもの。あなたたちもそれに気づかないで、よく死なずに済んだわね」

「すみません……」

先輩の言うとおりだった。向こうにその気がないから助かったけど、そうじゃなかったら今頃大変な騒ぎだ。運が良かったとしか言いようがない。

「いまさら、しかも私に謝られても困るわ。謝るなら、そのときの自分にでも謝るのね」

「あ、はい」

「自分に謝る」。こんなこと初めて言われたけど、目から鱗が落ちる思いだった。

要するに自分の悪かったところを良く考えて、乗り切れたこと事態は評価しろ、ってことだろう。たしかにそうしないと、前へなんて進めない。

本当なら謝らなくて済むようにするのがいちばんだけど……それはさすがに難しそうだ。

「まあいいわ。どうやら目当ての上位種が居そうだから、召喚すれば来るでしょうね。あとはどうやって契約を聞かせるか、だわ」
言って、さしもの先輩も考え込む。

「間髪入れずに攻撃されたら、ひとたまりもないものね……事前に罠を張らないと」

「けど、向こうがウロウロしてんじゃ、魔方陣とか描いてらんねえよなあ」

イマドの言葉に、イオニア先輩がうなづく。

Episode : 64

「彼の言うとおり、あらかじめ罫を張るのはムリと見たほうがいいわね。思い違いで、竜が居ない可能性もあるけど、そんなものに賭けるわけにいかないわ」

当たり前の話だった。一縷の望みに賭けるくらいなら、最悪を想定して動いたほうがいい。そのほうがアテが外れたとしても、被害が少ないのだから。

「だとすると、魔法かね。あれならこっちで準備してけば、あとは即発動させられるわけだし」

「じゃあ、眠りとか、石化とか？」

シーモアの言葉に、ナティエスが代表的なものを挙げる。

「そこまで行かなくても、ほんのちょっと足止め出来りやいいんじゃないか？」

「そっか……何があるだろ」

考え込む二人に、イマドが言った。

「つかお前ら、それ効くのか？」

「あ……」

どっちも、しまったという表情になる。

竜、それも上位種は、魔法があまり効かないことで有名だ。元から強大な魔力を持つせいで、外から魔法をかけても弾かれてしまうらしい。

「眠りダメ、石化ダメ、その他の似たようなのもたぶんダメ……やりようないじゃない！」

ナティエスが、ほとんど悲鳴みたいな声をあげる。

「これで何とかしろとか、ムリ、ぜったいムリ！」

「ってもナティ、少なくとも4人はやってのけてるんだ。何か方法あるんじゃないか？」

負けず嫌いのシーモアは、逆にやる気がでたみたいだ。

その辺はイオニア先輩も似てるみたいで、僅かに笑いながら考え込む表情が、すごく怖い。

「そうね……直接がダメなら、間接はどうかしら？ 周りの地面や何かなら、問題なく魔法がかかるでしょ」

「えっとそれ、落とし穴とか？」

「ナティエス、竜って飛べるから……」

思わず言う。人間なら引つかかるだろうけど、竜にはムリだ。

「あーそっか、走竜じゃないから飛ぶんだっけ。足止めには良さそうかなと思ったんだけど」

彼女の言葉を聞きながら、何かが引つかかった。落とし穴じゃないくて、似たような方法が何かあった気がするのだけど……。

「——あ、重力」

やっと思ひ出す。

「重力？ それがどうしたんだい？」

「確か範囲内だけ、それを強くする魔法が、あったはず……」
どこかでそういう呪文を、見た記憶がある。

「使えるのかい？」

「えっと、ちよつと待つて。あたしも、うる覚えで……」
記憶をたどりながら、呪文を唱えてみる。

Episode : 65

「……シュヴェア「プロカード」！」

けど、何も起こらない。

「あれ、呪文違ったかな……」

1回見たただけだから、ホントにうる覚えだ。

「発動させられないんじゃないダメね。違う手を考えましょ」

「あ、先輩待つて待つて、その呪文ならね、たぶんこれー」

耳に突き刺さるような声で、ミルがまた本を差し出した。あまりよく知らない言葉だけど、表紙に「魔法」の文字がある。

「ここの、ほら、このページ！」

「うそ……」

開かれたページには確かに、その呪文が完全な形で書かれていた。

——ミルの頭の中、どうなってるんだろう？

一度読んだだけでページ数まで覚えてるなんて、常識はずれにもホドがある。

半分呆れながらそこを読んでみると、真音がひとつ間違っていた。似た発音だから、勘違いしてたらしい。

「万物に宿りし力よ、すべてここに集いて形無きくびきとなれ——」

範囲を絞って、みんなが巻き込まれないようにかけてみる。

「シュヴェア「プロカード」！」

「つと、危ねえ」

範囲内に入ってたテーブルが傾いて、慌ててイマドが避けた。

魔法が切れるのを待つてよく見てみると、脚が折れてる。割と細

い脚だったこと、思ったより魔法の威力があつたこと、それに上に本や何かが乗つてたのとで、重みに耐えかねたらしい。

「驚いたな、この木が折れるとは。けっこう硬い素材なんだが」

「すみません……」

慌てて謝る。あとで弁償しないといけないだろうけど、けっこう時代がありそうなテーブルだから、同じものが用意できないかもしれない。

「いや、気にするな。反対の脚を小さい頃、僕が折つて継いだる」
「……こんなん折るとか、殿下、アンタ何やつたんだい」

答えはなかったけど、上に乗って飛び跳ねるとか、傍で重いものを振り回すとか、何か相当のことをしたんだろう。

こっぴどく上流階級の人は、もっと品行方正かと思つてたけど、ちよつと違ふみたいだった。

「とりあえずこれで、使えんのは間違いないね。だとしたらルーフエ、アンタが召喚後にこれ掛けりや、全部終わるんじゃないのかい？」

「えつと、どうだろ……」

テーブルの脚は確かに折れたけど、相手は竜だ。動くし、何より力がある。

「威力は上げる必要があるでしょうね。外で試すとして、物じゃ喋らないし……誰か1人犠牲になつてくれる？」

「先輩！」

さすがに驚いてみんなが抗議の声を上げると、先輩が面白そうに笑つた。

「あら冗談よ。まあこれに乗って誰かやつてくれるなら、それに越

したことはないけど。そういう勇者は居ないの？」

居るわけがない。あたしだって願ひ下げだ。

「仕方ないわね」

残念そうに――期待してたんだろか――ため息をついて、先輩が続ける。

「体格のいい大人が3人乗ったら、さすがにこのテーブルでも壊れるでしょうね。だとすると、載ってた本の重さから考えて、ざっと10倍そこらかしら？」

大雑把だけど、そんなには間違っていないだろうと思う。ミルが持つてきて机の上に載せたたくさんの本、たぶんあたしくらいの重さはあるはずだ。

Episode:66

「じゃあ聞きなさい。上位種の竜の特徴は？」

「んー、飛べる、大きい、頭がいい、魔法が使える、あと魔法があんまり効かない？」

訊かれたナティエスが、次々と挙げる。ほぼ正解だ。

イオニア先輩も、満足そうにうなずいた。

「よく出来たわ。で、その中で今回問題になりそうなのが、“魔法が効き辛い”ってこと。これは分かるわね？」

「あ、はい」

みんなうなずく。

「で、仮にこの魔法で足止めしたとして。予想通りの効果が出なかったら、あなたたちどうするつもり？」

「あ……」

そこまで考えてなかったんだろう、ナティエスやシーモアが慌てた表情になる。

「やれやれ。まあ候補生でもないなら、こんなものかしら？ とりあえず何か思いつくなら、言ってごらんなさい」

少し考えて……あたしは思い切って言ってみた。

「あの、複数で唱えるのは……」

「方向としては、悪くはないわね。でもムリよ」

あっさり却下される。けど、悪くないのにダメな理由が分からない。

「ああ、子猫ちゃんには難しかったかしら？」

あたしの表情で分かったんだろう、先輩がそんなことを言う。

「子猫ちゃん、あなた、魔法得意でしょ？」

「え？ あ、はい」

なんであたしが子猫なのかは分からないけど、魔法が得意なのは確かだ。

「やつぱりね。まあその年じゃ仕方ないけど、覚えておいたほうがいいわ」

そう言うつと先輩、腰をかがめてあたしと視線を合わせた。

「この魔法、誰でも使えるものじゃないわよ？」

言葉と一緒に、ぱちんとおでこを弾かれる。

「えつと、あの、えつと……？」

「ああいいのよ、才能があるのは悪いことじゃないから。ただね、誰でもあなたみたいに、こんな大きい魔法が使えるわけじゃない。分かるわね？」

言われて気づく。

確かにこの魔法、たぶん扱いづらい部類だ。あたしでも同時に複数発動させられなさそうだから、相当魔力を食うんだろう。

だとすれば上級隊ならともかく、候補生くらいだと発動させられない。ましてやこのメンバーじゃ、使えるのはあたしとイオニア先輩くらいだ。

「あの、でも、あたしと先輩で……」

「理解が早くていいこと。でもムリね。私でもこの魔法、おそらくキツイわ。制御でミスるでしょうね」

ちよつと悲しそうな、先輩の表情。

「すみません……」

「いいって言ったでしょ。私の力が及ばないのは、私の責任。あなたが気にすることじゃないわ」

言いながら先輩が、あたしの頭を撫でる。

——意外と、優しいかも。

最初もつと怖い人かと思ってたけど、そうでもないみたいだ。

Episode : 67

「ともかくそういうわけだから、複数名で同じ魔法をかける方法はムリ。分かったわね」

ただ相変わらず、言い方は高飛車だ。

「……要するに、魔法さえ発動させられりゃいいんですよ？」
ずっと話を聞いていたイマドが、確認するように聞いてきた。

「それがムリだって、今言わなかったかしら？ 二度も同じことを、言わせないでちょうだい」

「いや、もしかしたら、出来るかもしれないんで」
先輩はもちろん、あたしも一瞬言葉を失う。

「魔法……使えるの？」

「わかんね。けど、試してみたらやれっかも」

イマドのいつも通りの、いい加減な答え。

「それじゃ分からないわね。ちゃんと説明も出来ないのかしら？」

「説明する前に、言わないでくださいってば」

言い返してから、彼が説明を始める。

「魔石、ありますよね？」

「あるわね。だから何？」

傍から聞いてると、まるでケンカしてるみたいだ。

「だからって言われても。空のそいつにこの魔法放り込んで、発動させたらダメですか？」

「え……？」

またみんなが言葉を失う。

イマドの言ってること自体は、ムリってわけじゃない。

ただ何かの呪文が込められた魔石を作るって、けっこう面倒だ。きちんとした魔方阵を作って手順を踏まないと、中にきちんとした呪文が入らない。

ましてやこんな、扱いの難しい魔法を込めるなんて、そう簡単に出来ることじゃないはずだ。

「出来る……の？」

「んー、たぶんな。ただどんだけの威力が出せつかは、わかんねー」
要するに、作れるものの効果は未知数、ってことらしい。

でも、試してみる価値はあると思った。これが使えるなら、かなり話が楽になるはずだ。

「イマド……だったかしら？ 必要なのは何？ 空の魔石は当然として、魔方阵を組むならそれ用のインク？」

先輩も同じことを考えたんだろう。詳細を訊きはじめる。
けどイマドの答えは、あまりにも意外だった。

「空っぽの魔石と、こいつ借りれば出来ますよ」

言って、こつちを指差す。

「あたし……？」

「こそ、おまえ」

嘘を言ってるようには見えない。でも、こんなのは初耳だった。
何でもそうだけど、魔力を付与するのは簡単じゃない。本来持たないものに持たせるわけだから、かなり無茶な状態を作るわけで、そのためには魔方阵なんかが必要なかった。

これは魔石も同じで、親和性が高いから魔力を込めるだけなら簡単だけど、呪文そのものとなると一仕事だ。
それを、こんな簡単にやるって……。

Episode : 68

「あー分かった！ イマドって、古代人バージョンなんだ」
よく通る甲高い声が、よく分からないことを言う。

「古代人って、それ何？」

「あれ、ナティエス知らない？ 昔って魔法とかすごい上手な人たちが居て、いろいろ出来たんだよ」

毎度の事ながらミルの説明、意味不明だ。

「なんかよくわかんないけど、そういう人が居たってこと？」

「そそ、ナティエス頭いいー」

あまりに適当なやり取りに、ため息をつきたくなる。

ミルが言ってることは、辿れば神話の時代まで遡る話だ。

神話では、人はもともと魔法は使えなかったという。けど神々の1人が禁を破って、自分に従う人間に教えてくれたんだそうだ。

本当かどうかは知らない。

ただ魔法が最初の頃、一部の人しか使えなかったのは確かだ。呪文が発明されるまでは、魔法は特殊な才能を持つ人だけのものだった。その人たちが、今では古代人と称されている。

——使えない人も、古代の人だと思っただけ。
けどそう呼ばないから仕方ない。

古代人は魔力そのものを直接扱えて、念話もできたって言うから、考えてみればイマドとそっくりだ。だからミルの言うのもそう間違いないじゃなくて、一種の先祖がえりなんだろう。

ただ当のイマドは、不思議そうな表情だ。あんまり実感がないらしい。

「何でもいいわ。可能か不可能か、問題はそれだけなんだから」

あっさりとイオニア先輩が、盛り上がりかけた話を切って捨てる。

「時間はどのくらいかかるの？ 何ヶ月もかかるようじゃ、話にならないわよ」

「んー、半日は要らないですよ」

この手の話が理解できて、イオニア先輩と思わず顔を見合わせた。こんなのを半日なんて、早すぎる。

あたしたちの思いを知ってか、イマドがさらに続けた。

「使い慣れてる呪文なら、その場で出来るんですけどね。けど初めての魔法じゃ、きつとやり直しするんで」

もう言葉が出てこない。

イマドが魔力を、ふつうと違うやり方で扱ってるのは気づいてたけど、ここまでだなんて……。

「……ルーフエア、お前まで何驚いてんだ？」

本人はやっぱり、自覚がないらしい。

「えっと……イマドあのね、魔力……視えてる？」

「当たり前だろ」

予想通りの答えが返ってきた。

「つか視えねえで、どうやって使うんだよ」

「ごめん、あたし……視えない。あと、ほとんどの人って、たぶんそう……」

今度はイマドのほうで、しばらく言葉を無くす。

Episode : 69

「——マジか、それ」

「うん」

最初からそういう状態で育ってしまうと、他人との違いに気づかないことがけっこうある。イマドもたぶん、そのパターンなんだろう。

ましてや学院は、魔法が当たり前のところだ。視えてて困ることはないから、余計に気づかなかったに違いない。

「なんか……ショック続きだな。これ視えないで魔法使うとか、お前らただ器用なんだよ」

「あたしに言わせりゃ、視えるほうがおかしいって。本気でアンタ、気づかなかったのかい？」

「気づくかよ、ンなもん。俺は最初っから視えてんだぞ」

ほんとだったらもっとシリアスな話になりそうなのに、やり取りはなんだか軽快だ。

「まあいいや。とにかく先輩、コイツ使って、魔石作ってみりゃいいんですよね？」

「そうなるわね。それで使えそうなら、考えてあげるわ」

言いながら先輩、挑発的な視線でイマドを見る。考えてあげると口では言ってるけど、出来ないとは言わせない、そんな表情だ。

その様子を見てた殿下が、なぜか不機嫌そうに言う。

「やるならすぐ、ここでやれ。それを持って、谷へ行くぞ」

「あら殿下、誰が行くといいました？」

イオニア先輩が予想外の言葉を返した。

「何を言う？　行くからこそ策を立てて、検証しているんだろうが」
「ですから、行くなんて言ってます」

してやつたり。先輩そんな表情だ。

「殿下、今回の要請内容は、儀式への付き添いでしたよね？」

「そうだが……」

黒い笑顔、そうとしか言いようの無い笑みを浮かべて、先輩が話し始める。

「谷へ行つて数日間過ぎすという儀式は、滞りなく終わってます。
むしろあんなアクシデントがあったんですから、危険手当を上乘せ
していただいてもいいくらいですわ」

先輩が言うアクシデントは、襲われたり火事に遭ったりしたこと
だろう。

「なのに追加料金もなしに、さらにシエラの傭兵隊を使つたら……
どうなるか分かりますよね？」

イオニア先輩はそれ以上言わなかったけど、要するに脅しだ。

シエラからの傭兵隊に契約外のことをさせたら、次から絶対に受
けてくれない。かといって正規の組合なんかだと、いろいろと細か
い縄張りがあったりするから、シエラみたいに融通が利かない。

だからシエラから締め出されたら、その手の仕事は法外な金額で、
裏の組織に頼むしかなかった。

それを分かつての言葉だ。

「なら何故、検討なんかしたんだ」

「興味があつたからです。何か問題でも？」

イオニア先輩、面白くて仕方ないらしい。見たこと無いほど楽し

そんな表情だ。

「——分かった、払えばいいんだな。幾らだ」

「学院に聞かないとはつきりはわかりませんが、5万レメ程でしようね」

さすがにみんな絶句する。5万レメって言ったら、ふつ々の家族が2年は暮らせる額だ。

Episode : 70

「さすがにそれは、僕の一存では出せんな……。父上と相談する時間をくれ」

「ええ、喜んで」

先輩、ほんとイジワルだ。足元見てるの間違いない。

ふだんだったらこういうのって、国内でそれなりの人を集めて、きちんと準備してやることだ。

けど報道と世論があんな状態だから、今はそれが出来ない。それどころか、殿下の生死を不明にして、時間を稼いでる有様だ。

こういう状況で即座に連れて行けて、対応も出来そうなのは、シエラから来てるあたしたちだけだった。

「言っておきますけど殿下、これでも割安でしてよ。この子たち正規の傭兵隊じゃありませんから、2人で1人分の計算です。安上がりでしょう？」

あたしたち、格安だったらしい。

その割にはなんだか、傭兵隊並みの事をやらされた気もするけど……。

ただ殿下のほうも、やられっぱなしじゃなかった。

「イオニアと言ったか？ 仮に支払いに許可が出たとして、こういう事態だ。それから更に待たせるなんてことは、ないだろうな」
負けじとイオニア先輩を脅す。

——これじゃ効かないだろうけど。

どう見てもこの先輩、そういう神経は抜け落ちてそうだ。それどころか言い返すところが出来たと、余計に喜ぶだけだと思う。

タシユア先輩といいこの先輩といい、上級隊つてもしかして、妙な人ばかりなんだろうか？

「殿下、払わないうちからそんなことを言っても、何にもなりませんけど？　むしろその分、上乘せして頂かないと」

思ったとおり、見事に切り返される。

殿下はよっぽど面白くなかったんだらう、「父上と話してくる」とだけ言つて、部屋を出て行つてしまった。

「まったく先輩、いじめすぎですよ」

「あら人間きが悪いわね。餌をぶら下げなきゃ、有利な交渉は出来ないのも知らないの？」

先輩、悪びれる様子は無い。

まあこの先輩が悪く思うなんて、天地がひっくり返つてもなさそうだけど……。

「で、俺らはやっぱ、作つときやいいんですか？」

「当たり前でしょう。作つておいて使えばよし、使わなくても学院に出せば報酬が出るわ」

先輩が言つてる報酬って言つのは、学院から支払われるものだ。

学院は生徒が何か有用な物を作ったりすると、出来に応じて買い取ってくれる。もちろん店に売るほど高くではないけど、それでもお小遣いになるから、けっこう何か作る生徒は多かった。

ただそれに夢中になって、中には成績を落とすすぎて退学になる人もいるっていうから、難しいところだ。

でも、イマドの答えは予想外だった。

「えっと、あの、俺それ……出したくないんで」

「え？」

さすがの先輩も、これには啞然とした表情になる。たぶんイオニア先輩にこんな顔させたの、イマドが初めてだろう。

Episode : 71

「なぜ？ こういうものなら学院、かなりの額で買い取るでしょうに」

「そう思いますけど、ヤなんですよ。こんなの出来るってヘタにバシたら、エライことになりそうなんです」

イマドはなぜか、嫌というより悲しそうだった。昔、何かあったのかもしれない。

「あの、あたしからもお願いします」

思わず頼む。イマドのこんな表情を、見たくなかった。

「あら、子猫ちゃんまで？ そうねえ、じゃあ代わりに……今晚あなたが、私と一緒に部屋で寝る。どお？」

にこにこしながら先輩が言う。

「えっと、それでいいんですか？」

「そうよ」

簡単すぎる交換条件に、ちょっと拍子抜けだ。

けどみんなは、なんか慌ててる。

「ルーフェ、ダメだってば！ 先輩と一緒になんて絶対ダメ！」

「ほんとだよ。こんな先輩と一緒に居たら、何されるかわからんよ」

ナティエスもシーモアも、なんだかひどい言い方だ。

「その2人、取り引きなんだから口出さないでちょうだい。ごちやごちや言うなら、相応の評価を学院に出させてもらっわよ？」

イオニア先輩、すごい脅し方だ。これを言われたら、学院生は黙るしかない。

「けど、先輩！」

「えっと、あの、あたし構わないから……」

ナティエス、ミル、シーモアの3人が、なんとも言えない顔になった。

「それにえっと、あたし……1人で居るの、好きじゃないし……」
みんなが顔を見合わせて、こんどは笑い出す。

「ルーフェ、1人ダメなんだー」

「でも、なんか分かる気もする」

口々に言われて、ちよつと複雑な気分だ。

「先輩先輩、あたしはー？」

ミルが意味深な視線で、先輩を見上げながら言う。

「そんなに何人も、入れないでしょ。あなたはまた今度」

「えー」

一見、他愛の無い感じのやり取り。なのに何か間違ったふうに見えるのは、なぜだろう？

「あーそうだ、先輩、こいつ預かってくれるなら、言っとくことが」

「何？ くだらないことなら作った魔石、学院に出すわよ」

イマドの言葉に返す先輩、相変わらずきつい。

「くだらないかどうか知りませんが、こいつ寝てるとき、絶対不意打ちしたらダメですからね。寝たまんま容赦なく反撃するんで」

「え……」

なぜか先輩が絶句する。こんなの初めてだ。

「ほ、ほんとなの、子猫ちゃん？」

「えっと、たぶん……何度か前線で、起きたら倒してたことあるの
で……」

正直あれは、寝覚めが悪いなんてもんじゃない。はっと目が覚め
ると、足元に死体があるのだから。

「そ、そうなの。まあでもきつと、一緒にいるだけなら大丈夫よね」

「あ、はい、それなら。起きてるときは平気です」

起きててそれじゃ、ただの殺人狂だ。

Episode : 72

「そ、そうよね。うん、それなら大丈夫。きっと大丈夫」
イオニア先輩、なんだかちよつと変だ。

「で、先輩。俺こいつと、魔石作りたいんですけど」
「え？ あ、そうね、そうだった。何か要るものあるの？」
「なんだか先輩、中身でも入れ替わったんだろっか？」

「だから、こいつと魔石ですってば」
「そっついえばそう言ってたわね。すぐ始められるの？」
一瞬で先輩、ペース戻ったらしい。もういつもどおりだ。

「ええ。空の魔石2つほどあるんで、とりあえずそれで試します。
あと、どっか狭い部屋借りられませんか？ 広いとちつと気が散
るんで」

「部屋は開いている部屋なら、どこでも使っていいそうよ。好きに
選びなさい」

「んじゃそうします。ルーフェイア、行くぞ」
イマドに連れられて、食堂を出る。

「どこ開いてっかな」
1つ1つ確かめて歩くうち、丁度良さそうな部屋が見つかった。
元々は、物置にでもするつもりだったんだろっ。壁は天井の方
まで、棚が作りつけられていた。

中へ入って、ドアを閉める。

——二人きり。

なぜだろう、急に動悸がしてくる。

「おい、始めっぞ?」

「え、あ、うん」

落ち着こうとゆっくり息をしながら、答えた。

「どう……するの?」

「威力最小にして、魔法唱えてくれ。それ何回かやりや、1つは出来っから」

「そ、それだけ?」

あまりの簡単さに驚く。魔力が視えるだけあって、あたしたちは根本的に、魔法の扱いが違ふみたいだ。

「それだけっつか、要するに肝心の魔法が、俺が唱えられねえってのが問題だかな」

イマドはイマドで、違うところが引つかかってるらしい。

「ただお前だと、割と相性いいからさ。お前が唱えたモン使って、型作れっと思う」

「そうなんだ……」

要するに、あたしたちなら魔方阵を描いてパターンを石に埋め込むところを、唱えた魔法を使ってやっってしまうだろう。ものすごい効率の良さだ。

「じゃあ、今……唱えればいい?」

「あ、ちつと待った」

けどイマドは、あたしの右手を取っただけだった。そして反対の手に、魔石を持つ。

「おし、いいぞ」

「ほんとに?」

何かさっきから、常識が覆されすぎだ。

Episode : 73

「魔石に触ってたほうが、呪文書き込み易いかな。んで、お前に触ってたほうが、魔法が捉えやすいし」

そういえば触っていたほうがやり易いっていうのは、聞いたことがある。今はあまり使われないけど、同じ要領で、魔法を増幅させる杖なんかも、手に持っていたほうがいい。

たぶん、それと同じことなんだろう。

「ほら、唱えていいぞ」

「あ、うん」

そう答えたものの、なんだかドキドキして、上手く唱えられない。

——どうしよう。

こんなこと初めてだ。魔法のコントロールなんて、ふだんは考える必要も無いことなのに。

「どした？」

「……ごめん」

自分でもよく分からないまま、謝る。

「具合でも悪いのか？」

「うつん、そういうわけじゃ……」

間近から覗き込まれて、もっと動悸が早くなった。もしかして本当に、具合でも悪いんだろうか？

金にも見える琥珀色の瞳に、あたしが映ってる。

なんだか見ていられなくなって、思わず視線をそらした。

「……あー、そういうことな」

苦笑交じりにイマドが言って、あたしの頭にぼんと手を置く。

「落ち着けて。出来るだろ」

「あ、うん」

自分でも呆れてしまっけど、イマドにそう言われると、出来そう
な気がする。

「——いくね」

「いつでもいいぞ」

彼の答えを聞きながら、ひとつだけ深呼吸して、呪を唱える。

「万物に宿りし力よ、すべてここに集いて形無きくびきとなれ——
シュヴェア「プロカーデ！」

「おい待て、威力デカすぎだ！」

発動するより早く聞こえた声に、はっとする。これじゃ最小じゃ
なくて、いつもどおりだ。

「早くっ、あの浮く魔法！」

言われて、理由も考えずに唱える。

「セレスティアル・レイメントっ！」

すんでのところで2つ目の魔法が発動して、重さを相殺した。

「この魔法、こういう関係だったんだ……」

「あれ、知らなかったのかよ？ 原理はともかくこの2つ、力の向
きがちょうど反対に働いてっぞ」

やっぱり見えるイマドは、あたしたちと魔法の捕らえ方が違う。

Episode : 74

「もっかい、いけるか？」

「うん、だいじょぶ」

魔力の余波が治まるのを待つて、もう一度、威力を限界まで絞つて唱えてみる。

「——シュヴェア＝ブロカーデ」

働いてはいるけど、目立つては分からない。その程度で魔法が発動する。

「……これで、いい？」

「いいけど、次から黙つてくれっか？ 慣れてねえ魔法だから、どうも見落とすわ」

「あ、ごめん……」

せっかく頑張つてるイマドのジャマをするなんて、あたし何をしてるんだろっ。

「えっと、じゃあ、もう一回」

「ああ。何度も悪いな」

ホントはひとつも悪くないのに、気を遣つてくれるイマド。それに甘えてる自分が、情けなくなってくる。

それでも失敗しないように、息を整えてまた唱えた。

——あたしに出来るのは、これだけだから。

上手くこの魔法で石が作れるようになれば、きっとイマドの役に立つだろう。

「シュヴェア＝ブロカーデ」

「おし、捕まえたぜ」

予想もしなかったイマドの声に、あたしまで嬉しくなった。思わず話しかけようとして……今度は必死に押さえる。また迷惑をかけたら、話にならない。

「んー、まあ出来たかな」

少し経って、イマドのそんな言葉。

「ちつと石に、魔力足してくれっか？ 型だけ書き込んだから、きつと魔力入ってねーと思う」

「あ、うん」

ふつうとはかけ離れた手順なのに、基本的なところは同じなのだなと、妙なところで感心する。

通常はこの手の魔石は、魔方陣を使って呪を上手く石に固定化させたうえで、あとから魔力を注ぐ。

理由は簡単で、このほうが事故が少ないことがひとつ。あとこの手順を分離することで、魔力を注ぎなおすとすぐ再使用できるのが大きい。

この手法が発明されてから、世界の文化水準は一気に上がった。何しろ火を起こすにも明かりを点けるにも、それ用の魔石を用意すればいい。それまでの苦勞に比べたら何もしないも同然で、当然あつという間に世界中に広まっていった。

今はほとんどの家庭で、この魔法が書き込まれた石と、魔力だけが込められた石をセットにして使うやり方で、道具なんかを動かしている。

「あんま、魔力入れなくていいからな。まず試さなきゃなんねーし」「うん。えっと……入れすぎそうなら、言って」

視えるイマドに頼んでから、慎重に魔力を注ぎ込む。

「あともうちつと……あ、そこで」

即座にやめると、彼の満足そうな笑顔があった。

「ありがとな、助かるわ」

「ううん」

役に立てて、ほんとに嬉しい。

Episode : 75

「さーて、これを試さなきゃだな」

「あ、うん、そうだね」

いくら出来たって言っても、使えなきゃ意味がない。

「ここじゃ危ねえな。外でも行くか」

「えっと、じゃあ、結界」

呪文が外へもれ出さないように、部屋の内側に結界を張る。

「これで……心配ないと、思う」

「なるほどな。ホントお前、魔法の使い方ケタ外れてんな。マジ慣れてるわ」

たぶん、褒めてくれてるんだろう。ただイマドに言われると他の人と違って、そんなに嫌じゃなかった。

「なんかねえかな……あ、これがいいか」

イマドが部屋の隅に転がっていた、何かの重しにでもしようとしたらしい石と、木箱とを持ってくる。

「これでいいだろ」

木箱の上に石という、ちょっと面白い順番で彼が積み上げた。たしかにこれなら、魔法がきちんと発動すれば、石の重みで箱が潰れて分かるだろう。

「発動させっぞ?」

石の上に魔石を置き、自分はあたしの傍まで離れてから、イマドが言う。

「だいじょうぶ」

答えると、彼がうなずいた。

そしてあの魔法の気配がして……唐突に箱が砕ける。

「お、けっこう威力あんな」

「すごいかも……」

確かに魔力は込めたけど、それにしたってあたしが使う魔法並だ。

——どれだけ、得意なんだろう？

たいていは魔石のほうで、術者が唱えるよりは威力が落ちる。本来その場で発動させるもののに、「書き込む」という手順を取るかららしい。

なのにイマドが作ったものは、ほとんどロスがない感じだ。

もちろん込めた魔力の量や使う魔法で変わるから、一概には言えないけど……それでも、ふつうの石とはかなり違う。

古代人は魔法が得意だったと言い伝えられてるけど、本当なんだろう。先祖がえりらしいイマドを見ていて、そう思う。

「これなら、幾つか作りゃいけっかな」

「大丈夫……だと、思う。でも先輩に、見てもらわないと……」

たぶん心配ないだろうけど、確認してもらわなきゃだ。実戦で使う以上、指揮を執ってる人に見てもらうのが、一番間違いない。

「ま、先輩もこれなら、文句言わねえだろ。魔力込めなおしたら、行こうぜ」

「うん」

出来上がった魔石を手に2人で部屋を出て……なんとなく、イマドの手を握る。

一瞬驚いたみたいだけど、イマドは振り払ったりしなかった。

「どした？」

「ううん、なんでも……あ、でも、石化ごめん……」
思い出して、謝る。ずっとそれが、引っかかっていた。

「だから言ったる、いいて」

「——うん、ありがと」

あとはどっちも黙ったまま、でもなんとなく暖かい気持ちで、先輩たちが待つ部屋まで戻った。

Episode : 76

Lowell side

「歴史の長い公爵家でも、五本の指に入りそうな状況」。それが現状に対してローウェルが下している、判断だった。

この家が王位を継いでからはまだ200年にも満たないが、歴史は古い。

なにしろアヴァン建国王の、次男がその祖だ。生まれ順で継承しなかっただけの話で、本家と長さの点では同格だ。

その後200年ほど前から始まった周辺地域の相次ぐ独立の際、もつと西方の首都に居を構えていた本家は、ロステイオに滅ぼされてしまった。そのため現アヴァンを中心に国の東方を治めていた公爵家が、王位を継いだ。

つまり、実質建国からいままで、国と共にあったと言っていい。

その長い歴史の中でも、こういう自体は、おそらく初めてだろう。

「まったく、あの連中ときたら……」

つい口に出る。とはいえ誰もいない部屋だから、聞かれる心配はなかった。

あの連中というのはもちろん、報道のことだ。

公爵家は概してあの手の報道関係者を、蛇蝎のごとく嫌っている。

「知りたがる者の代弁者」などと称して、己が書きたてられたら激怒する内容を、時に嘘まで交えて広めるのだ。

叔母の結末もまさにそれで、「嘘ではないが本当でもない」というような偏った物言いをしなければ、この国の行く末までも違った

だろう。

どんな理由をつけようともやっていることは、井戸端会議好きの女が隣近所の根も葉もない噂を、作り出しては喋っているに等しい。

知るといふのは、確かに大切なことだ。

ただそれは、理解できるだけの知識があつて初めて、言えることでもある。

10歳かそこらの子に、高度な魔方陣を教えても、身にはつかない。それどころかその難しさから、半分放り出してのいい加減なものになり、取り返しのつかない事故へと繋がりがねない。

会社の経営も、似たようなものだ。まったく経験のない新入生に、経営を任せるわけにはいかない。

外交もまた、同じようなものだった。国同士の利害が極めて複雑に絡み合ううえ、人脈や今までの経緯も影響する。

これに加えて各国の国民感情までも、考慮に入れなければならないのだ。

すべてを完全に丸く……とまではいかないまでも、可能な限りの妥協点を見つけ出すのは、並大抵のことではない。

国内も似たようなもので、あちらを立てればこちらが立たず、双方の利害がぶつからないようにまとめるのは、至難の業だった。

それを国民が、どこまで分かっているのだろうか？

「……知らぬのだろうか」

自分のように生まれた時からそういう中にいるならともかく、ふつうは政治など遙か彼方の話だ。よほど興味がない限り、国際情勢や細かい関係を知ることなど、まずないだろう。

結果、漏れ聞こえる面白おかしい話だけを喜ぶ、おかしい状態に

なるのに違いない。

Episode : 77

「やれやれ……」

思わずため息をつく。今回の件そのものは打開できるかもしれないが、その後のことを考えると、いろいろ頭が痛かった。と、ドアがノックされる。

「ミルちゃんだよー、入っていいかなー？」

「構わん、入れ」

もう一度ため息をつきながら、ローウェルは破天荒な少女を出迎えた。

アヴァンに浅からぬ縁のある彼女は、竜玉を持ち込んできたこともあり、無視の出来ない人物になりつつある。

「殿下、ホントーに出来ると思う？」

「分かん。だがお前はやらせる気で、アレを持ってきたのだろう？」

タイミングといい、そのつもりがなかったとは言わせない。だがこの少女は、薄く笑った。

「違うかもよ？　もしかしたら……公爵家を滅ぼすためかも」

彼女と視線が合う。

薄水色の瞳が、いたずらっぽい色を浮かべていた。

「いまさらの嘘を言うな。本当にそのつもりなら、竜玉を秘匿したままでいたほうが、確実だろう」

「あ、バレちゃった」

悪びれもせず、けらけらと笑い出す。本当に掴み所のない娘だ。

「けど殿下、ホントにやって、出来る？ 出来なかったら、今度こそ終わりだよ」

「現状、終わったも同然だな。事態を収めるためには、僕が継承権を放棄するくらいしか思いつかん。だったらチャンスがあるだけ、運がいいと思うが？」

少女の笑みが満ちげな、だがどこか腹黒いものに変わった。

「そこまでいちおう、考えてるんだ」

「当たり前だ。馬鹿にしているのか？」

「えー、だってー。殿下けっこう、モノ知らないんだもん」

公爵家に面と向かってここまで言う人間が、果たしてほかに居るだろうか？

が、思った瞬間、ローウェルは苦笑した。今現在、そういう人間がここには何人も居る。

シエラから来た一行は、本当にみんな言いたい放題だ。あの一年かさのイオニアというのは本当にひどいし、去年から来ているシ―モアとナティエスという2人も好きに振舞っている。アヴァンに縁があるというあの男子でさえ、公爵家に対して臆したところがない。

権威や権力などとは縁遠く、自力で生きてきた彼らにとっては、どれも大したことではないのだろう。

事実、公爵家から離れてどれだけやれるか分からない自分と違って、彼らはどこへ放り出されても生きていけるはずだ。

——それがいちばん、強いのかもしれないな。

一人で生きていけるのなら、しがらみも建前もなく、好きな生き方ができる。

ただ自分も含め、そういう人間は少数派だ。だから小から大まで集団があり、果ては国家というものが出来る。

「でさ、殿下、失敗したらどうするの？」

「失敗してから考えることにする。今はともかく、このチャンスを生かすしかないからな」

答えを聞いた少女が、小さな声を立てて笑った。

「殿下、変わったねー」

「まあ、その点に関しては言い訳が出来んな。去年の騒ぎから、ずいぶんいろいろ考えさせられた」

言って、ローウェルも笑う。

「明日もまた詳細を詰めて、準備して、だな。お前も早く寝ろ」

「はい」

結局何が言いたかったのか分からないまま、少女は部屋を出て行った。

Episode: 78

N a t t i e s s

「山つて、けっこう寒くない？」

「そりゃ、朝早いからだよ」

あの騒ぎから何日経って、あたしたちはまた、例の谷へ来た。

辺りはまだ、山火事の跡が生々しく残ってる。

「いまさらだけど、よくあたしたち、生き残れたよね」

「ルーフェイアに足向けて寝れねえな」

そんなことを言いながら、歩いてみたり。

今回は荷物は、多いって言えば多いけど少ないって言えば少ないの。

何しろ前は荷車で運んだから、それを思えばずいぶん軽装。ただ代わりにみんなの背中には、重そうなりユックがあつて。

中身は、数日分の携行食料と着替え、それに寝袋。あと身体の大きいイマドが、テント背負ってる。

見てていちばん平気そうなのは、やっぱりルーフェ。次はたぶん、力のあるイマド。でもあたしたちだって、別にバテてるわけじゃない。

ただ殿下は、どうしても足手まとい風味だったり。っても主役だから、置いてこれないのが辛いところ。

あともうひとつの問題が、ミルがついてきちゃったこと。

——絶対、大騒ぎになると思うんだけどなあ。

そうは言っても、殿下が来るように言っちゃったから、あたした

ちにもどうしようもなくて。

けどミル、イオニア先輩とは仲良しのせいか、今のところは大人しいのが救いかな？

殿下とかの話じゃ、行き先はこの奥。ルーフェたちが行った洞窟の、さらに向こうなんだって言う。

でもホントに、竜なんて居るのになっても思ったり。

もちろん、竜自体が居るのはあたしも知ってる。ただその竜が、こんなに都合よく居るとは、とても思えなくて。

けど先輩が言うには、ルーフェたちが遭遇したの、その竜っぽいし……。

正直、ちよつとどころかかなり不安。

ルーフェも先輩も居るから大丈夫だとは思いつ、作戦もかなり練ったから、すぐ死んだりはないと思う。

けど相手はなにしろ、竜なわけで。何かひとつでも間違えたら、大怪我くらいはしちやいそう。

内心、辞退したほうがよかったかな？なんて気も。

ただ、シーモアはやる気満々。もともと負けん気拔群だから、こういうの見逃せないんだと思う。

イオニア先輩のほうも、実はやる気だったみたい。お金のことも折り合いついて、そのあとは俄然張り切ってたもの。

ルーフェは、いつもどおり。命令されたから淡々と遂行って感じで、こういうところで前線育ちが出るかな、って思う。

イマドは、言うまでもナシ。ルーフェが行く以上、あいつが行かないとかなないもの。

ミルは……正直何考えてるんだか、さっぱりわかんない。ニコニコしながらついてきちゃって、危機感とかゼロだし。

Episode : 79

「この先……ちょっと、滑るから」

「ほんと？」

1 回行ったことのあるルーフェたちを先頭に、川沿いを歩いてく。

あたしたちが立てた作戦は、割と単純で、でも確実かな？ っていうもの。

殿下抜いて、あたしたちって6人。だから六芒星作って、まず魔法を発動。

同時に殿下が竜を、六芒星の中へ召喚。間髪入れずに、契約の言葉とやらを聞かせちゃおう、ってやり方。

もちろんこれだって、完璧とは言えないわけだけど。でも呼んでから唱えたり戦ったりするよりは、きつとずっとマシなはず。

「けっこうこの川、長く続くんだね。洞窟まで、あと少し？」

「まだちよつと……あるかも」

そんなことを言いながら、川べりを歩いてく。

川の中は相変わらず、お魚が泳いでた。帰りに捕まえてみても、いいかもしれない。

「魔石、ちゃんとあるんだよね？」

「あるわよ。あなたたちじゃあるまいし、忘れるわけがないでしょ」
イオニア先輩が、少し怒ったみたいにいる。

「ですよー、センパイ。センパイみたいな頭いい人が、忘れるわけないしー」

ミルが擦り寄って、ご丁寧に足まで滑らせた。

「ごちんと盛大な音がする。」

「いったーいっ！」

「何やってんだい……」

「ほーんとミル、相変わらずかも。」

これでどうしてついてくる気になったのが、やっぱり謎。
ルーフェ辺りが請け負ってるからだいじょぶだろうけど、それだ
って、危険がないわけじゃない。

まあもしかすると、怖いもの見たさかもしれないけど……。
ただそうだとすると、引っ掻き回されちゃうから、今度はこっち
が危なくなるし。

何より謎なのが、なんでミルがこんなにアヴァンに、絡むのかっ
て事。

ミルのお父さんはケンディクの人だから、これは関係なさげ。だ
から関係あるとすれば、きつとお母さん？

他にも、去年来たときもアヴァン語とかよく知ってたし、町もよ
く分かってたし。アヴァンの内情もすごくよく知ってて、拳句に竜
玉なんて大事なもの持ってて。

どう考えたってこれ、普通のレベルじゃないはず。

この辺から思うに、きつと何か裏があると思うんだけどなあ……。

けどミル、話してくれないの。不思議に思ったから何回か聞いて
みたんだけど、そのたんびに上手くはぐらかされちゃって。

ただ、殿下がミルにどういうわけか、一目置いてるのは分かった
の。

何でだかさっぱりなんだけど、ミルのこと殿下、あたしたち庶民
と同じには思っていないみたい。竜玉持ってきたからなのかな？

Episode : 80

「あなたたちの言ってた洞窟って、この辺かしら？」

「そうですね。ここからほんのちょっと東行くと、ありますよ」

先輩の言葉に、イマドが答えて。

「行ってみます？」

「冗談じゃないわ。例の死体が腐ってたら、身体に臭いが付くじゃない」

なんかちよつと違う理由で、先輩が却下する。

「あとのくらい、かかります？」

地図見てる先輩に、訊いてみたり。

「あら、言っただはずよ？ 聞いてないなら減点だね」

「え、先輩そんな！」

あたしがびつくりして言ったら、先輩嬉しそうに笑うの。ほんとにイジワル。

「まあいいわ、今回だけは大目に見てあげる」

言って、不思議な色の髪をかきあげて。

「このペースだと、やっぱり着くのは夕方でしょうね。もう少し早く着ければと思ったけど、殿下が慣れてないのだから、こればかりは仕方ないわ」

ちらつと殿下見てみたら、やっぱりちよつとおかんむり？ でも何も言わないとこみると、そんなには気にしてないのかも。

「んじゃ、やっぱり直前で一泊して、明日の朝からか」

シーモアが独り言みたいに言う。

「夜間に挑みたいなら、別に止めないわよ？ 手伝いもしないけど」
「言っていないじゃないですか」
「なんかもう、ずーっとこんな感じで、ペース狂いっぱなしかも。
というか先輩こんなでよく、上級隊の仕事勤まるなあ……」。

「それにしてもお前たち、物好きだな」
殿下が急に、ポツリと言って。

「あら、物好きだなんて心外でしょ。私たち、殿下の依頼で来てるんですから」
「それは分かっている。だが、最初から受けないという選択肢もあったらどう？」

確かに殿下の言うとおり。もしイオニア先輩が、竜を倒す方法なんて検討しださなかったら、この話は出なかったはずだもの。
けど先輩、なんとも言えない表情で笑って。

「歴史って、なかなか見られるものじゃありませんから。ましてや、
アヴァンの公爵家なんて」
「なるほどな」
「なんかため息つきたくなったり。」

要するに先輩、好奇心ってこと。
そりゃまあ、こういうのってあたしもちょっと、興味はあるけど。
でも、命賭けてまで見に行こうってのは、あんまり思わない。

——この中じゃ、あたしだけっぽいけど。

シーモアも冒険好きだし、ルーフェは歴史好きならえに危険ナシ。

ミルはもう張本人だし、イオニア先輩は仕掛けてるし。

イマドはめんどくさがりだから、本音はどうでもいいんだろって
ど……ルーフエが動く以上は、ついてかないわけないし。

でももし、失敗しちゃったらどうしよう……。

あたし小心者だから、そんなこと考えちゃう。

Episode : 81

それと問題なのが、やっぱり殿下とイマド。

まあイマドとルーフエはあの関係だから、要するに殿下の横恋慕なんだけど、アプローチがけっこう凄いの。

で、ルーフエは「雇い主」って思ってるから、反論しなくて殆ど言いなり。イマドのほうも同じで、口出し出来ないし。

魔視鏡なんかでよくやってる、ドロドロの三角関係とはまた違うけど、妙な緊張感ありすぎかも。

というか、これが原因で作戦失敗しちゃったらヤバすぎ。

「ルーフエア、お前は平気なのか？」

今も殿下、意味も無く話しかけてて。

「え？ あ、えっと、何がでしょう……？」

無視できないルーフエは、困った顔。

けどもう分かっているイオニア先輩が、上手く割って入った。

「殿下、無駄口叩く余裕があるなら、ペース上げますけど？」

「いや、それは……」

さすがの殿下も、口ごもって。

そこへ先輩、追い討ち。

「あと子猫ちゃんに手出すのも、適当にしていただかないと。この子何しろ、一番の戦力なんですから」

言外に、「ヘンなことで悩ませるな」って含みが満々。

まあ確かに大人しくて、基本後ろ向きなルーフエだから、悩ませたら抜けられなさそう。

ただこの子、バトルつてなると人が変わるから、大丈夫かなあっても思えたり。

「てか先輩、そろそろメシにしません？ 俺腹減って」

イマドのほうは殿下そのものは、気にしてるんだかしてないんだか。けどルーフェのこと見ては、ちよつと深刻な顔するから、なんかそっちではあるっばいかな。

「今朝、私の3倍は食べたでしょうに。効率が悪いにもホドがあるわよ」

「ンなこと言われても……」

人一倍食べるイマドが、困り顔なのが面白かったり。

つてももうお昼だし、朝は早かったし、ずっと歩いてたしで、仕方ないって言えばそうなんだけど。

「僕も休んで食べたいところだな。正直疲れたぞ」

殿下も、きつとホンネ。

ただ、そんなに言うほど歩き通しじゃないの。けっこう小まめに休憩入れて、そのたびに先輩、殿下の足をちゃんとチェックしてる。

それでもこんな感じなのは、やっぱり「殿下」だからなんだろうなあ。

あたしたちと違ってどこへ行くにも送り迎えだし、訓練なんて、それこそ見たこともないんだろうし。

イオニア先輩も殿下を一瞥したけど、それだけで。さすがに殿下には限界なの、分かってるんだと思う。

「仕方ないわね、昼食にしましょ。そこのボウヤ、早く用意なさい」
「え……」

さすが先輩。いつの間にか食事係が誰か、見抜いちゃってる。

Episode : 82

「先輩……やりません?」

「待つのならするわよ」

平然と切り返されて、イマドがうなだれる。

「えっと、イマド、あたし……手伝うから」

「いいっ! お前は頼むから座つてろっ!」

ルーフェは親切心だったんだろうけど、全力でイマドが拒否して。

——まあ、分かるけど。

なんて言ってもルーフェ、すごい料理音痴。時間がかかるだけならまだマシで、ぜったい足を引っ張るだけ。正直切るだけだっていつまで経っても終わらないんだもの。

同じ刃物でも、太刀ならあんなに上手く扱うのにね。

「イマド、何にするんだい?」

「別邸でサンド持たせてくれたろ。あとサラダ作って果物剥きや、カッコつくって」

意外だけど料理はそれなりのシーモア、手伝うみたい。

「早くしてちょうだい。待たされるのは嫌いなものよ」

もしかして先輩、殿下より威張ってるかも?

「ここで食べるのか?」

「でしたらお一人で、好きな場所でどうぞ」

慣れてない殿下のこと、先輩ぜったいからかってる。

「そういうわけじゃないが……座る場所がないぞ」

殿下がなに言ってるのか、やっとみんな納得。生まれが生まれだから、あたしたちみたいに「その辺でテキトーに」って発想がなかったみたい。

「どこでもいいのさ、殿下。その辺の地面なりにちよつと座りや」

「そ、そうか……」

言って殿下が、腰を下ろそうとしたとき。

「殿下、ダメですっ！」

ルーフェが鋭く叫んで、魔法を唱えて。

「フー・ルヴァレ！」

驚いて飛びのいた殿下の目の前で、小さな炎が上がる。

「なにを——うわっ！」

炎をまとわりつかせた、蛇が飛び出してきたの。

すかさずルーフェが、抜いた太刀で一刀両断にする。

「殿下、こちらへ。あたしの傍なら安全ですから」

「分かった」

ルーフェは責任感から言っただろうけど、殿下はすっごく嬉しそう。ちよつと近すぎて距離で、ルーフェの隣に座って。

黙ってご飯用意してるイマドの顔、みるみるうちに険悪になるし。

「こ、この辺になんか敷いて、並べるかい？」

シーモアが話そらしたけど、ちよつと遅かったかも？ イマドの手の動きが、なんか大雑把で速いし。

そのまま彼、近寄りがたい雰囲気で一気にサラダ作って……無言でお皿置いて。

「じゃ、食べましょ」
平然としてるのは、先輩だけだったり。

Episode : 83

「えっと、あの、ごめん……」

条件反射でルーフエ謝ってるけど、何がどうなってまずいのか、ホントの意味は分かってないだろうなあ。

ただイマドのほうは、それだけでも落ち着いちゃったみたいで。

「いや、謝んなくていいって。つかお前、悪くねーし」

「そ、そお？」

泣かせないように必死のイマドと、優しくしてもらって嬉しそうなルーフエと。なかなか微笑ましかったり。

「ほら、いいから食べよ。また食いつぶれっぞ」

「あ、うん」

当然今度は、横の殿下がおかんむり。

っていうか、殿下も諦めればいいのに……。

「子猫ちゃん、こっちへいらっしやい。一緒に食べましょ」

殿下のほうをじろりと睨みながら、結局イオニア先輩が引き離れた。

でもルーフエがそこ立つちゃうと、今度は殿下とイマドの組み合わせになるわけ。これはこれで、最悪のペアかも。

もうね、どっちも「楽しい食事」とか、地の果てに忘れ物な感じ。ただただ無言で食べてるの。

当然、見てるこっちも楽しくないわけで……。

「んー、やっぱおーいしい〜！」

間違い。若干1名、楽しそうなのが居たっけ。

「みんな食べないの？ ミルちゃん食べちゃうよ？」

「こら、てめえ、食うんじゃねえ！ つかなんでそう、ルーフェイアのばっか手だすんだっ！」

そうなのよね。ミルって大人しいルーフェの、よく横からさらってくの。やられてるルーフェのほうも、大人しい上にお人好しだから、どうぞどうぞって感じで何にも言わないし。

「だってルーフェ、食べないんだもん」

「それでも食うなっ！ こいつ、時間かかるだけだつての！」
イマドもイマド。よく面倒みるなあ。

そのとき突然、ルーフェが太刀を取って立ち上がって天を仰いで同時に反応したのがイマド。いつも思うけど、あのルーフェの速さに、よく付いてけると思う。

「子猫ちゃん、これ、報告にあつた気配と同じ？」

先輩も分かっているみたいで、そんなこと言つて。

ただ悔しいけど、あたしは分かんなかった。言われてみればそんな気はするけど……気がするだけ。確信持てないもの。

「似てます。たぶん、同じかと」

「同じだな。けど、魔力妨害かけてやがる。はつきり見えねえ」

あれ？と思う。この言い方だと、イマドのほうがかして正確？

ただちょっと、納得もできたり。イマドがここまでいろいろ見えるなら、ルーフェと互角にやれるのも、分かる気がするもの。

だとしたらなおさら、殿下には入る隙ないんじゃないかなあ……。

Episode : 84

そのまましばらくルーフェたち、厳しい顔で空を見てたけど、そのうち警戒解いた。

こんどはあたしにも、ちょっとだけ空の空気が緩んだの、分かったかも。

「行つたわね。様子見かしら？」

「たぶん、そうかと……」

あたしもそうかな、って思う。だってもし向こうが本気なら、これじゃ済まないもの。

そして……気づいた。

「もしかして、見張られてる?！」

自分で言いながら、背筋が冷たくなったの。

「これじゃ不意打ち、出来ないじゃない！」

「そうでもねえだろ。こっちの手の内、晒してるわけじゃねーし」
イマドに指摘されて、少しあたし落ち着いたかも。

「そっか……。でも来てるのは、バレちゃってるってことだよね」
何でだかわかんないけど、あたし竜が気づいてないって思い込んでたから、ちよつとシヨック。

けど先輩やルーフェ、そうじゃなかったみたい。

「あなた、子猫ちゃんの報告聞いたでしょう？ 今のは二度目。だとするなら、前回の時から儀式でうろろしてるのなんて、向こうには筒抜け。今頃驚くなんて、少し頭が足りないんじゃないの？」
「そりゃあたし、足りないですけど……」

なんかすつごい、ぐさつと来たかも。だってあたし、ルーフェやイマドやシーモアみたいに、頭良くないんだもの。

頑張つてないわけじゃないんだけど、もう頭の構造違うんじゃない？つてくらい、みんな出来るし。

「……あら、本気にしちゃった？ ああそんな顔しないでちょうだい、妹が泣くのは耐えられないわ」

言つて先輩手を伸ばして、あたしのおでこをちゃんと突付いて。

「いいこと？ 人なんてね、差があつて当たり前なの。問題は、差があるのを承知で何をどうするか、じゃなくて？」

ちよつと意味がわかんなくて、首かしげてたら、先輩が少し笑つたの。

「むつかしかったかしら？」

あごに手を当てた先輩が、あたしを見下ろして。ちよつと女王様っぽいけど、でも嫌な感じじゃないかも。

「要するにね、あなたはあなたで、子猫ちゃんじゃない。これは分かるわね」

「あ、はい」

それなら分かる。だってあたし、ルーフェじゃないもの。

「だったら、違って当たり前。双子だって別人なのに、他人じゃなおさら違って当然だわ」

「ですけど……」

違うのは分かるけど、あたし、違うから悩んでるわけで。やっぱりあのくらい、いい成績取つてみたいもの。

「だから、いいのよ、ダメならダメで。そりゃ最初から放棄する子は、私だってイヤよ？でも死ぬほどやってなおダメなら、仕方ないでしょ」

そして先輩、なんとも言えない笑みを見せながら、またあたしの額つつく。

Episode : 85

「で、あなた死ぬほどやったかしら？ そうじゃないなら、やっぱり『足りない』わよね」

「——ごめんなさい」

なんか分かんないけど、思わずルーフェみたいに謝っちゃったり。確かにあたし、そこまではやってないもの。

先輩がまた笑った。

「やるのはあなた。諦めるのもあなた。文句を言うのも落ち込むのも自由だけど、やらずに言うのはただの馬鹿よ」
「……ですね」

この先輩が意外と人気あるの、なんか分かったかも。
ってもイオニア先輩、違う意味でも人気があるから困り者？

「まあ、面倒だから最初から諦めるっていうのも、悪くは無いわ。ある意味賢い選択ね。ただその場合、文句を言うのだけは筋違い。そういう子は嫌いよ」

好き嫌いは関係ないような気がするけど、言ってることは今度は分かったり。

——そうだよね。

ぐちゃぐちゃ考えてるより、トコトンやってみるか、最初からすばつと諦めて別のことをするか。それしかないもの。

ちよつとだけ納得したあたしを、先輩ったら満足そうに見て。

「分かったところで急ぎなさい。さっさと食べて、出発するわよ」

傲然と言い放つ。

もつともルーフェ以外はほとんど食べ終わってたから、そんなに焦る必要ないんだけど。

「ほら子猫ちゃん、急がないと日が暮れてよ?」

「す、すみません!」

みんなが片づけする中、ルーフェだけが慌てて食べてる。

「まったくあなた、急げとは言ったけど、喉を詰まらせるとは言っていないわよ? 口に詰め込むもんじゃないわ」

先輩、いじめてるんだか世話焼いてるんだか。

それでもじきルーフェも食べ終わって、後始末して立ち上がる。

「行くわよ。モタモタして、暗くなったらたまらないわ。置き去りにされたくなかったら、付いてらっしゃい」

そんなこと言ってるけど先輩、実は置いてく気はないんじゃないかな……なんて、ちよっと思っただ。

だってイオニア先輩タカビーだけど、見るとこ見てる感じだもん。

今度は先頭行く先輩の背中見ながら、安心して歩いてく。

先輩の隣はルーフェ。警戒には適してるから、まあ妥当。

すぐ後ろが、何故かミル。きゃあきゃあ先輩に話しかけるとこ見ると、要するに一緒に居たいだけかも。

で、その後ろがまずいことに、殿下とイマドになっちゃって。

(シーモア、イマドに後ろ頼む?)

(だねえ。これじゃ何が起るかわかりやしないよ)

思わず2人で、小声でそんな相談しちゃったり。

Episode : 86

でもラッキーかな？ 何か殿下が一回話しかけただけで、あとはどっちも無言。とりたててトラブルない感じ。

まあ実際には内心、どっちも険悪なのかもしれないけど……。そんなこと考えながら、時々休憩いれつつ、午後中歩いて。

「あそこかしらね」

先輩が立ち止まった。

後ろから覗いてみると、先がちよつとした広場になってて、石柱とか祭壇ばいものとかあって。

「間違いなさそうだな。あそこに王家の紋章がある」

殿下が祭壇みたいなところを、指差した。

「もしかしてアヴァンの紋章が竜なのって、この儀式のせい？」

「ん？ ああ、そうも言えるな。まあ早い話が、建国王が竜騎士だからな。それを由来にして決めたものだ」

なるほど、って思ったり。いつもこういうの見過ごしてるけど、調べてみるとそれぞれ、けっこう面白いのかも。

「ここで野営ですか？」

「そうね。ただ、火は焚けないわよ。見張られてる以上、目立つマネは避けるしかないわ」

この先輩でも、任務つてなれば目立たないようにするんだ……とか、変なところでちよつぷり感心。

それから急に先輩、真面目な顔になってあたしたちを見回したの。「で、あなたたちにこれだけは、言っておくわ」

厳しい表情。

「いいこと。予想外の事態が起こったらあなたたち、さっさと逃げなさい」

「え……」

思わずみんなの手が止まる。

「子猫ちゃんと私で、時間は稼ぐわ。その間に逃げる、いいわね」
きっぱりした口調。でも納得が行かなくて、言ってみた。

「けど、それって先輩、かえって危ないんじゃない……」

「あなたたちが居るほうが、もっと危ないわ。そうでしょ、子猫ちゃん」

先輩の言葉に、ルーフエがうなずく。

—— やっぱり悔しいな。

さっき納得したばかりだけど、でもそう思う。だって、イザつときは足手まといだって、言われてるんだもの。

そんなあたしたちを、上から目線で先輩がまた見回して。

「異論は認めないわよ。悔しいというなら、上級隊レベルに届かなかった自分でも、責めておきなさい」

ある意味メチャクチャ。だってルーフエみたいな子ならともかく、普通の学院生がこの年で上級隊並みとか、あるわけないもの。

先輩が容赦ナシに続ける。

「食い止めている間に、殿下を連れて逃げる。各自、生き延びることだけを考えなさい。命令よ、いいわね」

「はい……」

賛成は出来ないけど、従うしかなかったり。

「万一の時には、倒せる実力でもつけてから復讐なさい。ああでも、すぐでもいいわね。死体の山をむやみに増やすような馬鹿は、どうせ邪魔なだけだから」

なんだかものすごい言い方されたけど、怒る気にならないのが不思議。間違つてないからかな？

そして先輩が、不適に笑う。

「ま、どちらにしても私が仕留めるわけだけど」

根拠はきつと、ないはず。でもこの自信が事態を動かすかも、そう思っちゃう。

リーダーや指揮官で、同じ集団でも戦力が変わるって言うけど、こついうことなんだなって納得。

「とりあえず、今日のところは食べて寝るわよ。寝不足で失敗なんて、それこそ願い下げ。やらかしたら思いっきり減点するから、覚悟なさい」

「は、はい」

迫力満点の先輩の言葉に、思わず震え上がりながら、その日は終わりになったの。

Episode : 87

R u f e i r

朝日が谷を照らしてる。

吐く息が白い。もう秋も半ばだし、標高も少し高いから、朝晩は冷え込むだろう。

まだみんなが寝てる中、あたしはそっと木々の間から覗いてみた。野営をしたのは目的地から少しだけ離れた、森の中だ。だから竜が居たとしても、そう簡単には、見つからないだろう。

広場の様子は、昨日と別に変わらなかった。紅葉の始まった黄色い木々を背景に、祭壇らしい大岩が静かに佇んでいる。

上空も、今のところはさわやかな青空だ。

——起こしたほうが、いいかな？

山の天気は変わりやすいから、晴れているうちに片付けるほうが、いいような気がする。

急いで天幕へ戻ると、声が聞こえてきた。

「いつまで寝てるの、起きなさい！ 起きないなら減点するわよ」

もちろん、イオニア先輩の声だ。

天幕の中で動きがあつて、出入り口からみんなが出てくる。

「あ、ルーフェ居ないと思ったら。おはよー」

「おはよ。えつと……寝れた？」

あたしの質問に、ナティエスがうなずく。

「でも、やっぱりベッドがいいかなあ」

「何当たり前のこと言ってるんだい」

シーモアの言葉に、ナティエスが笑った。

「お喋りはそこまで。さっさと身支度して、食事して。早くしないと天気が変わるわ」

先輩に急かされて、みんな慌てて用意を始める。

「朝メシ、パンとチーズと燻製肉と、お茶だけだかな」

「上等じゃないか」

持ってきたありあわせの材料なのに、出てきたのはけっこう立派な朝食だ。

「スープが欲しいところだな」

「ムリ言わないください。つか生野菜食いてえ」

このメンバー、どういうわけか男子のほうで、食べるものにつるさい。携行食なんかに比べたら格段においしいのに、それじゃ不満みたいだ。

「いいから食べなさい。文句あるなら食べなくていいわよ」

「用意したの、俺ですけど……」

イマドが抗議してるけど、イオニア先輩が聞くわけない。

「リーダーは私よ。逆らうの？」

「……やめときます」

なんかもう先輩、高笑いでもしそうな雰囲気だ。

「ミルちゃんおかわりー！」

「ねえよ！　つか俺だって食いてえっての！」

そんなやり取りを聞きながら、必死で朝食を食べ終える。先輩があたしたちを見回した。

あとがき

いつも読んでくださって、ありがとうございます♪【夜8時過ぎ】
の更新です。たぶん。前作とは一転、バトルやや多目の冒険風味で
す。

感想等、大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ

Episode : 88

「まず、ルーフェア以外は石を用意。それを持って、祭壇を中心に正六角形に展開。ここまではいいわね？」

「はい」

声が揃う。

「場所は、祭壇の前方がルーフェアと殿下。それからイマド、あなた石の扱い得意そうだし、ルーフェアとの相性もいいみたいだから、反対側に行って安定させて頂戴」

「了解」

上級隊ただけあって、メンバーひとりひとりをよく見てるな、と思った。

「シーモアとナティエスは、祭壇奥側の左右へ。どっちがどっちでもいいわ。ミルは手前の右を。私は手前の左。みんな分かったわね？」

「はい」

間違っわけにはいけないから、みんな真剣だ。

「連絡は、任務開始時に配った通話石で。発動の同期もこれで取るから、聞き落とさないように。というか、聞き落としたら死んでもらうから」

先輩が平然と言い放つ。

でも聞き落として失敗したら、もれなく竜とのバトルだから、頼まなくても死ぬそんな気はする。

「細かい位置は、私が一緒に行って指示するわ。一周しながら一人置いていけば、ぜんぶ一回で終わるし」

「俺ら置物ですか」

イマドが不満そうに言ったけど、先輩はさらに上だった。

「置物の役がもらえるだけ、感謝して欲しいものだわね。見習いなんて、本来は戦力外。連れてだつて来ないわ」

いったん言葉を切つて、また先輩が続ける。

「手順は別邸で話した通りよ。まず学院生が同時に魔法を発動。殿下は魔法の代わりに、竜の召喚。その後殿下は続けて、例の契約の言葉を。分かったかしら？」

「はい」

いい作戦だな、と思う。

大掛かりな割に、手順がシンプルだ。こういう作戦は、失敗が少なくていい。

先輩がうなずいてから、言った。

「さつきも言ったけど、何より同期に気をつけなさい。ここをしくじったら、全部が瓦解するわ」

先輩の視線が動く。

「特に殿下、召喚と契約の言葉は、ともかく手早く正確に。魔法が効いてる間に言い終わらないと、何が起こるか分かりませんから」

先輩が脅してるけど、念のためだろう。

何しろ使おうとしてる例の重力魔法、発動すればそれなりの時間効いたままだ。その間に契約の言葉を言い切るくらい、出来ないほうがおかしい。

Episode : 89

「あとは昨日言ったとおり、不測の事態が起こったら、ともかく逃げる。いいわね？」

「了解」

みんなの答えに先輩、満足そうだ。

「以上よ。何か質問は？」

「……先輩、ひとつだけ。つか作戦前にこういうの、ヤバいかもしんじゃないですけど」

言いにくそうにイマドが言った。彼にしては珍しい。

「言いなさい。分からないままにしておくほうが、問題が多いわ」
意外にも先輩、怒らずに質問を受ける。

「んじゃ聞いときます」

それでもまだ少し躊躇ってから、イマドはやつと口にした。

「向こうが不意打ちとか、ありません？」

「だからさっきも言ったでしょう、万一の時には逃げなさい、って」
先輩の答えに、みんなが意味を悟って息を呑む。

「そしたら、かなりヤバいんじゃない？」

「どうかしらね。いちおうこの儀式、竜たちとも協定が結ばれてるみたいだから」

さらりと先輩が言う。

「協定だと？ 僕は聞いてないぞ」

「本家本元が知らないなんて、ちょっと勉強不足では？」
殿下をやりこめる先輩、とっても楽しそうだ。

「屋敷から出てきた文献に、載ってましたからね。資料を出してもらっただけの私より、よほど手に触れる機会はあるはずですけど」先輩の言ってることは間違いじゃないけど……実質ムリじゃないかな、と思う。あたしも入ったことがあるけど、公爵家の図書室はけっこうな数の蔵書があつて、全部読むのは大変だ。

「それ、見つけたのミルちゃんだからー！先輩じゃないよ？」

ミルがすかさずアピールする。

「よく見つけたな……。資料を見たのは、こっちへ来てからじゃないのか？」

「うん」

にこにこしながらミルが続けた。

「ホントいうとね、どれもちゃんとは書いてないんだよ。でもね、ぜーんぶ読んであっちこっち繋ぎ合わせると、出てくるんだー」

嘘は言ってなさそうだけど、何しろミルだ。みんなが訝しげな顔で先輩を見る。

「ああ、この子が言ってるのはホントよ。私も指摘された箇所は、全部目を通したわ」

何でも先輩、アヴァンシティを観光する気で屋敷に戻ったら、ミルが居たんだって言う。

「まったく、おかげで資料整理に付き合わされて、観光できなかったじゃない」

「えーでも、二人つきりになれたしー」

ミルは嬉しそうに言うけど、やっぱり何かがおかしいと思う。

「ともかく、読んだ限りじゃ不意打ちはなさそうだったわね。この儀式は建国王に倣ったものと言われてるけど、実際は少し違うわ」

なんだかこのところ、「真実の」歴史が見られて面白い。こつ
うのは、公爵家に関わった特典だろう。

Episode : 90

「よく調べてみるとこの儀式、始めたのは厳密には建国王ね。相方の竜に、自分の子孫に力を貸して欲しいと、頼んでるから」

建国王は竜騎士だったから、自分の子供たちにも同じ力を、伝えたかったのかもしれない。

何しろ現代だって、竜を従えてるとなれば、それなりに有利なのだから。

「あ、じゃあそのために、力試しなんだ」

やっと納得がいった、そんな顔でナティエスが言った。

「そういうこと。だからある程度、取り決めがなされてるわけね」

この辺から先輩、不意打ちはないと判断したんだろう。

「ただ、何事も予定通り行くなんで、思うほうが馬鹿。だから万一の時は……」

「逃げる、ってわけですか」

あとを引き取ったイマドの言葉に、先輩が頷いた。

「まあ、召喚した時点で魔法は発動しているわけだから、そこまで出来ればこちらの勝ち。逆にそれ以外は、考えても仕方ないわ。予定と違ったら逃げる、それだけよ」

たしかに古代竜相手じゃ、それくらいしか方法はないだろう。

「ほかに質問はないなら、準備して。すぐ出るわよ」

慌しくなる。ただ準備といっても、いつもの装備にプラスして、各自魔力石をひとつ持っただけだ。すぐにみんな終わって、待機状態になった。

「全員配置に着くまで、ルーフェイアと殿下はここで。展開が終わったら連絡するから、それから定位置へ出てちょうだい」

「分かりました」

答えるあたしにうなずいて、先輩が号令をかける。

「作戦開始！」

みんなが緊張した面持ちで、でも静かに出て行って、あたしと殿下だけが残された。

「僕らはどのくらい待つんだ？」

「少し……かかるかと」

通話石からは、先輩とみんなの会話が時々流れてくる。でもまだナティエスも配置についてないから、まだまだだ。

なにしろ全員を、それなりの広さへ配置しなきゃならない。しかもこういう任務に慣れてなくて、各自自分で計測して判断してってわけにいかないから、なおさらだった。

「それだとヒマだな。本でも持つてくるんだっただか」

「すみません……」

つい謝ると、殿下に怒られた。

「なぜお前が謝る」

「え、あ、でも、殿下がこういう待つことに、慣れてないの気づかなくて……」

任務なんて正直、待つ時間が大半だ。けど殿下は急がしいのが当たり前だし、待たされるなんてことはないだろうから、辛いだろう。それを考慮に入れなかったのは、雇われたあたしたちのミスだ。けどそのことを言ったら、余計に怒られた。

Episode : 91

「僕は幼児じゃないぞ。そのくらい、必要ならする。そこまで気遣うな」

「あ、はい……」

なんだか殿下のプライド、傷つけたみたいだ。ただ幸い、怒り心頭ってほどじゃなかったらしい。すぐに違う話を始める。

「それにしても竜か。やれると思うか？」

「やらなければ死にます」

即座にそう答える。どんなに言葉を繕って濁しても解決にならないくらい、竜は危険な相手だ。

「ある程度定められた儀式みたいですから、先輩の言うとおり、危険は最小クラスだと思いますけど……それでもミスは、危険すぎます」

「そ、そうか」

焦る殿下を見て、言い過ぎたかな？と一瞬思う。けどこれだけは分かっておいてもらわないと、余計に危ないだろう。

「あと先輩も言っていましたけど、何かあったら……迷わず逃げてください。あたしは気にしないでいいです」

「出来るわけがないだろう！」

予想通りの答えが返ってきた。

殿下、横柄なところも傲慢なところもあるけど、基本的には責任感が強いタイプだ。進んで仲間を見捨てたりはしない。

だから、言う。

「前回の時も言ったかもしれませんが……あたし一人なら逆に、全力が出せるのでどうにでもなります。ですから、先に逃げてください」

啞然とする殿下。

「た、倒せるのか？」

「分かりません。でもあたしだけなら、最悪でも逃げられます」

答えながら思う。もしかしたら、やれるかもしれないと。

根拠がないから過信はできないけど、周りを気にせず全力で行ったら、たぶん互角には戦えるんじゃないだろうか。

ただそれは……あたしが以前よりさらに、異常になったことを意味してる。

古代竜を倒そうと思ったら、最低でも手練の分隊は要る。数の優位を使いながら、策を練って罠を張って追い込んで、それでも失敗するときがあるくらいだ。

それを一人でなんて、もう人間って言わないだろう。

シユマーのグレイス。戦うために生まれる血の結晶。

そんなあたしに本当の居場所なんて、どこにもないのかもしれない。い。

「まあ実際には、あのイオニアとやらも言っていたが……心配するだけ無駄かもしれないしな」

「はい」

気を遣ってくれたらしい殿下の言葉に、あたしも素直に同意した。

ないに越したことはないし、起こるにしても今悩んだって無駄だ。だったらとりあえず棚上げて、今出来ることを確実にやれるよう

にしたほうがいい。

そのまま何も言えなくて黙っていると、また殿下が口を開いた。

Episode : 92

「お前は……ずっとこんなことを、続けるのか？」

以前もされた気がする質問。

答えるべきなんだろうけど、言葉が見つからなかった。あたしがシユマーでグレイスで、神殺しと目される殺戮のためのものなんてまさか言うわけにいかない。

「あたしは他に、行き場所はありません……」

結局言えたのはそれだけだ。ただこの答えで、殿下が納得するわけもなかった。

「行き場所なら、幾らでもあるだろう。ないなら用意してやってもいい。そのくらいなら、僕は出来るぞ」

殿下に悪気はない。それどころか、あたしをととても気遣ってくれている。

でも、永遠の平行線だ。

「すみません……本当に、ごめんなさい……」
涙がこぼれてくる。

殿下には伝わらないだろう。それどころか、この世界の誰にも伝わらないだろう。

人の姿をした竜。例えて言うならあたしは、そんなようなものだ。それが人の中でふつうにやれるとは、とても思えなかった。どこか世界の隅のほうで人のフリをして、こっそり生きていくのが関の山だろう。

いろいろなところで異質すぎて……一緒にやろうと近づけば近づくほど、両方が辛くなるだけだ。

「いやその……すまん。お前にとってこれが、そんなに聞かれたくないこととは知らなかった」

「あ、いえ、それはあたしが……」

どう考えても、殿下は悪くない。

「ともかく、僕で出来ることなら何でもやってやる。いつでも気にせず、頼って来い。それでもアヴァンの公爵家で、継承権第2位だからな。大抵のことなら出来るぞ」

それからいたずらっぽく笑って、殿下が付け加えた。

「もつとも近いうちに継承権は、なくなるかもしれんが。だがそれでも、権威とコネは使えるからな」

きつと殿下は覚悟してるんだろう。

この儀式が失敗すればもちろん、成功して殿下が竜を得たとしても、公爵家の立場がどうなるかは分からない。上手く釈明できなくて世論がそのままなら……恐らく王室は廃止だ。

そして報道が全て敵に回っている以上、その可能性はかなりある。

「国民が予想以上に愚かで、目先の話に気をとられてくれればいいんだが——こんなことを望まねばならんとは、少々情けないな」

殿下が嘆いているのはアヴァンの国民のことなのか、それとも公爵家のことなのか、よく分からなかった。もしかすると、両方かもしれない。

「いずれにせよ、まずは儀式だな。これが成功すれば、だいぶ道が拓ける」

「はい」

未来は待つものじゃなく、掴むものだ。これだけは間違いがない。

「配置は、まだなのか？」

「えっと、もうすぐかと」

通話石からは、さっきミルが配置についたと連絡があつた。だからもうすぐ先輩がついて、本格的に開始になるはずだ。

Episode : 93

「確かお前が魔法、僕が召喚と契約の言葉だったな」

「はい」

確認してきた殿下を、ちょっとだけ頼もしく思う。以前はこんなじゃなかった。

極限状態で事態を動かすのは、冷静さと思ひの力だ。この2つが揃うと、圧倒的な劣勢さえ跳ね返すことがある。

今の殿下には、それがあつた。だからきつと、やれるだろう。

なんとなく深呼吸して意識を澄ましたところで、先輩から連絡が入つた。

「ルーフェイア、応答して。こちらは全員、配置についたわ」

「了解、こちらも配置につきます」

答えて、殿下に声をかける。

「殿下、出ましょう」

「分かつた」

けど抜き身の太刀を手に前へ出た瞬間、目の前、何もないはずの場所が陽炎のように揺らめきだす。

「なんだ?!」

それに答えるより早く、陽炎が実体を持つた。

——竜。

見上げるほどの高さのそれが、雷鳴のような咆哮を上げる。ここに最初から居たのか。それともどこかから魔法で移動してき

たのか。どちらにしても、殺気を放っているのは間違いない。

「殿下、逃げてください！」

一瞬の間。そして、思いもかけない答えが返ってきた。

「ルーフェイア、僕を守れ！ その間に、契約の言葉を言う！」

殿下の言葉に、揺るぎない意思を感じる。

「了解、では横方向へ退避を！」

言いながら目くらましの魔法を放ち、通話石の方にも伝えた。

「先輩、竜です。すぐ魔法を！」

そしてあたしも唱える。足止めをするなら、大きく出たほうがいい。

「万物に宿りし力よ、すべてここに集いて形無きくびきとなれ——
シュヴェア＝ブローカーデ！」

ほぼ同時に、同じ魔法が6つ発動した。全員分だ。

苦悶の声を上げながら、竜が首を落とし腹ばいになる。増幅された自分の重さに、耐えかねたんだろう。

けど、その瞳に剣呑な光が宿る。

危険を感じ取って、先手を打とうとして……動けなかった。

しまった、と思う。

あまり成功しないから忘れられているけど、魔法の中には「行動を制限する」タイプのものがある。

それが、かけられていた。

翠の竜の目から、視線が外せない。指どころか、声ひとつ出せない。

竜の口がゆっくりと開いていく。

けどブレスの直撃を覚悟した瞬間、誰かの背中で視線が遮られた。身体が自由に戻る。考えるより早く、呪文が口を突く。

「エレメンタル・ブレスっ！」

得意の多重発動。それを殿下と、自分と——もうひとり。

更に唱える。

「ルス・バレーっ！」

防御魔法をもうひとつ発動させたところで炎が周囲をなぎ払ったけど、どうにか耐え切った。

そして少し遠くから、朗々と響く殿下の声。

「我が名はローウェル、竜騎士メルヒオルの血を継ぐ者なり。汝この竜玉の盟約に従い、我が物となれ！」

契約の言葉が、竜に放たれた。

Episode : 94

I m a d

「ここで待機。動くんじゃないわよ」
「了解」

俺の答えはろくすっぽ聞かねえで、先輩が背向けた。
ミルとシーモアがこっち見て、ちらっと手振る。いちおう激励だろう。

——まあ、ミルは分かんねえけど。
あいつ頭もいいし記憶力も抜群なヤツだけど、思考回路は思いっ
きし異星人だ。

連中が行っちまうと、辺りが静まり返った。

このあとしばらくは、待機だろう。なんせあのミルとシーモア、
それに先輩の3人が、順番に配置に着かなきゃなんねえし。

突っ立ってんのもアレだから、定位置に印つけてその辺に座り込む。

ここ数日、けっこう複雑な心境、ってやつだ。しかも面倒なのは、
誰も悪くねえから白黒付けらんねえってことだった。

殿下がルーフェアのことを悪く思ってたねえのは、誰が見たって
分かる。機会さえありゃ、かつ攫ってくだらう。

つてもルーフェアのヤツは、そういうのはどっかに落としてきち
まってるわけで。だからどこまで行っても、雇い主と雇われ人だ。
殿下がある意味気の毒な状態だけど、まあこればっかはしゃーな
い。

そして俺がどうにもイラついてるのは……自分のほうだ。

ここへ来るまでの間に、殿下に言われた。「お前はルーフェイアに、何が出来るのか？」と。

実言うそれは、俺もここ来てから、ずっと考えてた。

殿下と違って俺は、金どころか家も親もない。あんなふうに地位があるわけでも、権力があるわけでもない。

俺が出来ないことなんて山ほどあるけど、そのほとんどは、殿下ならどうにでもなるだろう。

つか考えてみりゃ、ルーフェイアだってそうだ。

家はあのとおり財閥クラスで、あっちこっちにコネもある。あいつが欲しいって一言言や、手に入らないもののほうが少ないはずだ。事情が事情だから仕方なくシエラに来てるだけで、あいつが望みや、どんな贅沢だって出来る。

そういう連中相手に、俺が何できるかって言われて考えて——腹立つほど、なんもなかった。

さすがにため息が出る。

シエラにいる限りはそれなりにやれっだろうけど、その先はどうにも見えねえ。俺が出来そうな範囲で考え付くのは、卒業して大学行くか、どっかの軍に就職するか、せいぜいそのくらいだ。

んで、方やあと数年で、シユマーの総領。差がありすぎる。

その中で、俺に出来ること……。

『ミルはここで待機。あとは私が配置につけば終わりね』

珍しく悩んでる俺にや関係なく、通話石から先輩の声が聞こえる。もうそろそろ全員配置につくらしい。

Episode : 95

そのとき急に辺りが揺らいだ。

そして同時に感じる、妙な胸騒ぎ。

どうもヘンな能力があるせいか、俺は見え方感じ方がおかしいらしい。

んでそのせいか、たまに世界が歪んだりする。ってももういい加減慣れてっから半分無視しつつ、惑わされてその辺にぶつかったりしないように、気をつけるくらいだ。

でも、今は無視しきんなかった。何かとんでもないものが、潜んでいる気がする。

意識を澄ます。違和感の正体に焦点を合わせる。

——竜か！

分かった瞬間、全部が見えてきた。

その辺を焼き尽くすんじゃないかねえかってほどの、悪意と殺意。けどまだ俺が感じられるだけで、現実には現れてない。

何かが俺に囁いてた。俺が行けば事態が変わる、と。

何の根拠もねえのに、何がどうなるか手に取るように分かる。

一瞬だけ躊躇ったあと、俺は地面に例の魔石を置いた。

魔石ってのは発動させるのに、人の意思が要るように作られてる。つかそうじゃないと、その辺で勝手に発動して、危ねえなんてもんじゃない。

逆に言うと、手近にないと発動させらんねえってことになる。

それを――覆す。

石に関しちや得意分野だから、元から手触れないで発動くらいは出来る。問題は距離で……けど、やるしかない。

失敗したら、あのタカビーな先輩にムチャクチャ怒られっだろうな、と思う。

でも裏を返しゃ、そんだけの話だ。減点は食らっちまっただろうけど、別に学院追んだされたりしない。

むしろ今のままのほうが、竜にやられてヘタすりゃ全滅コースだ。

もちろん今の時点で、ケツまくって逃げりゃ逃げられる。けどそれはさすがに、プライドが許さなかった。

命令違反だろうがなんだろうが、あいつを竜の前に置き去りで逃げるとか、やれるわけがない。

また意識を澄まして、石の波動を捉えてから、走り出す。

悪意と殺意は今も感じるけど、竜の姿はまだ見えなかった。これなら間に合うはずだ。

気づかれないようにシーモアの後ろ抜けて、ミルの辺りまで来たところで、通話石から声が聞こえた。

『ルーフェイア、応答して。こちらは全員、配置についたわ』

『了解、こちらも配置につきます』

同時に、高まる悪意。

それからいくらか間をおかねえうちに、ものすごい咆哮が空気を震わせた。

ルーフェイアのヤツの厳しい声が飛ぶ。

「先輩、竜です。すぐ魔法を！」

一旦立ち止まって、石に意識を合わせる。さすがに走りながらつてのはムリだ。

——行け。

距離を置いたところで発動した魔法を、必死にコントロールして安定させる。

Episode : 96

竜のうめき声。

ルーフェイアんと行きながら視線をやると、魔法がほぼ予想通りに効いてた。実際にはかなり防壁で減衰されてっけど、それでも元がデカいから、効果がけっこう残ってる。

殿下はとつくに、退避させたんだろう。前に立つのは、ルーフェイアだけだ。

竜が口を開いた。けど、ルーフェイアのヤツが動かない。

——違う。

竜の視線がルーフェイアに絡み付いて、縛り上げてる。

その間へ俺は割り込んだ。視線を代わりに受け止めて、睨み返す。古代の竜使いは、視線だけで竜を操ったって言う。だったら走竜で同じことが出来る俺は、操れないまでも対抗くらい出来るはずだ。

竜の瞳に怒りが浮かんた。こんな形で破られるとは、思ってたかったんだろう。

ルーフェイアのほうは見ない。んな事しなくてもこいつは、一番的確な行動を取る。

「エレメンタル・ブレスっ！」

思ったとおりルーフェイアが、得意の多重発動で最強の防御呪文を唱えた。

竜のほうは、口を開けて息を吸い込んでる。

「ルス・バレーっ！」

もう一つ防御魔法が発動すると同時に、竜のヤツが炎を吐いた。けど魔法のおかげで、なんとか耐え切る。更に殿下の声。

「我が名はローウェル、竜騎士メルヒオルの血を継ぐ者なり。汝この竜玉の盟約に従い、我が物となれ！」

これが契約の言葉ってヤツだろう。竜が悔しそうに、天に向かって吼える。

「終わったか……？」

「殿下、ダメです。まだ離れてください」

近づいてきた殿下に、ルーフェイアのヤツが鋭く警告した。

「完全に竜が屈したとは、限りません」
俺も同感だ。

契約の言葉自体は、たぶん効いてる。そうじゃなきゃ、もう一度や二度は炎吐かれてるはずだ。

けどこの竜のヤツ、ものすごい怒り方だ。この調子じゃ、契約破って何かやらしかねない。

重力魔法が消えてく。ヤツが動くなら、このタイミングだ。

「イマド！」

「分かってる！」

左右に散った間を、また炎が駆け抜けた。

「つたく、契約くらい守れよ」

悪態つきながら、前へ走る。隙作んねえと、いくらルーフェイアでも攻めきれない。

「あなたたち、避けなさい！」

思いもしなかった方向から、イオニア先輩の声が聞こえた。

この騒ぎで、すっ飛んできたんだろう。なんやかや言いつつも、やっぱ上級隊だ。

Episode : 97

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ——フロスティ・エンブランスッ！」

さすがにルーフェアには負けつけど、威力十分で魔法が炸裂する。

竜の足元が凍り付いて、動きが止まった。

けど、止まったってただだ。竜が何かを振り払うみたいに首を振ったあと、また口を開いた。

すかさずその口めがけて、抜いた長剣を投げる。
そして後ろから、ルーフェアの呪文が聞こえた。

「遥かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ——ケラウノス・レイジッ！」

魔法がが発動して、雷撃が俺の剣に落ちる。

空気を震わす、竜の苦悶の咆哮。

「やったか？」

ダメージ与えたのは間違いねえけど、なにせ竜だ。どこまで効いたか。

警戒する俺らの前で案の定、苦しそうに、けど憎しみ込めた目で、竜が一步踏み出す。

「ほんのちよつとでいいから、抑えられる？」

「やらなきゃダメなんだろ」

まあ相手は瀕死だ。こっちも死ぬ気でやりや、隙くらいは作れっ
だろう。

けど。

『——そこまでだ』

頭の中にいきなり声が響いて、影が落ちてきた。

最初の竜を半分押しつぶしそうになりながら、もう一頭の竜が俺らとの間に割って入る。

あとから来たこいつは、最初のより二回りはデカい。鱗もツヤこそ薄いけど、その分硬そうだ。

『この若造が出て行っただので、慌てて後を追ったが……返り討ちはな』

「え？」

思わず間抜けな声がでる。

「出てっただってもしかして、これって儀式と違ったりします？」

さすがにタメ口はきけなくて、一応改まってみた。

竜がごう、と息を吐いて、言う。

『違うと言えば違うな。メルヒオルには、このような殺し合いをするとは頼まれていない』

要するに俺ら、余計な話に巻き込まれたっばい。

『血の気の多いこの若造が、人に従うのは受け入れられんと飛び出してな。まあ済まなかった』

「済まなかったって、俺らそれで死ぬとこだったんですけど……」

竜と人間とじゃ感覚違うんだろうけど、ひどすぎだ。手違いで死にましたじゃ、シャレにならねえ。

けど相手が相手なだけに思い切って抗議できないのが、我ながら情けねえとこだ。

Episode : 98

『死者が出ていないのだから、構わんだろう。あとで相応の償いもする。だがその前に——』

竜の言葉が途切れて、魔法が発動した。回復系だ。最初の竜の傷が、みるみる癒えてく。

また咆哮が轟いて、若い方の竜が俺らに炎でも吐こうってんだろ
う、口を開けて——豪快に尻尾でぶん殴られた。

子犬思わせる悲鳴あげて、若い竜がうなだれる。

『聞き分けの悪いやつだ。今痛い目に遭ったのに、まだ懲りんのか』
呆れたふうに言ったあと、竜がこっちへ顔を向けた。

『済まぬな。ただこんな出来の悪い子供でも、長く生きるぶん数の
少ない我らには貴重だ。分かって欲しい』

人間にはちよつと分かりづらいこと言っ、て、竜の頭が地面スレス
レまで下がる。どうやら俺ら人間流に、謝ってるらしい。

『事情は分かるが、二度とないようにして欲しいものだな』
答えたのは殿下だ。

「こちらとて、命が二つあるわけではない。覚悟はしてきているが、
契約違反は論外だろう。そちらがその気なら、こちらもこの山、人
の手を入れるぞ？」

『済まぬ』

そいえばこの山、ふつうは立ち入り禁止だったの思い出す。

竜はアヴァンの王家に力を貸して、代わりに棲家を得る。昔そん

な取引が昔されたんだろう。単純に王家が自分たちの箔付けで聖域にしたんだと思ってたけど、そうじゃなかったってことだ。

ホント世の中ってのは、何でも裏がありすぎる。

それにすかさず取引材料にしちまつてる殿下、けっこういい王になるかもしれない。

『ところで、そなたがメルヒオルの血を継ぐものでよいのか？』

「そうだ」

竜の視線が、殿下に注がれた。

『確かに、髪と瞳の色などそっくりだな。他にもいろいろなところが、メルヒオルに似ている』

竜が感慨深げに言った。俺らにとっては本に書かれた歴史でも、千年以上生きる竜にとっては懐かしい思い出なんだろう。

『あのころは良かった。我ら一族はたしかに変わり者かもしれないが、人間と上手くやれていた』

大きな琥珀色の瞳が、どこか遠くを見る。

『人は信用ならんと言う者も多いが、我らはそうは思わない。少なくともメルヒオルは友人と呼ぶにふさわしかったし、お前たちメルヒオルの子らも、約束どおり谷と山とを守ってくれた』

「当たり前だ。信用を失っては王家は成り立たん」

間髪入れず答える殿下。

Episode : 99

今回のことといい、こないだ言ってた王女の件といい、公爵家もけっこうヒドい目に遭ってる。それでもまだ「信頼される」存在でいようってのは、もうプライドとか信念の世界だろう。

やっぱ殿下、案外いい王様になりそうだ。

まあ殿下が王位についたとこで、国を好き勝手に動かせるわけじゃねえから、意味は薄いかもしれねえけど……。

『本当に、若いころのメルヒオルのようだな。同じことをあれも言っていた』

大きく息を吐いて、竜が続ける。

『信を失うな。犠牲者に泣け。しかし犠牲におびえるな。メルヒオルからの伝言だ』

「建国王からの……」

殿下が何百年前からの贈り物を繰り返した。

「信を失うな。犠牲者に泣け。しかし犠牲におびえるな、か。なるほどな」

納得したみたいに頷いて、竜に向かって言う。

「建国王メルヒオルからの伝言、たしかに受け取った。礼を言う」
『礼には及ばぬ。そなたたちは少なくとも我らに対しては、約束を違えなかったからな』

やり取りを見ながら、面白れえなと思った。

どっちも裏切ったり裏切られたり思惑と違ったり、そういうのは想定済みだ。なのにそれでも、信頼できる相手って考えてる。

『さて、かつての契約の件はこれで良いが……これとは別に、そなたたちに償いをせねばならんな』

大きく息を吐きながら、竜が言った。

後ろで尻尾が動いて、若い竜の頭を引っぱたく。この馬鹿が、つてとこだろう。

『何がいいか……ああ、そうだな』

竜の独り言と同時に俺とルーフェア、それに先輩の目の前に、手のひらくらいの光が浮かんた。

『それを持つていくといい』

言われて恐る恐る、手を伸ばしてみる。

『何だこれ、鱗？』

『そうだ。持つていれ私が死なんかぎり、かなりの魔法と炎が防げる。お前たちのほうが先に死ぬだろうから、恐らく一生使えるはずだ』

竜の一生つてのは長い。この竜がどんだけ生きてきたかは知んねえけど、それでもあと百年やそこらは生きるだろう。

ふと、竜が今までどんなもん見てきたか、気になった。あつという間に大人になって死んでく俺らは、竜にはどんなふうに見えてんだろう？

『ほかにも、売れば相当の額になるとかつて聞いた。まあ今は、さして価値がないかも知れないが』

『いや、すっげー高いです。竜が昔みたいに居ないんで、ものすごい値上がりですよ。つても俺、今んとこ売る気ないですけど』

シエラにいくくらいだ。防御のほうがずっと助かる。

竜のほうは答えが面白かったらしくて、ひとしきり笑ったあと、

俺らを見回した。

その視線が、今度はルーフェイアで止まる。

Episode : 100

「そなたもしかして、シユマーのグレイスか？」

俺の隣で、ルーフェアのヤツが息を呑んだ。

たぶんコイツにしてみたら、いちばん言われたくないはずの言葉。

「シユマー……？」

案の定、先輩は聞き逃さなかった。

「先輩、それ聞かなかったことにしといてください」

「あら、そういう要求するのね？」

ため息つきたくなる。なんでこう上級隊ってのは、他人の弱みに付け込むヤツばっかなんだか。

「まあどうしてもって言うなら、聞かなくもないわよ？ 何しろ可愛い子猫ちゃんのことだもの。でも、見返りが欲しいならねえ」

「……俺が可能な範囲にしといてください」

そうは言っても何が出てくんだか、分かんねえのが怖いとこだ。

「そうね、じゃあヒマな時に食事でも作ってもらおうかしら？ 子猫ちゃんと食べてあげてよ」

「そんなんでいいんです？」

たしかにこれなら「可能な範囲」ってやつだけど、ちょっと拍子抜けだ。

「あら何？ 嫌なら変えてあげるわよ？」

「いえ、いいです。つか、またルーフェア持つてくと思ってただけなんで」

あんなに困い込むのに熱心だったのに、こういう風の吹き回しな

んだか。

けどこれ言った瞬間、先輩がふて腐れた顔になった。

「だってこの子、恐ろしく寝つきがいいんだもの」

「なる……」

笑うしかない。

基本ルーフェイアのヤツは、どこでも速攻寝ちまう。んでこないだの夜も、それ披露したんだろう。

「まさか、ヘタに起こすわけにもいかないし」

「死にたくなきゃ、そのほうがいいです」

こいつを叩き起こしても身の危険がないのは、ほんの数人だ。

「まあそういうわけだから、安く美味しいものを、子猫ちゃんと一緒に食べるわ。ああ、材料費は当然だけど、あなた持ちよ」

「げ……」

俺が甘かった。

「えーと、あの、俺あんま金ないんですけど」

「なら子猫ちゃんにでも借りるか、違う方法で埋めてもらうかだね。だいいちあなたの懐具合なんて、私には関係なくてよ？」

もうとりつく島もない。

「えっと、イマド、あたしが払うから……」

ルーフェイアのヤツが見かねて言ってくれてるけど、なんか複雑だ。かといって断るのも出来ねえのが、我ながら情けない。

Episode : 101

「ね、子猫ちゃん。私と一緒に、おいしい料理食べましょ？」

「はい！」

嬉しそうに返事したルーフェアが、こっち向いて言う。

「いい……よね？」

イオニア先輩が思いつきりニヤニヤしてんのは、俺が反論しねえの分かってんだろ。

つかここで拒否ったら、ルーフェア泣くし。

「じゃ、これで決まりね。ここだけの話にしておいてあげる。それにしても、そんなとこと関係があつたなんてね。ある意味納得だわ」先輩の言葉にルーフェアが、辛そうに視線を落とす。

「ああごめんなさい、子猫ちゃん泣かないで、ね？ でもあなたが何の理由もなく強いなら、そのほうがおかしいでしょう？」

先輩に抱き寄せられたルーフェアが、小さく頷いた。まあ納得したんだろうけど、どっかヤバい光景だ。

「そうそう。それにね、何がいいかなんて分からないものよ？ ごく普通に暮らしてたら、今頃戦火に巻き込まれて、とつくに死んでるかもしれないわ」

「あ……」

上手いこと言うな、と思う。たしかに世の中、何がよくてどんな結果が出るかなんて、分かんないもんだし。

この人けっこう女子から人気あるとか、指揮官任されるとかは聞いてたけど、噂だけじゃなさそうだ。

と、竜がまた口をきいた。

『今回は、上手くやれているようだな』

「え？」

何のことかまったく分からない、ルーフェアがそんな表情になる。

竜が不思議な瞳で見ても、言った。

『そうか、知らぬか。そのほうがきつとよいな』

「あの、もしかして、前のことを……知ってるんですか？」

動揺してんだろう、いつもきちんと話すルーフェアのやつが、メチャクチャな言い方だ。でも竜には伝わったらしくて、瞳が優しくなった。

『知っている。ずいぶん昔の話だ。私なぞ、まだこの若造程度だった』

竜が言ってるのは、たぶん歴代のグレイスの誰かだろう。年から考えて、前の代つてのが一番ありそうだ。

竜が遠い目をして、言う。

『あの時は、我ら竜はみな怯えていた。世界が終わるのだと。阻止してくれたことに、例を言わねばならん』

きょとんとした顔で、ルーフェアが返した。

「あの、それ、あたしじゃ……」

『我らにはどちらも同じだ。故にそなたにも誓おう。我ら一族は、そなたの命にもまた従う』

なんかエライことになってるし。

「でも、でも……」

『気にするな。それに我らが要れば、役に立つこともあろう。』
これは否定できなかったらしくて、ルーフェイアのやつが小さく
うなずく。

「なんだかよく分からんが、お前たちは僕と彼女、両方に仕えるということか？」

殿下の言葉に、竜が頷いた。

『そのようになるな』

「……万が一对立したら、どうするつもりだ」

責めるつてよりは、呆れた口調だ。きちんと先まで考えろ、つて言いたいのもしれない。

『そなたたちが対立したときは、我らの意思で選ぶまでだ。どちらかを優先するという契約ではないからな』

「ずいぶんいい加減だな……」

殿下が眉根を寄せる。

『ならば、対立せぬよう上手くやるのだな。駆け引きは、人間は得意であろう？』

「話し合いによる合意、と言ってほしいものだな」

竜が嵐みたいな音立てて笑った。

『そういったものが上に立つものには必要だと、メルヒオルはよく言っておった。清廉潔白はよいが、巧妙でなくてはならないと』

「そうだな。裏も表もないようでは、勤まらんだろう」

話聞きながら、なんでこんな妙な儀式やりだしたか、分かった気がした。

「殿下、継承権の儀式で死んだ王家の人って、居ましたっけ？」
確認したくて聞く。

「死んだ人間か？ たしか3代目の王の在位中に、1人亡くなったな。獣に襲われたはずだ」

「あーやつぱり」

点と点が繋がった。

継承権を持つだけの人なら、かなりの人数になる。現に今だって、数人居るはずだ。なのに死亡者が1人、しかも儀式そのもので死んでないんじゃない、メチャクチャ危険ってほどじゃない。

そもそも考えてみりゃ、畏かしてから竜の召喚が出来るって時点で、かなりインチキな儀式だ。しかも二代目でいきなり、ちゃんとした儀式してねえんだから、いろんな意味でヤバすぎる。

「もしかしてこれ、『ただで上手く人使って、人間らしい姑息な手段で勝つか』っての見てませんか？」

『ほう、よく分かったな』

竜がまた、笑った気がした。

『人間がいくら強かろうとも、正面きって我らに勝つのは至難の業。ならばそれをどう埋めるか、メルヒオルから頼まれてな』

「……すっげーお人好し」

思わず言う。

何しろそれを頼んだ本人、とつくの昔に墓の中だ。

『お前たちにはそうでも、彼は友人でな。意思是尊重したい』
「なる……」

たしかにそういう視点なら、アリだ。

「そついった話、後で聞かせてほしいものだな。だが今は、頼みがある」

殿下が言つて、竜をまつすぐ見る。

『なんだ、言つてみるがいい』

「僕を乗せて、この先の首都へ飛べ。しなければいけないことがある」

やる気だ。

そして殿下が、俺らに振り返つて言つた。

「ここまで、ご苦労だった。あとで褒美を取らせる」
水色の瞳にこもる、意思。

「——国を、取り返してくる」

その言葉に、みんなが不敵な笑みを返した。

Episode:103

Lowell side

『我らの鱗は硬い。好きなところに足をかけていいぞ』

言いながらも、竜など触ったことのないローウェルに気を使ったのだろう。老竜は首を下げ、乗りやすいようにしてくれた。

首の付け根のところに、またがる。自分で一行に言ったとおり、このままアヴァンシティへ向かうつもりだ。

竜が羽ばたき始める。この巨体がどうやってと思うが、意外にも簡単に浮き上がった。

「やあん、待って待って、ミルちゃんもー！」

舞い上がるうというところで嬌声が聞こえた。

『どうする？』

「構わん、行ってくれ」

短く答えて真っ直ぐ前を見る。

後ろから何か騒ぐ声が聞こえたが、振り返らなかった。自分が見るべきは未来であって、過ぎ去った過去ではない。

竜はすぐに高さを増し、眼下に黄色く色づき始めた山脈が広がった。

雄大な景色。アヴァンの国が建つ遙か昔から、ほとんど変わっていないだろう。

「建国王も、これを見たのだろうな」
なんとなく呟く。

定かではないが、見えている範囲はおそらくほぼすべて、アヴァンの版図のはずだ。

その大きさと、いずれはそれを預かる自分の小ささ。

だが不思議と、怖いとは思わなかった。

かつて何人もの王が通った道だ。けして楽ではないだろうが、覚悟を持って死ぬ気でやれば、やれないことはないだろう。

竜が旋回したあと、水平飛行に移った。

びょうびょうと耳元で風が鳴る。

「やぁん、おーちーるー」

「……え？」

風の中にあらぬ声を聞いた気がして、思わず声が出た。

『どうした？』

「いや、今何か声が聞こえた気がしたが……まあ空耳だろう」

この答えに、竜がぐるぐるという調子で笑った。

『お前の仲間が、尻尾にしがみついている。だからさっき、どうするときにいたのだが』

「なんだそれは……」

呆れてものが言えないとは、こういうことを言うのだろう。

尻尾にしがみついているのは、おそらくあの破天荒な娘だ。何を思ったか知らないが、飛び立とうというところで飛びついたに違いない。

深いため息をひとつついてから、竜に頼む。

「さすがに落とすわけにはいかん。背中なりに乗せてやれないか？」
『よかるう』

速度と高度を落として、竜が一旦着陸した。

Episode : 104

「助かった」

「まったく、何を考えているんだ。無謀にもほどがあるぞ」
だが少女は堪えた様子もなく、竜の背中に上がってくる。

「僕に掴まっておけ。落ちてはかなわん」

「はい」

ローウエルの身体に細い腕が回された。

「いいよー」

「耳元で大きな声を出すな。いいぞ、行ってくれ」

再び竜の身体が舞い上がる。

目的地のシティは、そう遠くない。どのくらいの速度かは分からないが、車よりは早く着くはずだ。

「ねえ、殿下？」

しばらくして、少女が話しかけてきた。

地上を見下ろすのも、少し飽きてきたのもあって、付き合っ気になる。

「なんだ」

「んー、なんでもないかも？」

一瞬殺意が湧いた。

「そんなことばかり言っているなら、落とすが？」

「やーん、殿下乱暴」

何を考えているのか、本当に分からない。

さすがに疲れを覚えてため息をつく、また少女が話しかけてき

た。

「ねえ殿下、ルーフェ諦めたんだ？」

「そういうわけではないが……」

そんなふうに、綺麗に吹っ切ったわけではない。

ただ、自分というものを思い知ったのだ。

竜に襲われるというあの瞬間、ローウェルの脳裏をよぎったのは、国と公爵家のことだった。

自身の権力欲を満たすことしか考えていない、そういう連中に乗っ取られそうなアヴァン公国。

政治に興味などまったくなく、そういう連中が上に立つことがどれほど恐ろしいかも気づかず、聞こえのいいことだけに耳を貸す国民。

長い間斜陽の国を、それでも必死に支えてきた、潰えそうな公爵家。

亡国の濁流はずいぶん前から押し寄せていて、水漏れしそうな堤防で、かろうじて堰き止めている状態だ。

そこへ自分の死、あるいは継承権の喪失が加われば、一気に決壊するだろう。

これだけは避けたい。そう思った瞬間、自分はルーフェイアに命令を出していた。

——死に繋がる命令を。

間違いではない。自分と彼女の立場や能力、契約、それに起こる悲劇と被害をすべて考え合わせれば、いちばん妥当な行動だ。だがそつだとしても、彼女を死に近づけようとしたことには、変わりな

か
っ
た。
。

Episode : 105

これに加えてさっきちらりと竜が言ったことが本当なら、彼女は本来、裏の世界の人間だ。

要するに……立つ場所が違いすぎるのだ。なのにこちら側へ来いと言っのは、おそらく悲劇しか生まない。

それでもルーフェアにその気があればいいが、残念ながらまったくなさそうだ。

要するに、未練がましく後ろ髪を引かれながらも、心変わりを待っただけだった。

「殿下もたいへんだねー。やめちゃえば？」

「それが出来るなら、こんなことをするか」

同行したメンバーはもちろん、自分までもが命がけなのだ。やめる気なら、挑むほうがどうかしている。

「よーするに、公爵家に生まれたのが運のツキ、っと」

「まあそうだな。だがそのぶん出来ることも多いし、いろいろ見られるからな。なんとも言えん」

どんな立場であろうとも、同じことは言えるはずだ。ただその中でも今の自分の立場は、制約が多い反面、恵まれてもいるだろう。

「そういうお前こそ、なぜこの国にここまでする？」
逆に訊いてみる。

この少女、父親はユリアスの著名人だが、母はやむを得ぬ事情でアヴァンを出たはずだ。それなのに手助けに来るのは、なんとも不思議だった。

「お前の母親を、追い出したようなものだろう。憎くはないのか？」
「あたしのママ、そういうの言わなかったしー」
間の抜けた答えと、くすくす笑いが返ってくる。

「おかしい？」

「分らん。だが不思議だな」

一般的な行動から外れている人間など、理解できようもない。
またくすくすと笑ったあと、後ろの少女が答えた。

「ママね、いつも話してくれた。アヴァンがどんなに綺麗で素敵な国か。だからあたしまで、好きになっちゃった」

呆れるほど、単純すぎる理由。

「そんなことで、いいのか？ お前の一生を決めるだろうに」

「んー、でもほら、ちゃんと見たことないし。嫌うなら、見て聞いて知ってからでもいいかなーって」

あっけらかんと言われたことに圧倒される。

どこまでも自由。そんな言葉が脳裏をよぎった。

「ま、そう簡単に抜けらんないかもだけど？ でも、きっと何とかなるよ。だってママが、あんなに好きだった国だもん」

根拠というにはどうにも頼りないのに、揺るぎない自信。

「……礼は言おう。この国を嫌わなかったことに」

「じゃあそのうち、返してもらっね」

また聞こえる、くすくす笑い。

過去は過去と割り切り、過去に押し付けられた犠牲も割り切り、この少女は前を向いている。

Episode : 106

そんな思いを読んだのか、彼女が言った。

「犠牲とか殿下、別にいいよ？　うちのママだって、ぜんぜん思っ
てなかったし。分かってももらえなかったのは、寂しかったみたいだ
けど」

「そうか」

どう答えていいか分からず、そんな言葉になる。

後ろからは変わらず、くすくす笑い。

この少女は、本当に自由で強いと思った。本来ならひねくれて恨
んでもいいことを笑い飛ばし、「今」に対して現実的な判断を下し
ている。なかなか出来ることではない。

「また犠牲に、ならなければいいのだがな」

「だからいいって。それにそんなの、当人が納得しちゃったら犠牲
って言わないかもだし」

また前向きな言葉が返ってくる。

破天荒で常識無視で傍若無人で捉えどころがないが、この常勝思
考は本物だ。

「犠牲に泣け、しかし犠牲に怯えるな、か」

竜から伝えられた、建国王の言葉が口をついた。

上手く言い表した言葉だと思う。

あの少年はこの儀式を、駆け引きや腹黒さを測り教えるためのも
のと見たようだが、実際には違う。主眼は「人の上に立つという意
味」を教えるものだ。

「ここに詳細は書かない」。謀略王が何故そう書いたか、今なら

分かる。

僅かな手勢で策を凝らして竜を迎え撃ったとしても、危険はつきものだ。そのときどんな命令を出すかが、試されているのだろう。だからこそ、気心知れた少数の仲間だけで挑むように仕組まれている。

——今回は何か違う方向へ転がったが。

だが結果として、同じことをした。

ありとあらゆる人がハッピーエンドとはいかない。ならば全体をハッピーエンドとするために、どこをどうして誰をどう切るか。

多数の安穩とした人生のために、「自ら犠牲になる者」が必要になることはあり、その命令を涙を飲んで下す。

竜という絶大な力を得る代わりに、必ずそれを知るようにしたのだろう。

そうでなければ、ただの暴君になってしまう。

「どこへ降りるのー？」

背中から声が聞こえてきた。

「人の目を惹くのが目的だからな。公宮前の広場がいいだろう」
あそこは常に人で賑わっているから、報道が黙認することは不可能だ。それどころか、運がよければリアルタイムで流される。

「ふふ、楽しそ」

「お前も物好きだな。……とりあえず、父上に連絡しておくか」

巨鳥でも、無許可で首都を飛び回れば撃墜対象だ。ましてや竜では、それこそ巨鳥部隊に出迎えを受けかねない。

通話石をいじって、父に繋ぐ。ひとしきりくどくと心配の愚痴が流れたが、それは聞き流し、一息ついたところで切り出した。

「父上、僕は竜を得ました」

「竜？」

話が飲み込めなかったのか、向こう側の言葉が途切れる。

「竜を、得たとは……なにっ！ それは本当かつ?!」

「嘘についても意味がありませんよ、父上。今オロス山から、シテイへ向けて飛行中です」

今度は感極まったらしく、向こう側が詰まった声になった。

「そうか、竜か。これで公爵家を潰さずに済む。建国王のご加護に違いない」

それはどうだろうと一瞬思ったが、口には出さず、用件を優先する。

「それで父上、今も言ったとおり、シテイへ竜で向かっています。軍へ迎撃しないよう、連絡して頂けますか？」

「お、おお、そうだな。お前に傷ひとつでも付けたら、国軍と言えどもただでは置かん」

「それはあとで構いませんから、ともかく連絡を。着いてしまいます」

ここまで言うとなさすがに慌てたのだらう、「分かった」とだけ返ってきて、通話が切れた。

困った父だと、つい苦笑する。

尊大なところもあって誤解されがちだが、父は意外に心配性で、感激屋だ。情に流されやすい一面もある。

むしろだからこそ、姉姫を追い出した庶民を、いまだにあれほどに嫌うのだ。

ただ、あの父が王位を継いだらどうなるだろう、と最近思う。悪い人物ではないが、イザというときに感情的なものが優先されて、判断を誤りそうだ。

「お爺様と、話す必要がありそうだな……」
賢王と名高い祖父なら、この懸念も分かってくれるだろう。

「お爺様つて、王様のこと？」
「当たり前だ。他に誰が居る」

答えはなく、またくすくす笑いだけが返ってきた。きっと、こちらの反応を楽しんでいるだけなのだろう。

本当に分らない少女だ。しかもこれが、今回の立役者の一人なのだから、頭が痛い。

「ま、なんとかなるんじゃない？ お爺様と殿下と二人がかりなら」
さらに一拍置いて、思いがけぬ言葉がかけられた。

「何よりさ、殿下がお爺様にいろいろ習いに行ったら、すつごく喜ぶよ」

「ああ……そうだな」
王位にあるだけあって、祖父は何かと忙しい。そのためなかなか、会話どころか会う機会さえなかった。

「まったく。身内に会うのも大変なのだから、王族など碌なものではないな」

「んー、でも庶民でも、離れてると案外会えないよ？ ましてやし
エラなんて、もうそれどこじゃないしー」
さらに、重い事実を突きつけられる。

Episode : 108

結局、他人の環境は良く見える、というヤツなのだろう。得てして人はそういうとき、いい面ばかりを見て羨むものだ。そんなことを言っているうちに、王都が見えてくる。

ここからは、王族である自分の戦いだ。きちんと連絡が行ったのだろう、巨鳥部隊が出てきたが、攻撃されることはなかった。編隊が周囲に展開し、護衛をする。

「……彼らは何を、護っているのだろうか」
ふと出た疑問。

今でこそ王族だが、公爵家とて遙かに遡れば、どこかの一族でしかない。

そもそも視点を変えたら、王や国というのも幻のようなものだ。時に生まれ、消滅を繰り返す。

この眼下に広がる大地は変わらないのに、だ。

「何って、自分自身じゃない？」

「……意味が分からん」

後ろから聞こえた声に、言い返した。突飛なのはもう嫌というほど分かっているが、せめて他人に分かるように言えと思う。

「だからあ、自分自身。あとはせいぜい、家族？」

「それでは分からんと、今言っただがな」

言葉は通じるのに意味が通じない、これを今ほど実感したことはない気がする。

さすがに重ねて言われて、説明が必要だと悟ったのか、少女が考

え考え話し始めた。

「えっとねー、国のためとか仕事だからとか、いろんな理由あるけど。でも結局、自分のためだよ。そうしとけば自分が安泰だから、理由つけて幻みたいなもの、護るんじゃない？」

「そういう考え方が……夢の欠片もないな」

あまりのドライさに呆れて言うのと、まったくすすす笑いが返ってきた。

「だってー。現実見ないと、足元すくわれちゃうしー。てかね、そう思ってたて上手くいったら、よかったねーで済むもん」

「まったく。そこまで割り切られると、突っ込みようがないな」

口ではそう言いながらも、ある面では正しいとローウェルも思った。

一見華やかな王族としての仕事は、現実の中であがきながら夢を作り上げる、理不尽な作業の積み重ねだ。

「でも、何がどうだっていいんじゃない？ それでみんな納得してるなら。紙切れ一枚が、山の黄金より価値持つことだってあるんだもん」

「そうだな」

結局誰もが実体のない何かを現実を重ね、それが集まって組織や国に繋がるのだろう。

悩まなければならぬのは、その虚像が、上手く機能しているかどうかだ。

自身の持つ力もまた幻から来ていること。そうでありながら現実に影響力を持つこと。これを忘れなければ、そう大きくは道を外さないだろう。

Episode : 109

アヴァンシティのシンボル、公宮が近づいてくる。

「シティ、空から見るとすごいねー！」

背中で嬌声が上がった。

昔ながらの、大きく平らな石で組まれた石畳の道。重厚ながら綺麗な装飾がなされた、石造りの町並み。

広がる白亜の宮殿群は「世界一美しい」と言われて久しく、中央手前の本殿と、幾つも点在する離宮とを、緑の庭園が囲んでいる。

「……巨鳥部隊の忠誠心が異様に高い理由が、分かった気がするな」
「だねえ。空から毎日こんなの見てたら、そうなっちゃうねー」

歴史あるこの国に生まれてよかった、素直にそう思える光景だ。
眼前に広がる景色に見とれながら、ローウェルは老竜に話しかけた。

「すまんが少し速度を落として、旋回してくれないか？」

「構わぬが、何故だ？ 降りるだけなのだろう？」

不思議がる老竜に、答える。

「巨鳥部隊がいるからな。こちらの動きを分かってもらわないと、混乱が起きる」

『なるほどな、了解した』

竜が少しずつ速度を落とす。

巨鳥部隊もすぐ気がついて、同じように速度を落としていき、並んで旋回飛行に入った。

竜と巨鳥部隊の空中ショーに気づいたのだろう、広場に居た人々

が、こちらを指差しながら騒いでいる。

それからふと思いついて、竜に問いかけた。

「仮に襲われたとき、その……なんだ、お前の障壁とやらは、僕も守れるのか？」

『私に触れる距離なら、一緒に守れるな。だが離れては無理だ』
予想以上の答えだ。

「なら、僕に魔法で攻撃するものが居ても、大丈夫ということだな」
『人の子一人も守れぬとあつては、竜の名折れだ』
微妙に趣旨の違う、だが明快で意思を感じさせる言葉。「竜を得る」ということの意味を、やっと少し知った気がする。

何度か旋回したあと頃合と見たのか、竜がゆっくりと高度を下げた。

広場の人々が、慌てて場所を空ける。

と、その空いた場所へ我が物顔に、報道関係者らしき人間たちが出てきた。宮殿前の広場は、毎日どこかが撮影に出ている。だから今日も居るだろうと踏んだのだが、当たったようだ。

『あの者ら、どかぬがどうする？』

「構わん。そのまま降りてくれ」

危険をかえり見ぬ根性は見上げたものだが、何をしてもいいということにはならないはずだ。

それに撮った写真や画像は、連中はこちらに断りもなく、勝手に高く売るのだ。文句を言われる筋合いはなかった。

竜も状況を飲み込んだのだろう、含み笑いのような声を立てて、容赦なく降りていく。

報道陣はかなりギリギリまで粘っていたが、さすがに竜の下敷きにはなりたくなかったらしい。最後の最後で、転げるようにして逃げ出した。

その際本当に転んだり、写影機や何かを取り落とされたりしたようだが、なんとも思わない。むしろ、少しは思い知ればいいと思う。

思ったよりは軽く、だがそれなりの地響きを立てて、竜が降り立った。

広場にどよめきが走る。

衛兵たちが駆けつけ、竜と自分とを取り囲み、銃を構えた。

それを眺めながら、竜の上に立ち上がる。

居合わせたこの国の者だろう、「殿下？」という声がそこかしこで上がった。

念のため、竜に小声で尋ねる。

「あの程度なら、防げるのだろう？」

『無論だ』

自信に裏打ちされた答えが戻ってきた。

なんとなく頷いてから、兵たちに命じる。

「衛兵、その銃を下げる」

駆けつけた兵たちの中から、隊長らしき人物が進み出た。

「自分は、殿下と確信しております。ですが、確認する術がございません。大変恐れ入りますが、このままでお許し願えませんか？」

「そうか、ならば許そう。但し撃つなよ？」

冗談交じりに言つて、懷から竜玉を取り出す。

事の成り行きを興味津々といった顔で、報道が写影に収めていた。思つ壺だ。

高く宝珠を掲げ、言つ。

「我が名はローウェル」ジエレマイア「ド」ファレル。建国王メルヒオルの血を継ぐ者なり」

偶然居合わせた者たちが、一瞬にして聴衆へと変わった。

「まず儀式に絡み皆に心配をかけたことを、ここに詫びる。わけあって今日まで、公に出来ずにいた」

次に何が来るのかと、固唾を吞んで見守る聴衆たち。

それを見回し、さらに言つ。

「だが今、僕は竜を得て戻つた。よつて宣言する。このローウェル」ジエレマイア「ド」ファレルこそが、継承権第三位なり！」

広場が水を打つたように静まり返つたあと、老人が叫んだ。

「りゅ、竜騎士じゃ！ 伝説の竜騎士じゃ！」

一瞬の間。

そしてざわめき。

「殿下、無事だったの?!」

「建国王と同じ、竜騎士だって?!」

さらに歓声。

「ば、万歳っ！ ローウェル殿下、万歳っ！」

「継承権、おめでとうございます！」

何度も何度も叫ぶ者。

隣と肩を叩き合う者。

感極まったのか、泣き出す者。記念とばかりに写影を撮る者、な

ぜか踊りだす者……。

人々の歓喜の聲が、広場に幾重にもこだまする。

Episode : 111

それらを見ながら、不思議とローウエルの心は澄んでいた。
不安はあるし、問題は山積みだ。妨害も多いだろうし、情勢も楽ではない。

だが、こうやって喜んでくれる民衆がいるかぎりやれるはずだし、やらなくてはならない。

「こ、この、人民の敵めっ！」

突然、怒声が響いた。

続いて発砲音。

だが弾は竜の持つ障壁に阻まれ、ほぼ同時に後ろの少女が動いた。
ふわりと飛び降り、発砲した相手——先ほどの隊長——へ一瞬で詰め寄る。

さらに強烈な蹴りが、容赦なく股間へ叩き込まれた。

「衛兵、この反逆者を捕らえなさい！」

よく通る声に命じられて、周囲の兵たちが慌て隊長へ飛びかかる。

「大丈夫か？」

答えはなく、少女がさらに動いた。

捕り物に参加せずこちらに銃を向けていた兵に、肉薄。

その男が倒れ伏した時には、もう一人の背後へ付いていた。

三人目が倒れて、やっと少女が動きを止める。

「あーもう、多すぎ！」

紛れ込んでいた左派の過激派が、多すぎると言いたいのだろう。

「……さすがだな」

「まあねー。こういうのに特化して、鍛えられてるしー」
あっけらかんと言う。

やつと事態を理解したのだろう、今頃になって、広場に居合わせた人々が騒ぎ出した。

倒れた兵と広がる地だまりに女性が金切り声を上げ、その声で周りまでパニックに陥る。

「まずいな。子供が踏み潰されかねん」

他人を押しつけて逃げようとする人々は、弱者にとっては脅威だ。

「竜さん、ちょっと吼えて！」

『こっか？』

少女に伝えて、竜が轟くような咆哮を上げる。害意がないと分かっているローウェルでも、思わずすくむほどだ。

当然ながら人々は、縮み上がって動きを止めた。

「殿下！」

「分かった」

ミルドレッドという少女、相当に頭が回る。たしかに今なら、人々を静められるだろう。

「――皆の者！」

不思議なほど、声が広場によく響いた。

「襲撃者はすでに排除した。もう安全だ！」

皆が驚いたような表情になり、次いで安堵の表情に変わる。

「動かないで、周りを見て欲しい。近くに怪我人は居ないか？ 居たら、助けてやってくれ」

広場の何ヶ所かで、動きがあつた。どうやら転倒した老人や子供を、助け起こしているらしい。
そこへ、兵たちを向かわせる。

Episode : 112

——それにしても。

こんな場所を守る近衛兵にまで、革命思想の持ち主が入り込んでいるとは、予想外だった。

そして同時に、一部の謎が解ける。

この広場は観光名所だけあって、不審物や爆発物が仕掛けられることが多い。だがそれが最近特に多く、警備を厳しくしてもなお、数が減らなかった。

よほど頭のいい人間が、左の過激派に居るのだろうと思われていたが、内通者がいるなら話は別だ。こちらがどんなに警備を刷新しても、そのたびに漏れていたのだろう。

つい、大きなため息をつく。

この調子では全軍はもちろん、警察、教師、病院、官僚等々……国の主要な部分のほとんどへ、入り込まれているはずだ。

国を盗られる寸前で気づいたのはいいが、修復は並大抵ではない。それに相手も露見した以上、戦法を変えて全力で向かってくるはずだ。

「全面激突か……たまらん」

ひょこひょここと戻ってきた少女が、不思議そうな顔になる。

「怖いのか？」

「いや、面倒だな」

敵がどこに居るか分からない上、数も知れない。加えて民衆の支持も、どこまで持つか分からない。何とかするには、気の遠くなるような時間がかかりそうだ。

とは言え、やらないわけには行かなかった。

「ほら殿下、みんなが見てるよ？」

「ん？ ああ、そうだな」

いつまでもため息をついてはられない。何しろ自分は、この国では注目の的なのだ。

深呼吸して、呼びかける。

「皆の者、騒ぎを起こして済まなかった。怪我をしたものは速やかに、ここの救護所へ申し出て治療を受けて欲しい」

またざわめきが広がったが、否定的なものではなさそうだった。少し間を置いて、いちばん言いたかったことを切り出す。

「このとおり今この国は、やや不安定な状態にある。旧態依然としたこの国を、根本的に変えようという者たちが、数多く居るためだ」
一部は意味が分かったようだが、大多数はきよとした表情だ。おそらく革命やクーデターなど、魔視鏡の向こうのことではないのだろう。

「この国が歴史あるがために、古い部分があることは僕も認める。だがそれは、必ずしも悪いことではないはずだ。積み重ねた時間だけが生み出すものが、間違いなくあると僕は思う」

否定的な声は上がらなかった。

「この国を変えよう。善き物は残して、悪しきところを変えよう。誰もが誇れるこの国を、さらに誇れるものにしよう」

注がれる、数え切れないほどの瞳。

期待しているのかもしれないし、嘲っているのかもしれない。だがこちらを見てくれていることだけは、確かだ。

「僕は誓う。この竜と共に、この国のために生きる。たとえどう報道されようとも、これが僕の思いだ」

一旦切って、息を吸う。

建国王メルヒオルも言った、この国の者なら誰もが知る言葉だ。

「——麗しき国アヴァンに、栄えあれ！」
地を揺るがす歓声が上がった。

Episode : 113

R u f e i r

アヴァンは平穩だった。

この国の人にとって「竜騎士」というのは、ものすごく意味を持つものだったらしい。あんなに公爵家を非難していた論調が、あっという間に変わってしまった。

それでも報道なんかはまだ、儀式の不正を言ったりしてるけど、国民はほとんど気にしてないと言う。

——いいのかな？

こんな簡単に考えが変わってしまうなんて、問題だと思うのだけど……。

あれほど大騒ぎして、公爵家を追い出してもいいってほどだったのだ。なのに竜を連れてきただけで正反対の意見になるなんて、ちよつと流されすぎだと思う。

ただ公爵家は、当面はこのまま刺激せずにやるってことだった。いいかどうかは別にして、今のところ世論は、公爵家の味方だ。だつたら下手にいじらず、この状況を利用しながら舵を取れば、リスクハイリターンになる。それを狙ってるんだろう。

どっちにしても当面はこの平穩が続くそうだから、悪くない結末だ。

「荷物、まとまったかい？」

「え？ うん。もともと、そんなにないし……」

必要な物はアヴァン側で用意してくれたから、自分で持ち込んだ

ものはほとんどない。使い慣れたツールキットや衣服、あとは武器くらいだ。

「あーあ。今回はドレス着れなかったねー」

「あんなヒラヒラしたもの、動きづらいだけじゃないか」

シーモア、やっぱりドレスはキライらしい。でも似合ってたし素敵だったから、もったいない気がする。

「お前がドレスとか、想像つかねーな。つか着れんのか？」

「うるさいよ！」

シーモアが殴ろうとしたけど、イマドは上手く避けた。

「なに避けてんだい！」

「ンなこと言ったって、ふつう避けっだろ」

やり取りが面白くて、思わず笑ってしまう。

「なんだ、ドレスというからには、パーティーでもしたいのか？」

それなら晩餐会でも開いてやるぞ」

そんなことを言いながら、殿下が部屋に入ってきた。

「殿下ほんと？ 開いてくれるの？」

ナティエスの勢いに、殿下たじたじだ。きつと冗談で言っただけで、本気じゃなかったんだろう。

「いやその、あれだな、来月まで待てばあるぞ。僕の継承権が決まったからな」

「えー、それじゃ出れないじゃない。もっと早くしてよ」

ナティエス、メチャクチャだ。

「出来るわけがないだろう。内外から人も呼ぶんだぞ」

「あんもう、残念。こないだはテロで中断だったから、今度こそ出たかったのに」

中断されて残念だったのは分かるけど、何か間違ってる気がする。

Episode : 114

「まあ、機会があつたら出るといい。それより明日帰ると聞いたが、本当か？」

顔を見合わせた後、代表して先輩が答える。

「もう任務も終わってますからね。ああでも、追加でお金を出すなら、居てもいいですけど？」

相変わらず先輩、高飛車だ。

殿下のほうは、残念そうな表情になった。

「そうか、帰るのか……せめて観光でも、させてやりたかったんだが」

「じゃあ私だけでも。でもこの子たちは定期テストがありますから、返してやらないと。まさか殿下も観光で、この子たちの成績は下げたくないでしょう？」

先輩の口から出た言葉に、みんな青ざめる。

「テスト……忘れてた」

「範囲どこまでだったっけかね？ 忘れちゃったよ」

なにしろここへ来たのが、テストの直前だ。それだけでも心配なのに、単なる野営の護衛だったのが本当の儀式にまでついていくことになって、だいぶ予定が延びてる。

任務だからそれなりの対応はしてくれるだろうけど、準備をまったくしてないのと思うと、頭が痛かった。

「まあ頑張るのね。任務についてきて成績が落ちたなんて、言わせなくてよ。私の名折れだわ」

なんか関係ないんじゃないか、って気がしたけど、先輩相手に言えるわけがない。

「とりあえず、帰りの列車の中で、見るくらいはしてあげるわよ。追試があるでしょうし」

「え、追試受けられるんですか？」

思わず言つと、みんなの視線がこっちに集まった。

「そりゃ、あるだろ。つか俺ら、追試しか受けつとこねーし」

「それも間に合わなかったら、追々試あるかなあ……でも、後がないよね」

何か想像してたのと、違う感じの会話だ。思い切つて訊いてみる。

「追試つて……二度目の試験、でしょ？」

「そだよ」

頷くみんな。

「それつて、頭いいから受けさせてくれるんじゃないの？」

何しろ二度目だ。一度目じゃ満点とかで点が付けられなくて、もつと上の問題を出すはずだ。

けどみんなは、顔を見合わせた。

「あのねルーフエ、追試つてね、そゆのじゃないよ？」

「え？」

何かあたし、かん違いしてるんだろうか？

「えつと、出来るから受けられるんじゃないの？……ないの？」

「反対反対。出来なすぎてしょーがないから、もっかい勉強させて、試験受けさせるの」

「え……」
あたしが思ってたのと、まったく逆だ。

Episode : 115

「まあお前、追試とか縁ねーもんな。出来っから」
イマドが笑いながら言う。

「てかさ、出来て追試なら、ルーフェが真っ先に追試だよ？ たまに満点とってるじゃない」

「あ、そっか……」
言われてみればそのとおりだ。

「まあその調子なら、少なくとも1人は問題なさそうだな」
殿下が楽しそうに笑う。このところ難しい顔が多かったから、ちよつと嬉しい。

「ところで明日は、何時に帰るんだ？」

「あら、聞いてません？ ここの使用人、少々報告が遅いですわね。午前中には出ると伝えてましてよ」

先輩、絶好調だ。

「戻ってそのまま、この部屋へ来たからな。あとでまとめて報告はあるだろう。それにしても、午前中に発つとはな」

「何か問題でも？」

挑発的な先輩の口調を、殿下が手を振っていない。

「大した話じゃない。時間があれば、竜に乗せてやろうと思ったただけだ」

「え、やだ、あたし乗りたい！」
面白いことが好きなナティエスが、真っ先に声を上げる。

「先輩、乗りましようよ。こういうの、めったにないし」

「別に私はいいわ。巨鳥と同じようなものでしょ」

先輩、取り付くしまもない。

「俺も別にいいな。ヘタに目立ってもヤベーし」

めんどくさがりのイマドも、乗る気はないらしい。

ちよつと考える。

イマドが乗るならあたしも乗るけど、1人でわざわざ、乗せてもらうほどのことでもないだろう。

それに確かあの竜は、あたしにも協力してくれると言っていた。だったら1回乗せてもらうくらい、お願いすれば出来るはずだ。

それを殿下に言つと、なんだか残念そうな顔になった。

「そうか、乗らないか……観光の時間もないからせめて、と思ったんだが」

「え、あ、えつと、あの、すみません……」

慌てて謝る。せつかくの殿下の気遣いを無駄にしようなんて、なんて気が利かないんだろう。

「そしたらあの、竜——」

言いかけたところで、はじけるような声が重なった。

「殿下ー、いーいのーかなー？」

ミルだ。

アヴァン出身なだけあって、ミルはこの国に知り合いが多いらしい。そのせいか谷から戻った後も、呼ばれては出かけることの繰り返しだった。

でも今日は、割と早く片付いたんだろう。

Episode : 116

「いいとは……何がだ」

「えー、だって。竜に女の子乗せるって、『自分のもの』って意味じゃないー」

ミルの言葉に、わっとみんなが騒ぎ出す。

「やだあ殿下、そーゆー下心だったんだ？」

「姑息だね。そんな不意打ち食らわすくらいなら、正々堂々と言ったらどうだい」

よく分からないけど、殿下が悪いみたいだ。

でもなぜそうなるのかは、今ひとつ分からなかった。

「いい、ルーフェ。この国じゃ竜って、権力の象徴だよね？」

「あ、うん」

考え込むあたしに、ミルが説明を始める。

「でね、それに乗せるってことは、『こいつの後ろには、竜と王が付いてるぞ』って意味になっちゃうわけ」

「あ、たしかに……」

意味は通る。

不審な人間を後ろに乗せるなんてしないから、一緒に乗るってことはイコール、近しくて信頼できる人と考えていい。

そこから派生して、竜に乗せてもらうことが、権力のおすそ分けに繋がるんだろう。

「けど……なんで、自分のもの？」

みんなが一瞬言葉を失った。

「まあ子猫ちゃんじゃ、仕方ないかしらね？」
イオニア先輩が笑いながら言う。

「とりあえずこの国じゃ、竜に異性を乗せるってことはつまり、婚約者に近い意味になる、とでも覚えておけばいいわ」
「え……」

さすがにそれは困る。

「あの、殿下、あたしそういうのは、えっと、ちょっと……」
「いや待て誤解するな、僕にも許婚くらいいるぞ！ だからそういう意味じゃない！」

「——えっ？」

再びみんなが、言葉を失った。

「いいなずけ……って、婚約者っ？！」
「うそお、殿下もうそういう人居たんだっ！」
「いったい誰なの、その玉の輿は！」
大騒ぎだ。

「機会があつたら、ちゃんと会わせてやる。ともかくそういうことだ、別に乗せたからって、そういうつもりはないぞ！」
たぶん殿下、言い訳してるんだろうと思う。

どっちにしても、今回は婚約者とか、そういう意味はなかったみたいだ。

——だったら、ちょっとくらいいいかな？
そんなふうに思ってから、気づく。

「そういえば、ミル……乗ってなかった？」

谷で竜を従えた直後、ミルときたら竜の尻尾につかまって、殿下と一緒にシテイへ向かったはずだ。で、そのあと無事だったんだから、落ちたりしないで着いたんだろう。

それに聞いた話じゃ、殿下と一緒に広場に降りた後、襲ってきた暴漢を叩きのめしたつても言う。

「このままじゃ、ミルが婚約者つてことに……ならない？」

さっきの話どおりなら、見た人はみんなそう思うはずだ。

でもミルは、にこにここと笑ったままだった。

「ん、たぶんだいじょぶ。ほら、いちおう殿下守ったから、護衛つてことになってるし」

「そうなんだ……」

殿下が大変な目に遭ったのは知られてるから、その辺で納得してるのかもしれない。

「ただほら、報道うるさくてー。だからあたし、別ルートであいつら振り切ってから、シエラ帰るね」

「あ、うん」

やっぱりいろいろ、あるみたいだ。けどミルなら大丈夫だろう。

「そしたらあの、竜……」

言いかけたところで、また別の声が重なる。

「にしても殿下、あなたホントにやれて？」

「どういう意味だ」

返されて、イオニア先輩が傲然と言いつた。

「継承権なんか得て、ちゃんとともに政治に関われるのか？ってこと。世間知らずのお坊ちゃまなんて、現実には邪魔なだけだわ」「手厳しいな」

意外にも殿下は、笑っただけだった。前ならきつと激怒してただろうから、ずいぶんな変わりようだ。

「未来のことなんて、正直分からん。だが僕がブレなければ、そうは間違うまい。それより――」

殿下がまっすぐ、イオニア先輩を見る。

「お前こそなぜ、僕に手を貸した？ 『面白そうだった』と先日は言っていたが、とてもそうとは思えんぞ」

今度はイオニア先輩が笑った。

「殿下の目、案外見えたってことかしら？」

「そのくらい、分からんようではやって行けん。で、何故だ？ 本当の理由を聞かせてほしいのだが」

少し考え込んでから、先輩が言う。

「そうね。殿下には教えてあげてもいいかしら？ 知っておいたほうが、いいことでしょうし」

どこか寂しさを感じさせる声だ。

Episode : 118

「私、ハニアの出身なのよ」

「あ……」

ロデステイオに隣接する小国、ハニア。山岳地帯を領土とする少数種族の、独自の文化を持つ国だった。

過去形なのは、もう存在しないからだ。

たぶん10年くらい前だったと思うけど、ロデステイオが突、ハニアに突然侵攻した。そしてそのまま、併合されてしまったのだ。

「ハニアはね、温厚な国だった。平和主義で、中立国とも称してたわ」

「そんな立派な国、あるんですねー」

感心したみたいにナティエスが言う。彼女は独裁大統領の居る、騒乱続きでのロデステイオ出身だから、憧れるんだろう。

けど先輩の表情は、硬かった。

「立派じゃないわよ」

吐き捨てるように言う。

「ちつとも立派じゃないわ。隣から狙われてるのにも気づかず、平和平和と呪文みたいに唱えて共生外交とやらをやらかして、ロデステイオ人を招き入れたんだから！」

「え……」

隣国と協調は大切だけど、警戒は最大限に。外交の鉄則だ。

理由は簡単で、どこの国だって「自国の利益」を最優先に考えるからだ。だから一見協調してても水面下じゃ、常に利益の奪い合い

が発生する。片手で握手して片手で殴り合いとか、笑顔で談笑してテーブルの下で足の踏み合いとか、言われる所以だ。

なのにそこで、1国だけのんびりと構えていたら……それはただの生贄だろう。

「平和は大事よ。共生もいいわ。でもね、国を滅ぼしてまですることじゃないでしょう！」

先輩の言葉は激しい。

「独自路線を行くんだと言って、大国エバスとの同盟を解消して。武器があるから攻められるんだと言って、軍備を削減して。拳句に他国人を招き入れて、政治にまで参加させたわ。

どうなったと思う？」

聞かれるまでもない。そんなの、「占領してください」と言うようなものだ。

「よく分からんけど、政治って違う国の人間にさせていいのかい？」

「なんかヤバそうじゃないか」

「んー、ダメじゃないかなあ」

シーモアとナティエスがそんなことを言う。

「つかんなことしたら、よその国の人間に都合いいように、やられるだけだろ」

「だよねえ」

やりとりを聞いて、先輩がうなずいた。

「さすが学院生ね。そのとおりよ」

あたしたちの上に、視線が注がれる。

Episode : 119

「もともとハニアは、そんなに人口は多くなかったわ。そこへ政治へ参加できるようになったロデステイオ人が、大量に流入。さらに報道を握られて煽られて、みんな浮かれ頭よ。共生を合言葉に、どんどん受け入れたわ」

「うわぁ……ホントに浮かれ頭」

ナティエスの言葉は、居合わせたみんなの気持ちを代弁してたと思う。

先輩もため息をついた。

「どうして気づかなかったのかしらね？　ともかく分かったときには手遅れ。ロデステイオ人への差別をやめさせるって口実で、向この軍が一気に雪崩れ込んできたわ。加えて国内へ流入してたロデステイオ人も、一緒に武装蜂起。

しかも止めようにも、とつくの昔に流入した外国人の手で『他国人への排斥禁止』の法案が通されてて、取り締まることさえ出来なかったのよ」

なんというか、絵に描いたような国家乗っ取りだ。

「……あんまアホっぽすぎて、ちと信じらんないんですけど」

「私も自分で言ってる、そう思うわよ」

イオニア先輩も盛大なため息をつく。

「で、それが今のアヴァンと、酷似していると言っわけか」
「ええ」

殿下に聞かれて、先輩が肯定する。

「報道を押さえられて、国外へ内通してる者が居て、手引きをして。しかも国民のほとんどは、それを知らずに報道の言うがまま。そっくりよ」

今度は殿下が、盛大なため息をついた。

「正直、頭が痛いぞ」

「でしょうね」

同じ目に遭った先輩は、よく分かるんだろう。ちよつと肩をすくめてみせる。

「ただ、アヴァンのほうがまだマシだね。外国人がそんなに流入していないし、政治にも関われない。最後のチャンスね」

「で、僕に竜を得るよう、けしかけたわけか」

「そういうこと」

悪びれもせず、先輩が言った。

「まったく。もし僕が死んだら、どうするつもりだったんだ？」

「さあ？ でもあのままなら、革命かクーデターでしょう。そうなれば公爵家なんて、漏れなく処刑よ」

さらに先輩、怖い事実を指摘する。

「どうせ行き着く先が同じなら、出来る限りあぐ。似たようなこと、殿下も言っただけだったかしらね？」

「言っただけかしらね」

殿下がとぼけてるのは、認めるのが恥ずかしいからだろうか？

「まあいずれにせよ、時間は稼げた。礼を言っぞ。世論もだいぶ変えられたしな」

「あら殿下、お礼を言うのは早いかもしれないよ？ もしかした

ら竜を得たこと、心の底から後悔する日がくるかもしれないし」
イオニア先輩、ほんとに意地が悪い。

Episode : 120

「まったく……せつかくやる気になったのに、水を差すようなことを言うな」

「これきしのこととやる気がなくなるなら、最初から、やらないほうがいいでしょう?」

毒舌の応酬。でもやってる当人たちは、なんだか楽しそうだ。

「とりあえず、ハニアの二の舞は踏まぬようにせねばな。テロリストのあぶりだし、報道の是正、国民の政治教育……やれやれ」

殿下がまたため息をついたけど、そんなに嫌そうには見えなかった。やっぱりこの国が、好きなんだろう。

と、ドアがノックされた。

「誰だ、入れ」

殿下の声に応えて、ドアが開く。

「あ、お漏らしおじさん!」

ナティエスに大きな声で言われて、入ってきた人がうなだれた。

「それは言わないでくれよ……」

ちよっと気の毒だ。

「へえ、生きてたのかい。てつきり肅清されたかと思ったよ」

「……されるとこだったよ」

げんなりした顔で、お漏らしおじさん——名前なんだっけ——が言う。

「帰って報告したとこまでは、良かったんだ。信じてもらえたし」
「で、そのあとヘマしたと」

シーモアが突っ込んだ。

「何で分かる——っていうか、調べたんだよ。幹部がどこの誰で、どことどう繋がってるか。そしたら途中で怪しまれちゃって」

「そりゃふつう怪しまれるって」

会話だけ聞いていると、どっちが年上だか分からない。

「でもそれでも俺、早めに逃げ出したんだ。だから何とか助かったよ」

このおじさんも修羅場くぐって、少しは対処が上手くなったんだろっ。

「それにしてもおじさん、何でここに？」

不思議そうにナティエスが聞く。

答えたのはおじさんじゃなくて、殿下だった。

「逃げ込んできたのでな、匿うのも兼ねて、この屋敷で臨時に雇った。いちばん安全だろうしな」

「たしかに」

いくらテロリストでも、この屋敷の中にまでは、なかなか手が出せないだろう。

「当分家族とは会えんが、我慢しろ。命には代えられん」

「はい、もちろんです！ このご恩、一生忘れません！」

おじさん今日も、最敬礼しそうな勢いだ。

「まったく。その調子でやっていたら、持たんぞ？ 大変なのは、これからだからな」

殿下にやんわり舞い上がりすぎを言われて、おじさんがまたうなだれた。

——ちょっと、可愛いかも。
なんだか子供みたいなのがあって、このおじさん、憎めない。

Episode : 121

「けどこのおっさんがここに居るってことは、殿下、けっこういろいろ分かったんじゃないのかい？」

「察しがいいな、そのとおりだ」

シーモアの問いに、殿下がにやりと笑った。

「早々に逃げ出してきたから、核心には届かなかったが。だが取っ掛かりは、おかげで掴めた。今公安に、情報を元に洗い出しをさせているところだ」

「どうやらこのおじさんのおかげで、過激派の実像がだいぶ浮かび上がってきたらしい。」

「じゃ、あの二セ学校なんかも？」

「ああ」

あたしたちがいちばん気になってたことも、表沙汰になったみたいだ。

「勉強をしたいというのに付け込んで、ムリに借金を負わせてなど、やり口がどう見ても詐欺だからな。その線で攻めている」

「ずいぶんいろいろ、一気に動いたね。少しは良くなりそうじゃないか」

言われて殿下も嬉しそうだ。

「まあ、すぐにそう大きくは変わらんだろうがな。それでも何もしないよりは、ずっといいだろう」

そこで一回切って、殿下が笑って言う。

「ところで続きは、食事をしながらでもどうだ？ 舞踏会とまでは

行かないが、ささやかな晩餐は用意してみたんだが」

「もちろん！」

みんなの声が重なった。

「うつわ、すっごーい！」

「綺麗だね、思った以上だよ」

夜の空に声が響く。

あたしたちが今いるのは、アヴァンシティの上空だ。

竜に乗る乗らないの話は、意外な経路で実現した。話を察した殿下の老竜が、仲間を呼んでおいてくれたのだ。

これなら二人づつくらい乗れば全員飛べるから、帰る前にみんなで夜景でも見てみよう、ってことになった。

巨鳥は夜は飛べないから、空から夜景を見るなんて、きっと二度とないだろう。それに夜空なら、姿を見られたってどこの誰かまでは分らない。

眼下にシティが広がる。

世界でも屈指と言われる大都市は、窓や街灯の明かりで闇に浮かび上がって、とても幻想的だった。

——それこそ、幻みたいに。

不思議だな、と思う。

国も権力も国境も法律も、実体を持たない虚像みたいなものだ。なのに厳然としてあって、みんなにいろんな形で影響を与えてる。

その一方で、窓の明かりは現実だ。あのひとつひとつに、人の姿がある。

「あたしたち、何を見て何を分かつてるのかな……」

「さあな。つかきつと、永遠にわかんねえだろ」

一緒に乗ってるイマドから、そんな答えが返ってくる。

「けどよ、必死に知ろうとしてりや、なんか見えてくんじゃねーか？」

「そだね」

けつきよく、そのつどひたすら悩んで考えるしか、ないんだろう。
竜が旋回して、高度を落としていく。

この窓の光が、消えませんかように。そんなことを思いながら、あたしも屋敷へと戻った。

あとがき

いつも読んでくださって、ありがとうございます♪

なんとか完結しました…… 11月末からいろいろ修羅場で、し

んどかったです。でもおかげで、書くのは少し早くなったかな？（

笑）

明日からまた、新連載になります。よかったらお付き合いください♪

感想等、大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527i/>

虚像の護衛 ルーフェイア・シリーズ12

2011年2月5日06時57分発行